

IV章 尖閣諸島古賀村の昔と今

1、久場島古賀村跡の遺構・生活跡調査を
新納 義馬

2、魚釣島・南小島古賀村盛衰考
編集部

久場島古賀村跡の遺構、生活跡調査を

— 集落跡 高波にもさらわれず、今なお木々の茂みに眠る —

尖閣諸島文献資料編集会
会長 新納 義馬



1、屋敷跡に 転がっていた甕 一個担いできた

久場島 米軍爆撃演習地で上陸禁止 1971、80年に2回上陸した

— 久場島は、大正島と並んで、米軍爆撃演習の島で、上陸禁止の島だったわけですね。

新納: そうです。1972年の復帰までは、米軍が永久危険地に指定して上陸禁止でした。復帰後もしばらくは上陸できなかったと思う。

高良先生は1950年から68年まで尖閣列島を5回調査されています。あの時は勿論上陸できないから、調査できなかったわけですよ。だから僕が63年アホウドリ調査で行った時もダメでしたね。だけど1971年の琉球大学尖閣調査の時に、初めては許可が下りて、久場島に上陸して調査できたわけです。1979年の沖縄開発庁の尖閣調査の時は、久場島は除かれてました。でも、僕は運よくて、翌80年にNHKが久場島を撮影するというので、その時に同行させてもらいました。久場島には1971年とこの80年の時2回上陸したわけね(笑)。

(傍らの甕指して) これが、その時に、久場島から持って来た甕ですよ。琉大調査で最初に行った時、屋敷跡に、甕がゴロゴロ転がっていたから、これ一個担いできた(笑)。

これ古賀開拓時代の証拠 割れたら大変 大事に抱えて持ってきた

— オー、素晴らしい甕です。これよく見つけて、また、よくこれ担いで来れましたね(笑)。

新納: これは偶然に出くわしたわけ(笑)。島を一周したら、石垣があって、人が住んでいたことが分る。動物班はそんなことやらない。僕なんか植物(班)だと、変わった植物ないかと、藪をかきわけてどこまでも入って行くから(笑)、とにかく入って行かなければ、島の状態、島の植生は分からない。だから必ず歩いて島中を廻るわけ。

とにかく島を歩いていたら、林に行き当たって、その中に入って行ったらそこは集落の跡なんだよ。島廻ってきたら、偶然これ(甕)に行き当たったわけ(笑)。で、ここは木に覆われているから、外から見ただけ気が付かな



この甕は開拓時代の証拠になるから担いできたと話す新納義馬会長。

い。藪になっているからかき分けて中に入ったら、甕が転がっていたから、ああ、ここは集落があった場所なんだと分った。石垣なんかも積まれていたからね。そこに甕がゴロゴロ転がってましたね、これがその時の写真（後掲 362p）よ。皆壺屋焼きの甕だった。殆んど割れていた。こっちの甕ね、そう、これに似ているが、下方が割れている。割れてない完品物はこれだけ、この甕 1 つだけだった。だから大事に担いで持ってきた（笑）。

これは古賀さんの開拓時代の証拠品でしょう。あの時に実際に使っていたものだからね。もう割れたら大変だからと、それで、大事に担いできたわけ（笑）。

帰りのボートで 大事に抱きかかえる

— これが久場島からボートに乗って船に戻る時の写真ですか？（笑）

新納：（写真指して）これ（後方 2 人目、ベレー帽）が僕だ。頭しか見えないが、甕を抱いて後ろに座ってじっとしているさ（笑）。本船に着くまで動かしていけないからと、こんな格好してずっとボートで抱きかかえていたわけ。そしたら野原（朝秀）さんが、「新納さんはあんな大事に甕を抱いているよ」と笑われた（笑）。

だけど、これ島の大事な生き証人だ。

動かして割ったらいかんから、ほんと大事に抱きかかえているさ（笑）。



久場島からボートでは、甕を大事に抱きかかえたまま本船 図南丸に戻る途中。後方二人目が当人。（新納義馬 1971）

拾った集落場所？ 分からない 皆同じ格好に見える

— この甕があった集落は、拾った場所は、島のどの辺ですか？

新納：それがよく分からない（笑）、皆似たような環境だから、皆同じ格好に見えるんだ。だからどこに船を着けたのかも憶えてない。火山の火口跡だけ分かりますよ。火口は島の真ん中だから、集落の跡は南側じゃないかと思う。船着き場も分からないわけ。周辺絶壁だから、船着き場の跡、下りるような場所、そういう格好の所も見当たらないです。だから僕はどこを廻ってどこで探したかよく憶えてない（笑）。船着き場があったら、大体道があるでしょう。それも、ここは道も、何も分



木をかき分けて藪覗いたら石積みに出くわした。集落は強風よけの頑丈な石垣が積まれている。（新納義馬 1971）

かん。とにかく着いたら、本船から下りたら、ボート着かれる所に着けて、そこから登った。

(地図指して) この木の生えている場所はこころ辺じゃないかな。島の北側かな?憶えてない。とにかく集落は石垣があった。でも沢山はないですよ。水が不便だから、人間はそんなに住めないと思う。集落は全部木に覆われていましたよ、外から集落の跡って分からない。建物が見えるわけじゃないから。そこから調べて歩きながら廻ったら、出くわしたわけ。

平地あれば畑で利用 畑跡から サトウキビ・イモ 引き抜いた

新納:久場島はあっちこちに畑跡があった。平地があればそこを畑に利用していて、サツマイモ、野菜、サトウキビなんかを作っていたんじゃないか。

(写真を指して) これは島の北西側かな、山の斜面を下りてきたら、ちょっとした空間、凹地とか、平地はサトウキビ畑、イモ畑として利用されていた。

真ん中に人が立っているね、その後ろの方がサトウキビ畑、耕作地跡ですよ。サトウキビがそのまま生えていたのにびっくりした。もう立派なサトウキビ畑だわ。試しにと、一本折って、齧ってみたら(笑)。そしたら甘くはなかったけどね。

サトウキビは丈の格好で分かるけど、ツル性の植物が繁茂し、芋畑は分らない。芋畑みたいだからとツル(蔓)をたぐって引っ張って、掘り出したらサツマイモが出た。ああここ芋畑だった。芋は食べないで埋め戻したが、見事なサツマイモだったよ。このサトウキビといい、サツマイモ、これ誰が植えたものなのか、古賀さんが事業を始めた頃のものか、分からないが、生命力の強さには驚かされたわ。

この久場島に住んでいた人たちは、島のちょっとした平地や凹地を利用して、そこにイモや野菜、サトウキビなど植えて食べていた。だから集落は、この耕作地の近くにあったと思うが、僕はよく憶えてない(笑)。島のどこを廻って、あの甕見つけたのかも憶えてない。

とにかく集落があって、そこに甕が転がっていたから、これ担いで持って来たわけよ。(笑)



上：北西海浜平地の耕作地跡、サトウキビ畑も見える。
下：耕作地跡にツル性の植物が繁茂し、イモのツルをたどり掘り起こしたサツマイモ。(新納義馬 1980)

2、壺屋焼き甕 黒潮文化圏に流布 尖閣から小笠原まで

壺屋焼き甕 「判」で制作年代 製作者も判明

— この甕は壺屋焼きですね、何に使っていたんですか？

新納：水甕にしたらい小さい。中はきれいだから、味噌甕に使っていない、使っていたら滲みて汚れている。それに、味噌甕だったら口ももう少し大きいですよ。手を入れて混ぜるわけだから、台所に米か塩か、穀物か何か貯蔵して入れていたんじゃないか。

ほら、ここに“良”という字が書かれているね。これ判というて、これで制作した家の屋号、また大凡の制作年代も分るらしい。皆形が似ているから、どこかに印をして、自分が造ったのは大事にしているわけ。職人というのは、やっぱり製造した誇りがあるんだ。こんな判を押して、自分が造ったものに責任持つ、すごいよね、昔の職人はそういう誇りというか、プライドを、責任を持っていたんでしょね、すごいわ (笑)。



甕は“良”の判が記された壺屋焼きで：高さ 43 センチ口径 14 センチ最大幅 32 センチ底径 29 センチの中型である。

壺屋 一大焼き物の生産拠点 甕壺など重宝され 全土に流通

— なぜ、久場島から、こんな壺屋焼きの甕が出てきたんですか。(後掲の写真指して)、この転がっている甕見ると、皆壺屋焼きですね。何で、こんな甕が久場島にあったんですか。

新納：壺屋焼きはすごいですよ。あの壺屋(那覇市壺屋町)で、飯椀、茶碗など日用雑器から、貯蔵用の甕、水甕、酒甕、味噌壺、油壺、もうあらゆる種類のものが作られ、これが沖縄中に持ち運ばれて使われていた。品揃えもあって、値段も手頃だし、市場ですぐ手に入ったから。これ戦前の壺屋焼物市場の写真だが、これ見ると壺屋は一大焼き物拠点だったことがよく分かる。こっちは荒焼だけど、いろんな種類の甕が並べて売られている。これ水甕だ。この下の大きい甕は泡盛用かな。左下の甕にやっぱり判が見えるね。ちゃんと描いてあるわ(笑)。この判の印から、誰がいつ頃造ったか分るらしい。

こんな壺屋焼きは、僕が調査で行った所に転がっていた。奄美大島から八重山、与那国、大東島、小さな島、どんな辺鄙な所にもあった。それだけ手頃で、便利だから、重宝されていたはず。尖閣諸島は久場島にあったが、魚釣島でも探してみたら出てくると思うよ。



戦前那覇の壺屋焼き陶器市場。壺屋は陶器の一大生産地、日用雑器から貯蔵用の甕、水甕、酒甕、手水鉢、厨子甕など、あらゆる種類の陶器が生産され、沖縄全土に供給された。(「写真集沖縄」より)

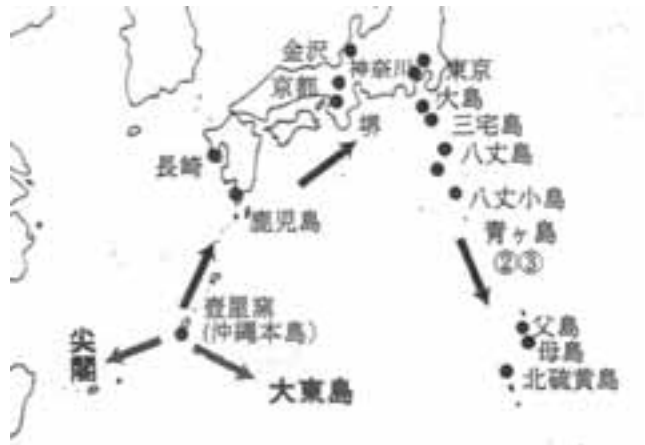
八丈島、小笠原でも出土 黒潮に乗って、持ち運ばれる

— 八丈島でも、小笠原でも、壺屋焼きの甕が見つかったと聞いたことがあります。

新納：そうです。壺屋焼きは、八丈島から、小笠原でも見つかった。これ甕だけじゃない、壺とか、酒器の徳利とか、いろんな焼物が出ている。これ研究している小川静夫さん

(東京都学芸員)によると、八丈島を拠点に漁業をしていた糸満の漁師が持ち込んだんじゃないかとも書いてある。海人が黒潮に乗って大きく広げたわけ。ほんと壺屋焼きはすごい。

(地図を出して) これ小川さんの本にあったが、戦前の壺屋焼きはこんなルートで広がっている。北上して鹿児島から土佐、紀州沖を通過して、東京に行って、そこから太平洋に大きくカーブ切って、八丈島から小笠原の父島、母島、北硫黄島のルートで広がっている。それに南の方の尖閣、大東島を入れるとほんと黒潮文化圏全体に広がっている。名も知らぬ遠き島より流れ来るヤシの実1つ・・・、



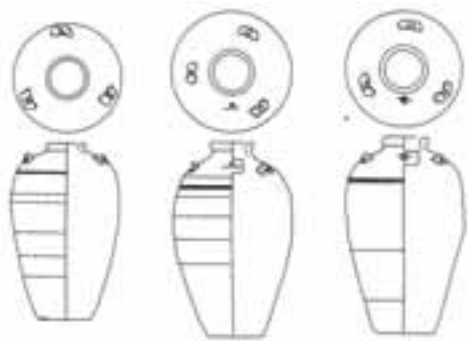
黒潮圏における壺屋焼の拡散ルート。小田(2008)の図版に追加。

これと同じだ(笑)。これ見ているとロマンがあって楽しい。糸満の漁民はこれ持って行ったわけからすごいわ。僕が子供の頃、奄美大島でも、糸満の人たちは夜海岸で寝泊まりして、釣った魚を一軒一軒回って売ってましたよ。必ず年取った人がいて、この人はサバニの後ろに乗って舵取る。前に若い連中なんかがいるわけです。夏になったら必ず来る、海岸に野宿しているから。もう自分なんかは子供だったから、糸満ウミンチュが怖かった(笑)。

もう魚獲れる所なら、どんな遠い所にでも、壺屋焼を持って行ったわけよ。



八丈島の民家の台所外に置かれた水甕
(「壺屋焼が語る琉球外史 小田静夫」より)



八丈島民俗資料館所蔵の壺屋焼甕の図(一部)
(同左)

— 見つかった甕の“判”から、これがいつ頃作られたか分かるわけですね。

新納: これ、分るらしい、だけど判の調査は始まったばかり。小川さんによると「八丈島民俗資料館に保管されている壺屋焼き甕 20 点のうち、14 点(うち 3 点は同じ判)に判が認められ、八丈島全体では現在 15 種の判が確認され、判の屋号が判明したのは僅か 2 例」し

かないとある。判の調査はこれからですね。

※後日、壺屋焼き博物館に、「良」印の判について、問い合わせたら、未確認の判とのことだった。今後の調査に期待したい。なお、参考資料として、これまで屋号が分かっている判の一覧表を末尾に掲載した。

尖閣諸島へ 誰が持ち込んだ？ 最初の頃古賀さん？ 糸満漁民も？

ー 尖閣諸島にも、やはり糸満漁民が持ち込んだんですかね。

新納：糸満の人たちは、古賀さんに雇われているから、そうかもしれん。だけど、よく分らない。泉川寛さんの原稿（「尖閣研究 高良学術調査団資料集 上」）に、お祖父さんの話を書いてあった。彼のお祖父さんは、古賀さんに雇われて那覇から出稼ぎ募集で行っている。ユクンに行って、鳥の剥製づくりや羽毛採取などとても難儀な仕事したと言うから、今の久場島かも知れん。あの開拓時代の久場島の写真に、自分のお祖父さんに似た人が三味線弾いて写っているね。泉川さんは、お祖父さんは三味線が上手なジーウタ（地唄、祭りの時の唄手）していたから、これはきっとお祖父さんかも知れないと言っている。この2つを見比べてみると確かに似ているね〈笑〉。泉川さんのお祖父さんはどの時期行ったのか分からないが、古賀さんが鳥の剥製作りを始めたのは明治38年頃だから、明治38年以降でしょう。

尖閣諸島の場合は、最初の頃は古賀さんが船をチャーターして、連れて行っている。古賀さんの「藍綬褒章 下賜ノ件」を見ると、明治30年3月には、出稼移民35名と糧食其他一切の日常用品を積んで送り込み、翌31年には大阪商船須摩丸を用船し、自ら移民50名を率いて糧食日用器具各種の材料等を準備して渡島したとある。そのあとも永康丸、仁寿丸とかを用船して渡島している。日用器具各種を準備してとあるから、鍋、飯椀、茶碗、水甕とかはどうしても必要な道具。その時に甕も一緒に持ち込んだかも知れない。

明治41年には移民総数248名、戸数99に達している。その頃にはカツオ船も盛んになるから、糸満人なんかの海人も来て、自分たちで道具を持って来たかも知らん。



琉球新報 明治32年4月5日



1953年新納らと尖閣諸島学生実習に参加した泉川寛。祖父寛言氏は若い頃、久場島に出稼ぎで渡島していた。奇しくも祖父孫揃って尖閣に渡島した。明治41年の写真の左2人目は三味線好きの祖父とそっくりだ。



3、久場島の集落、古賀村は、どこにあった？

開拓初期・明治33年には、南西海岸に 建物10数戸

— 久場島の集落は、古賀村はどこにあったんですかね？

新納：だからそれがよく分らない（笑）。たまたま僕は屋敷跡見つけて、そこから甕を拾って持ってきたが、あそこがどこだったか憶えてないさ。もう皆同じ格好に見えるから（笑）。

こっちに黄尾島（久場島）の地図があるが、これ明治33年の頃のもので。古賀さんをお願いされて黒岩恒先生が魚釣島と南小島、北小島を、宮嶋幹之助が久場島を調査した時に作ったもの。

この宮嶋さんの報告論文（「黄尾島」地学雑誌第13輯144～146巻、明治33年）に、地図と写真が載っている。僕はこれ後で分ったけど（笑）。この地図を見ると、古賀村は南西側にある。集落は海岸近くと少し内側の2手に分れている。この四角（□印）が家屋とあり、数えてみると、海岸には7戸、内側には5戸、計12戸あります。南西海岸近くに集落はできている。ここは波止場も近いし、冬の季節風、北風を避けるのにいい場所です。

だけど、僕がああ甕見つけたのは、こんな海岸近くじゃなかった。相当歩き回って、林に行き当たから、中を覗いたら石垣あったから、屋敷跡だと分かった。

この写真（右掲）見ると、海岸のすぐ傍でしょう。石積みもあるか分らんが。そんな海岸寄りでなかった。もっと島の奥だったと思う。



上：明治33年頃の地図、島の北西海岸近くに古賀村がある。
下：古賀村の拡大図。家屋は12戸ある。

（「黄尾島 宮嶋幹之助 地学雑誌 第146 明治33年」より）



海岸寄りの古賀村、日の丸掲げた家屋3戸が見える。（同上）

アホウドリ羽毛、貝殻・フカヒレなど 海産物を採取

— 古賀さんは、尖閣諸島の開拓は久場島から始めたと言われてますが、明治33年の地図見ると家屋は12戸もあります。久場島では、開拓は盛んだったわけですね。

新納：明治33年の頃だと、開拓事業は、アホウドリ羽毛採取、あと貝殻・フカヒレなど海産物採取ですね。鳥剥製をやり始めたのは明治38年、カツオ漁・節製造は明治39年頃から。だから、アホウドリなどの羽毛採取が主だった。けどアホウドリは渡り鳥だから10月に帰ってきて島で過ごし、翌年4月には飛び去っていくから、この仕事できるのは半年ほど、あとは海産物の採取に励むしかない。けど明治38,9年以降は、鳥剥製とカツオ漁・節製造事業をやりますから、古賀村もこれに伴い発展したかも知れませんね。



久場島の開拓事業はアホウドリの羽毛採取。
島の斜面はアホウドリが群棲していた。
（「明治42年藍綬褒章
下賜ノ件」より）

明治33年の
久場島古賀村の遠景。
（同上）



「小屋ノ側ニ白ク見ユルハ、日章旗ノ風ニ翻レルナリ」と説明あり
（前出「黄尾島」より）

北側にも屋敷跡 上陸した漁民目撃 加那志オジーも住んでいた

— 池間の西里勇さんが、島に上陸したら、芋畑にゼロ戦が不時着していて、これに乗って遊んだ話がありますね。あの時飛行機から屋敷跡が見えた。あれ確か島の上側だった？

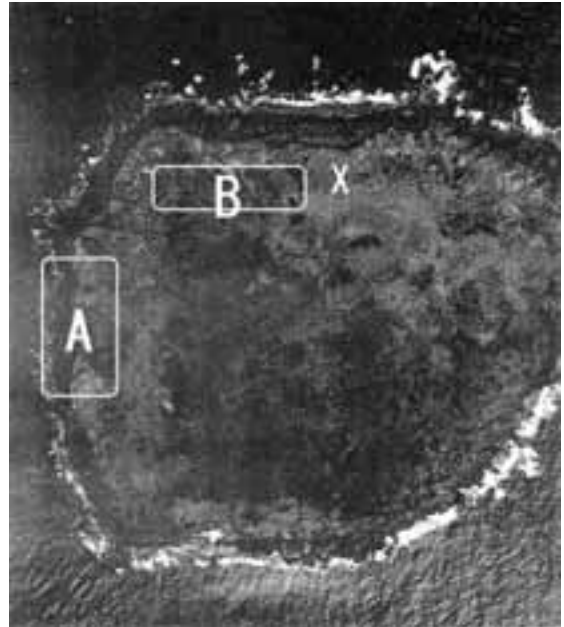
新納：西里さんのあの話は、貴重ですよ（笑）。1950 年頃かな、芋畑にゼロ戦が不時着していたから、これに乗って遊んでいますね（笑）。米軍が撮影した航空写真にゼロ戦が写っている。飛行機が落ちていた場所はここですね。島の上側、北側になる。

「丁度向こうの芋畑の真ん中位に落ちていた・・・芋畑は、部落の屋敷跡がある所のずっと上った所に、屋敷のある所からつないでいて、そこからずっと東側に相当あった・・・飛行機は屋敷跡の所から見えていたから。芋畑は 1 町歩(約 3000 坪)位はあったと思う・・・加那志オジーは、自分の家は、芋畑の西側だったと言っていた」「向こうは家がいっぱいあったはず・・・それも大きい家が、向こうの基礎は・・・でっかいよ・・・こんな大きいコンクリーの基礎が打たれていたのもあったから、そこは何かの工場だったんじゃないかなあ、そういう所もあって・・・向こうは水が不便だから、大きいコンクリーでやられた所には水タンクがあった」（尖閣研究 2012 西里勇）とある。

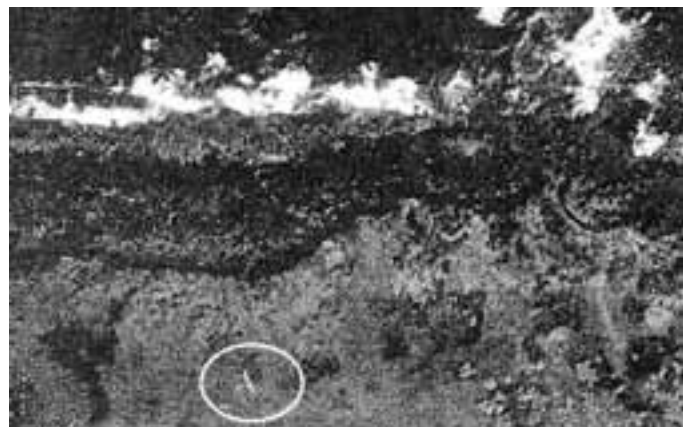
この航空写真から見ると、屋敷跡は島の北西側になる。また西里さんは、甕が転がっていたのを見たとも言ってますね。

「屋敷跡にはカメ(甕)も水がめもあった・・・口の大きい物と小さい物があって、昔は飲み水をやる時は大きいカメに、蓋閉めて置いておいて・・・あんな水がめがあっちこっちに転がっていた」（前同）。

僕が見た屋敷跡もそこだったのかな、よく憶えてない（笑）。



A：明治 33 年の集落がある区域。B：北側 ゼロ戦機が不時着した場所 (X)、畑、住居跡（「米軍航空写真 1945」）



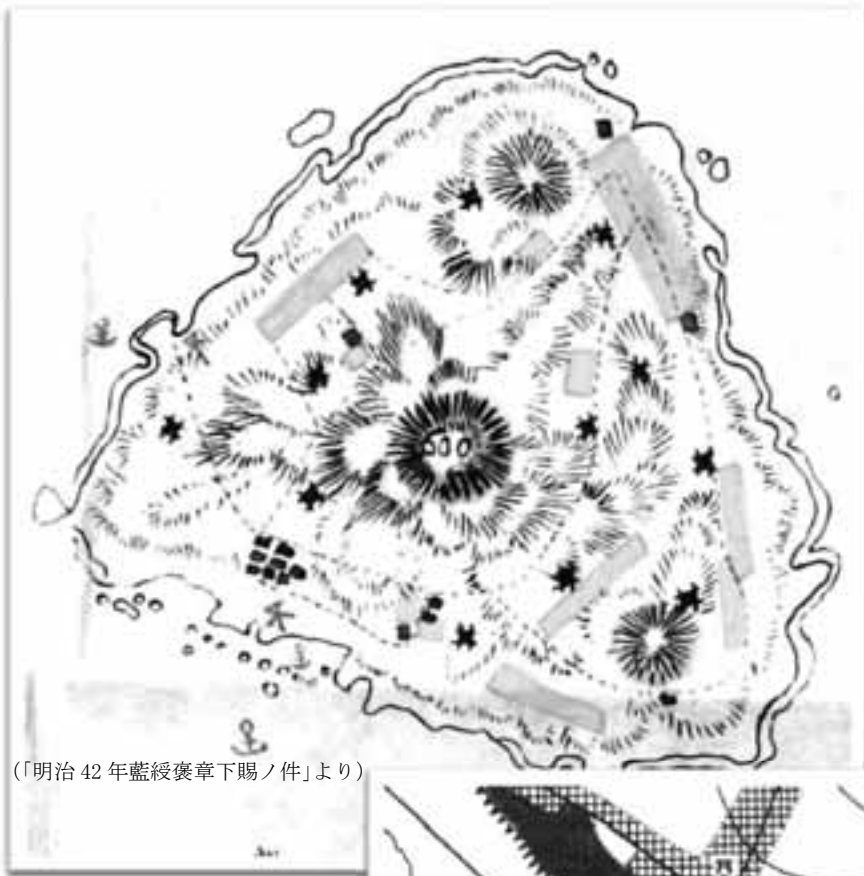
上掲写真を拡大。○印にゼロ戦が見える。屋敷跡はその西側にあった。

明治42年の集落地図見ると 北側にも 3か所に分散発展

— 西里勇さんは、加那志オジーは海鳥の羽毛採るためここに住んでいた。また向こうは家がいっぱいあったはずと言うてますから、南西海岸からここ北側に移動したんですかね。

新納: 移動と言うより、何かの事情で分散したと言った方が適当かな。こっちに古賀さんの明治42年集落地図があります。これ見ると南西海岸集落から上方、北側3か所に分散している。42年時点では一戸だが。そのあと西里さんが言っているように北側集落も発展したかも。それで、向こうは家がいっぱいあったのを見たかも分らん。

明治42年の集落地図 (古賀氏作成)



(「明治42年藍綬褒章下賜ノ件」より)

右図：明治41年5月恒藤規隆博士が燐鉍調査で渡島した時の南西海岸の集落地図。家屋15戸と神社が記されている。

(「南日本の富源」より)



久場島出稼ぎ行って 相当儲けた 古賀村 相当繁盛していた？

— 泉川さんのお祖父さんも、西里さんの加那志オジーも、久場島に出稼ぎに行って相当儲けた、加那志オジーは儲けた金で赤瓦の家を造ったと言っています。

久場島の古賀村はどんどん大きくなり、相当繁盛したんでしょうね。

新納：明治41年の地図には神社が記されています。集落として大きくなって神社も造ったのでしよう。これが泉川さんのお祖父さんが写っている写真です。

明治40年(1902年)8月に古賀さんは福岡鉱山監督署から久場島の燐鉱掘削願いの鉱業権が許可されます。実際はグアノ(鳥糞)の採掘権だが、この調査に来た時に撮ったものと思います。

で、前の3名が監督署の人で、後方に出稼ぎ者、島に住んでいた人がいますね。人数えてみたら18名いる。これに写ってない人もいたわけだから、大勢の人が住んでいたと考えられます。



島のどこで撮った写真だろうか。後方2列目の三味線弾くのは泉川のお祖父さん？ 反対端に久場島開拓責任者井沢弥喜太の3人家族がいる。(「那覇市歴史博物館」)

耕作地跡 随所にある 水タンクも備える 大勢の人間で賑わう？

島を廻るとちょっとした平地や凹地を利用した耕作地跡が点々とありますよ。西里さんの話でも、北側の芋畑は1町歩(約3000坪)位はあった。また水が不便だから、大きいコンクリーでやられた所には水タンクがあったと言っている。仲間さんが撮った写真に、天水溜める水タンク、レンガ作りのきれいなタンクが造られていますね。僕はこれは見ていないが。久場島は、この畑と水タンク備えていた



天水溜めるレンガ作りの水タンクがあった。(仲間均2001)

から、相当の人間を養うことができ、古賀村には大勢の人間が生活していたはずですよ。

4、久場島、海崖で集落跡保全 遺物出土 期待できる

多和田先生 尖閣諸島 考古遺跡なし あるのは 古賀開拓以降のもの

— 多和田真淳先生は、高良先生と行かれた時、尖閣諸島で考古学調査をされてますね。

新納:ここが多和田先生のすごさです。もう考古学は専門でしょう。上運天賢盛さんの話では、南小島、魚釣島の海岸、崖下を歩き回り、あっちこっち調査されていたと。

それで、「島々に上陸して貝塚とか、城とかの跡があるか、石器や土器があるか、何でもよい。とに角昔人間が住んだ証拠を一つでも探そうとしましたが全くありません。つまり此処は昔からの全くの無人島だったのです。然し昔の人はこゝをユクン、クバ島ととなへ漁民や航海者はこれを知っていた様です」(「尖閣列島採集記」1952)と書かれてますね(笑)。考古学的遺跡はない、貝塚はない、ここは昔から無人島だったと言ってます。これはとても重要な指摘です。やっぱり大先生ともなれば目の付け所が違う。偉いわ(笑)。

発掘して出てくるのは古賀さん開拓以降の遺物ですね。



多和田真淳先生

海崖が囲む 高波にさらわれず 集落内に 生活跡残っている

だから、僕が急いでやってほしいのは開拓時代の集落の、古賀村跡の遺跡調査です。

遺跡調査というのは遺構と遺物です。遺構は集落の石積み跡とか屋敷跡。遺物というのは、どんなものを使って暮らしていたのか生活跡の調査です。

尖閣列島に古賀村は、魚釣島、久場島、南小島の3か所にある。久場島は岩盤が露出した海崖が島を取り囲んだようになっています。高さは4.5メートルもあるかな。島全体が、丁度高台に乗った格好。だから、台風の時でも高波や高潮は、島の奥の方までは届かない。だから、魚釣島、南小島は違って、久場島の古賀村跡の遺跡は、海崖に守られて残っています。



久場島の周囲は海崖をなし、崖をよじ登って上陸する。島全体が高台にあるため、高潮、高波から集落は守られてきた。(新納義馬 1980)

あの鳥糞も海に流されないで、島に堆積する。古賀さんはリン鉱石の鉱業権の許可をもらい、これを採掘して、台湾に鳥糞グアノを移出できたわけよ。とにかく、久場島は高台にあるため、古賀村跡の遺跡、集落の遺構遺物は確実に残っています。

屋敷跡には 甕・欠片も散乱 地面に 何が埋まっているか分からん

— なるほど、高台にあるから、高波、高潮にもさらわれなくて、屋敷跡であの甕を見つけて、担いできたんですね。序に掘り起こしたら、いろんなものが出たかも知れませんね。

新納：屋敷跡に、甕が散乱していた。

あの中に、割れてない甕1つ見つけたから喜んで、これ担いでいくことしか頭になかった。あの転がった甕の判を全部調べれば、いつ、どこの窯で作ったか分る、欠片（かけら）も拾ってくればよかった（笑）。あの時は植物調査で行ったから、目は植物しか見ていない。もし遺跡調査で行ってたら、もうそういう目で見ると、屋敷跡は片っ端から掘り起こしているわ（笑）。どんなものが出てくるか楽しみだから、出てくるものは、欠片でも、破片でも、全部持ってくるよ（笑）。



屋敷内に散乱している壺屋焼甕。（新納義馬 1971）

（写真を指して）これも前の写真と一緒に、明治40年に福岡鉱山監督署から燐鉱調査に

来た時に撮ったと思う。ここにハット帽被った人がいるね。この4名は鉱山監督署の人たちで、あとの17名は久場島の開拓者たち。

この娘を抱いているのが伊澤弥喜太。前の写真（360p）では奥さんも、家族3名で写っている。

開拓者たちは遅いわ〈笑〉。

あのクバの木

伐り倒し、柱と梁を組んで、これチガヤだ。これ刈ってこれで屋根葺き、自分たちで家拵えて、開拓に励んでいるわけだ。偉いね。厳しい自然に挑みながら、皆さんはどんな暮らしをしていたのかね。



「黄尾島古賀開墾・・・」とある。久場島の開拓に従事した伊澤弥喜太と開拓者たち。ハット帽4名は福岡鉱山監督署の技師たちか？ 明治40年撮影（ ）

飯椀、茶碗、酒器も出るかも 生活史解明の端緒に？

— 古賀さんは、尖閣列島に連れて来た時、日用器具各種を準備していったとありましたが、船から皆持って来るには限度ありますね、どんな道具を持ってきたんですかね。

新納：第一に必需品の鍋や飯椀、水甕、みそ壺なんかでしょう。水甕なんかも屋敷に転がっていたから。あとは石臼ね、あれないと豆腐や味噌なんかは作れない（笑）。あれ確か魚釣島かな、壊れた石臼使えんから捨ててあったの見ましたよ（笑）。あと桶やザルとかは持っていつている。木や竹製品はすぐ朽ちて失くなる。焼物や石臼なんかはいつまでも残る。開拓者の皆さんのこの写真見ると、どんな道具を持ってきて、どんな暮らしていたのか、いろいろと想像するよ（笑）。屋敷跡を掘ったなら、いったいどんなものが出てくるのかな。



久場島屋敷跡に残された生活用具、鍋？ 往昔の厳しい生活が刻まれている。（仲間均 2002）



魚釣島から出土したスンカンマカイ（砥部焼椀） 丈夫だから漁師に愛用された。（山本皓一 2003.）

昔の沖縄で、日用雑器として使われていた壺屋焼きを並べてみた。急須、湯呑、飯椀、酒器、盃とかはよく使われている。このスンカンマカイ（愛媛県砥部焼椀）は、壺屋焼きと違い丈夫で、なかなか割れないからと、漁師に愛用されていた。久場島の屋敷跡を掘ったら、これも相当出てくるはず。薩摩焼、有田焼も出てきたら面白い。何が出るか楽しみだ（笑）。



沖縄の家庭にみられる壺屋焼を主にした食器・酒器類。左上端は腰に据える酒器の抱瓶。左下端の白地の徳利は薩摩焼。飯椀、湯呑、急須は壺屋焼からなるが右端下2つは戦前流行った砥部焼のスンカンマカイ。久場島の屋敷跡を掘り起こせば、どんなものが出土するのだろうか、興味津々である。

あと？ いろいろあるけど、久場島は米軍爆撃演習地（永久危険区域）だったから、投下した爆弾、実弾破片、模擬爆弾も、歴史的遺物、記念物になるかもね（笑）。



「尖閣列島に近寄るな、米航空軍が警告」 (宮古民友、1949.01. 14)



米軍が爆撃演習に使った実弾？
相当錆付いている。
1950年代に
投下したものか。
(新納義馬 1971)

同じく実弾か？
爆撃演習といえ
こんな爆弾が投下され
爆発でもしていたら、
島の自然は
破壊されてしまう。
(下謝名松栄馬 1971)



演習用ロケット模擬弾？
風衝林の林床に
足踏み入れたら
爆弾が1つ転がっていた。
(新納義馬 1980)



5、遺構調査も急ぐべし 道路、石積み・屋敷、神社跡も

この古賀村跡の遺物（生活跡）調査と並んでやってほしいのは遺構調査である。古賀村の集落は、これまでの資料から3,4か所に分散発展している。



古賀村の南西海岸側集落。
高々と日の丸を掲げている。
ここから上方、北側に
分散発展したであろう。
(明治33年) (前出)

調査団のキャンプ
海岸近くに設営した
往昔の古賀村を偲ぶものは
生い茂る夏草の中に眠る
(新納義馬 1980)



北西海浜平地の耕作跡、手前はコマルバガジュマルの風衝荒原、火口跡や少し凹地など耕作地として利用している。耕作地を目安すれば近くに集落・屋敷跡が見つかるだろう。(同上)

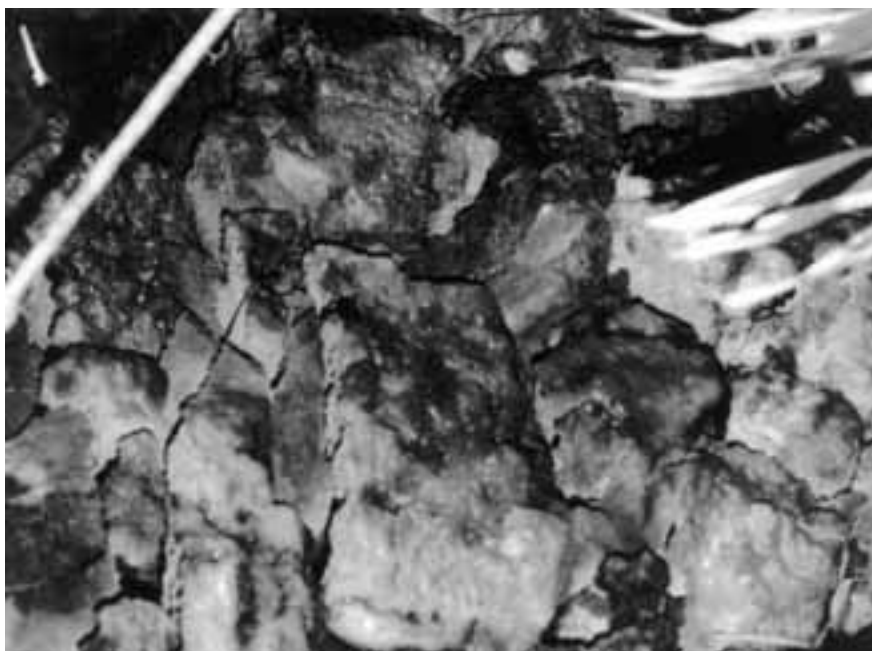
遺構は、道路、石積み・屋敷、神社、等々がある。



生活物資を運搬した道路であろうか、実に見事な石積みである。（新納義馬.1980）



広範囲に点在する住居跡の石積み、放棄されて100年は経過したであろうか、
今外部から住居跡を確認することは、植物に被われて至難の業である。（仲間均.2002）



尖閣諸島は、洋上に浮かぶ絶海の孤島、来襲する台風、冬の季節風、台湾坊主、等々の厳しい環境に備えて、集落を頑丈な石積みで圍繞、防御する対策であろう。(新納義馬.1980)



住居跡の石積み実に頑強に出来ている。それにしても先人たちのすさまじい生活力には、ただただ驚嘆あるのみである。(仲間均.2002)



崩れ落ちた石積みの手前にレンガ造りの水溜タンクが2つほど見える。島には湧泉や河川がなく、飲料水に事欠き、レンガ囲いの構造はそのためと考えられる。（仲間均.2002）



久場島は尖閣諸島の他の島々と比較して植生の破壊が大きく、古賀氏の事業は最も盛んに行われており、飲料水を確保するため、水タンク設置が最優先されたであろう。（同上）



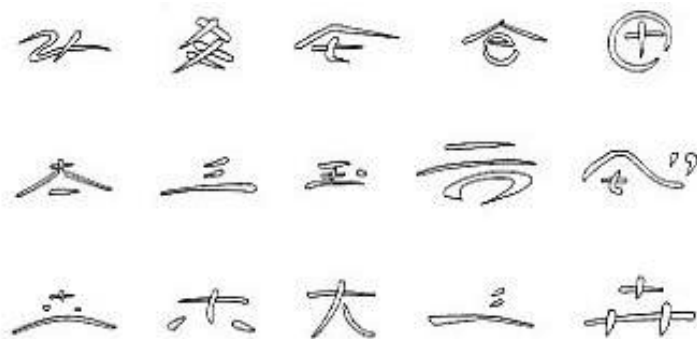
恒藤博士の集落見取り図(上)を見ると神社がある。丸みを帯びた石がきれいに敷き詰められている。奥にあるのは、この神社跡か。

(仲間均.2002)



島で亡くなった開拓者の墓所か？ 岩をくりぬいて丁寧に造られており、共同の墓所だったのか。この写真から中の様子は分からない。調査が待たれる。(同上)

※参考 八丈島の壺屋焼き甕の「判」と壺屋の「屋号」



八丈島発見の壺屋焼陶器の判

屋号	判	家名	屋号	判	家名
西与儀	十二	城間(本家)	灯ノ厨	合	島袋(五男)荒焼
〃原盛	山	(昭和) 次男	前ノ西与儀小	司	城間・荒焼
〃康昌		(昭和) 三男	タンカー		高安 荒焼
下松尾	人	(明治)石川喜造	下唐大屋小	三	島袋(次男)荒焼
田ノ端	王	高江洲	唐大屋	人	島袋(長男)
東渡慶次	金	本家	新屋敷	十	ウファー・島袋(四男)
渡慶次朝定	大	明治から渡慶次	灯檝		(明治以前から) 高江洲・上焼
上ノ下	田	(明治) 国場	玉井小	下	(明治以前から) 高江洲・荒焼
東屋小	天	(昭和) 島袋	東り西屋敷小	今	(明治)安次郎・荒焼
久志	全	大正半葉から高江洲	灯製小	竹	(明治) 島袋・荒焼
久志	田	明治から上焼高江洲	島袋小	分	島袋
大安里小	人	明治から上焼高江洲	川門小		島袋・荒焼
賀郡安里小	万	(明治)上焼・高江洲・三男	工場安里小	合	(明治)から高江洲
先生島袋	令	島袋	与儀ノ朝	合	△高江洲
花口宜保	六	宜保	川根	全	高江洲(友丈氏家)
後ノ屋小	六	高江洲	玉那覇		△玉那覇
新屋敷小	今	明治島袋首大屋安里	ペーチン小	父	(明治以前) 新屋・次男
前ノ島	米	(明治)上焼・島袋(本家)	東り	田	(明治以前) 大屋新屋
真和志小	又	島袋	上唐大屋小	二	(明治) 島袋
上ノ島	上	(明治)荒焼 島袋(島袋實まん也)	玉井		高江洲
新屋平田	八	島袋から平田に	二男新屋敷小	中	(昭和) 島袋
小堀川	大	小堀川	後ヌ屋	采	高江洲(高安)次男

沖縄県壺屋焼陶器の判

(「壺屋焼が語る琉球外史」小田静夫著 2008年刊) から転載しました。

尖閣諸島・古賀村盛衰考

一 台風被災による撤退説と遺跡調査の提言 一

編集部

はじめに

- I、「嗚呼 是れ古賀の王国にあらずや」
- II、アホウドリ鳥毛採取から 剥製・カツオ節製造へ
- III、開拓経営の基礎固まった 目指すはカツオ王国
- IV、古賀村に異変？
- V、魚釣島古賀村(跡)のその後の歩み
- VI、ヤギ食害で 変貌する魚釣島
- VII、急ぐべし 尖閣諸島・古賀村跡の遺跡調査
- VIII、南小島古賀村 海鳥事業の本拠地
- IX、南小島古賀村跡 規模・形状 魚釣島上回る？
- X、急ぐべし、南小島古賀村跡 遺跡調査も
- XI、終章— もしも 古賀が命長らえていたならば？

はじめに

資源枯渇説に疑問 台風被災による撤退では？

古賀辰四郎の尖閣諸島の開拓事業は、明治 40 年代には大きな発展をみていたが、なぜか大正期に入ると突然撤退している。これは大きな謎とされてきた。

これまでアホウドリなど海鳥を乱獲するなどして資源が枯渇したから衰微した。

利益に見合わなかったから撤退したのではと、種々の憶測がなされてきた。

筆者らは、この撤退説に疑問を持ち、当時の資料に当たってみた。

大きな台風が尖閣諸島を襲って、古賀村は壊滅してしまい、古賀は列島経営から手を引かざるを得なくなったのではという結論に至った。台風被災による撤退説である。

勿論、これについて検証可能な資料が充分あるわけではなく、単なる推測でしかない。

それが事実に近いならば、尖閣諸島開拓者古賀辰四郎の人物像、アホウドリの乱獲に見られる資源の略奪者というこれまでのイメージを変える必要があるだろう。

とり急ぐべし 古賀村跡の遺跡調査を

本稿では、尖閣諸島・古賀村盛衰考と題して、できるだけ写真資料を多く混じえて、古賀辰四郎の尖閣諸島開拓経営の盛衰を簡単に取りまとめた。

その中で台風被災による撤退説を紹介し、古賀村の遺跡(遺構と遺物)調査について提言した。

本稿は、本編集会・新納義馬会長の「久場島古賀村跡の遺構、生活跡調査を」に触発されたものである。会長が久場島の古賀村跡の遺跡調査に熱意を示された。

会長をや、況んや我々編集部たるも、魚釣島と南小島について調べねばと、急ぎ筆を執った次第であるが、性急のあまり稚雑な内容になったのは免れ得ない。読者諸賢の批判を乞う。

本稿の大きな目的は、遺跡調査の提言にある。関係諸機関が、遺跡調査の重要性を認識し、この実現に向けて、第一歩を踏み出してくれることを願う次第である。

なお、本稿では、新納会長が久場島の古賀村跡については言及しているので、魚釣島と南小島にとどめた。



石垣市
古賀商店八重山支店跡近くに建つ「古賀辰四郎尖閣列島開拓記念碑」。魚釣島を頭部に形どり、開拓の偉業を顕彰している。

尖閣諸島 飢餓の島 餓死の島也

尖閣諸島は、一言でいうと飢餓の島である。餓死の島也、と評しても過言でない。

同島を調査した調査団は、「島に 3 日いたが、ずーとヤーサ(飢餓)した。食べる物が何もない。食べられる物と言えばせいぜいクバの木のコブとシュウダ(臭蛇)だけだ。用船した船員たちからコメを分けてもらったから助かった」。(上運天賢盛談)。外部から補給がなければ餓死の島である。

これを実証したのが戦時中、米機の銃撃に遭い、魚釣島に漂着した疎開民である。持参した食料が食べ尽した後、悲劇は起こった。食べられる野草は僅かしかなく飢餓、栄養失調に陥った。

体力のない子供、年寄りから次々亡くなっていった。決死隊が丸 2 日間かけて舟を漕ぎ八重山へ連絡に成功し、救援船が迎えに来、100 名余の命が助かった。さもなければ餓死の島は、全員を死に追い込んでいた。往昔はアホウドリが棲んでいた。だが、それだけ食べては生きられない。

尖閣諸島は、古来より餓死の島、人の住めない無人の島だった。考古学調査した多和田真淳は、「人間が住んでいたという痕跡はない、あるのは古賀時代の遺跡だけだ」と記している。

領土編入以前 海鳥・海産物求め 漁民・冒険家 渡島

首里王府時代は、進貢船航路の標識島ともなり、沖縄では、ユククバシマと呼ばれ、その存在は知られていた。明治18年明治政府は出雲丸が調査実施したが、その前後において、海鳥や海産物を求めて漁民や冒険家たちが渡島を試みていたとも推測される。明治8年政府から琉球藩へ汽船大有丸が下賜された。同15年には沖縄開運会社が発足、県より大有丸を借り受け、宮古八重山航路が開かれている。古賀は「明治17年尖閣列島に人を派遣し同島の実況を探検せしめ云々とある。「褒章資料」(後出)、これが事実であれば、大有丸を用船して探検せしめたのだろうか。

明治23年県属瑞忠雄の久場島並に魚釣島の聞取調査報告には、「久場島・魚釣島に渡航したる糸満人は総計78名〔大有丸32名、鯉船26名、与那国20名〕、最近では現地に小屋掛けを為し移住する計画と認め候。食糧運搬の為(石垣島に)帰航した糸満人某より該島の概況及び物品(夜光貝殻1個〔漁獲物〕・寛永銭4枚〔漂着物])を添えて上申候」とある。

糸満人が尖閣諸島に集団で、「夜光貝、鱻、鯉、シビ、アホウドリ」等を求めて渡島、小屋掛けを為し漁業に従事していた。同23年には共同水産会社の松村陣之助の率いる漁夫による操業、翌24年～26年伊澤弥喜太率いる漁夫の操業、等々が報告されている。

古賀辰四郎 開拓事業に着手 飢餓の島から 豊穡の島へ

沖縄県丸岡知事は、水産物取り締まりの上から困惑し、明治23年1月には、明治政府に対し所轄決定に関する伺いを上申した。国外問題で多難な折り、政府は慎重にならざるを得なかった。明治26年11月、奈良原県知事は「久場島、魚釣島へ本県所轄標杭建設」旨を上申した。

明治28年1月14日、政府は、日清戦争も終局を迎え、ようやく内治に目を転じると、件の尖閣諸島は、飢餓の島、餓死の島で、古来より無人無主の島であることが分かり、日本領有を宣言した。

明治29年9月古賀辰四郎が魚釣島他3島を借り受け、開拓事業に着手した。

古賀は、魚釣島に開拓本拠地古賀村を建て、海鳥事業、カツオ節製造、農林畜産の開拓事業に精励した。かくして飢餓の島尖閣諸島は、実りある豊穡の島へ成り変わっていた。

I、「嗚呼 是れ古賀の王国にあらずや」

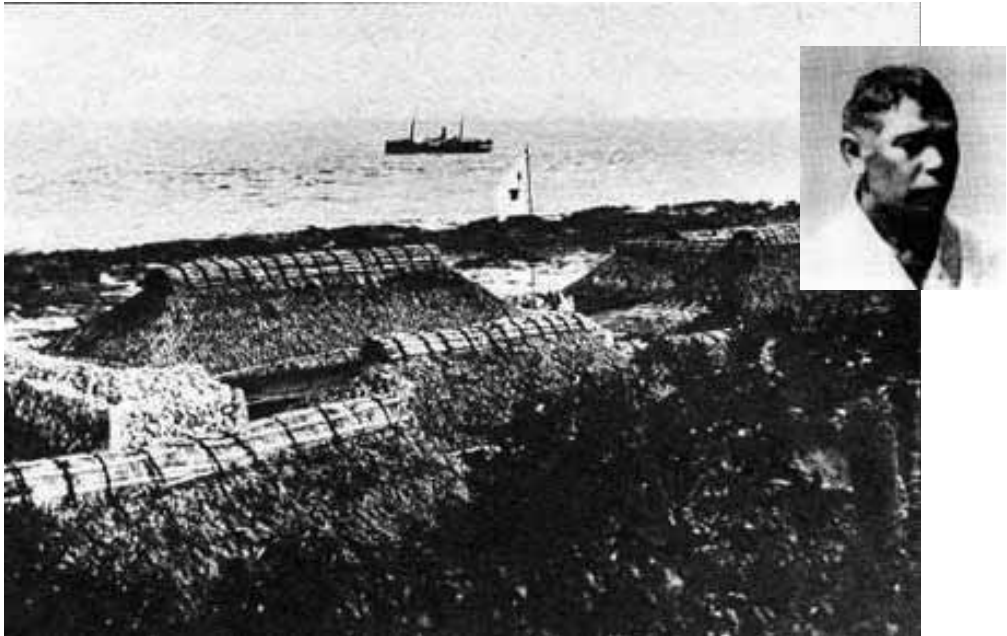
1、魚釣島古賀村

明治 41 年 5 月、尖閣諸島を訪れた宮田漏溪(琉球新報主筆)は、魚釣島の古賀村を見て、「嗚呼、是れ古賀氏の王国にあらずや」と讚嘆している。

飢餓の島魚釣島の岩場は、切り開かれて、3 千余坪余る広大な敷地に、事業所建物が立ち並び、後方山地の原生林は伐り倒され、面積 60 町歩余の開墾地が現出し、実り豊かな島へ変貌を遂げ、列島開拓本拠地古賀村は、移住民 240 余名、戸数 99 戸と殷賑極めていた。

「其の財を費やすこと三拾餘万円、年月を積むこと二拾有五年。尖閣列島の經營者たる古賀辰四郎氏が、單身創業的の勇氣を揮つて全列島の爲め尽し來たれるもの亦た至れりと云はざるべからず」・「全氏が明治十七年初めて人を搓し全列島を探検し、愈々經營すべきを確信したるより以來、今茲明治四十一年に至る迄、二拾有五春秋間の經歷・・開拓せんことに向つて努力、勇闘を續け來りたるの事歴を詳知せるものは、・・古賀氏の一王国と称するは、異言なかるべきにあらずや」。

(琉球新報「尖閣列島と古賀辰四郎氏」一～九 宮田漏溪 明治 42.6.15～27)



山の手から開拓本拠地賀村の家並みを望む。中央には日の丸がヘンボンと翻っている。両脇の建物：左は鯉釜納屋、右は開拓本部事務所。上：古賀辰四郎。(明治 41 年撮影)

では、古賀が開拓した尖閣諸島はどんな島か見てみよう。

2、尖閣諸島 4つ島がある どんな島だろうか？



手前左より南小島と北小島。後方は魚釣島。右上段は久場島。（「ウェブサイト」より）

①、魚釣島 面積 3.82 km²

尖閣諸島最大の島で、北側は緩やかな傾斜を成し、南側は急峻で断崖陰阻な地形である。鬱蒼とした原生林に覆われていて、河川もあり、唯一水が得られる島である。

生物資源の宝庫と言われ、新種、希少種などが発見されている。

古賀開拓時代には、冬季にはアホウドリが南西海岸と東岬に、数万が集来していたが、野生化したネコが繁殖し、アホウドリをはじめ海鳥を悉く駆逐してしまった。

②、南小島 面積 0.40 km²

緑の少ない岩だらけの小島、東に大きな岩山と西側に小さな岩塔があり、その間は平坦地の礁原が広がっている。島には、カツオドリが生息し、アホウドリも営巣している。

③、北小島 面積 0.31 km²

南小島同様に、緑の少ない岩だらけの小島、やや緩やかな段丘上の岩山、小さな岩山、岩塔からなり、平坦地の礁原は少ない。北小島は、アジサシ類が多く、南小島のカツオドリと棲み分けしている。アホウドリも営巣している。

④、久場島 面積 0.91 km²

数個の噴火口持つ火山島である。水は得られない。クバやクバルマガジュマルなど緑に覆われたなだらかな地形の島である。平坦地も多く、耕作地が容易に確保できる。

海鳥はカツオドリ、オオミズナギドリが生息している。かつてはアホウドリも営巣していたが、魚釣島同様にネコに駆逐されてしまった。

3、古賀氏は、尖閣 4 島で、どんな開拓事業していたか？

海鳥剥製、鯉節製造、開墾と多岐にわたる

開拓事業は、(1)海鳥事業、(2)漁業、(3)農林畜産業に分けられる。

(1)、海鳥事業

アホウドリの鳥毛採集、カツオドリ、アジサシ類の剥製。

剥製製造の際に出る骨・肉から肥料、また絞り油から（機械）油の製造。

鳥糞（グアノ）採掘し、肥料を製造。



南小島の上空を飛翔する海鳥、海鳥事業本拠地は南小島。(古賀善次..年代不祥)

(2)、漁業

鱧鱗、海參、夜光貝など貝殻、鼈甲の漁獲採集。

カツオ漁、カツオ節の製造、サンゴ漁を計画、試みる。



魚釣島古賀村でのカツオ製造光景、島の周りにはカツオの好漁場だった。(明治 41 年)

(3)、農林畜産業

開墾及び穀菜の栽培（食料自給体制の確保）。

植林(樟苗及び松杉柑橘類の栽培)事業。

牧畜、養蚕、烏藕（とりもち）の製造。



○印が開拓本拠地・古賀村跡、手前海岸に掘割が見える。後方にひし形状は耕作地。

4、なぜ、開拓本拠地・古賀村は、島の南西部に建てたのか？

水と平地、耕作地が確保でき、港が造れる最良の立地だった

明治 30 年代に作られた尾滝延太郎（古賀の甥）が作成した和平山（魚釣島別称）地図がある。

これを見ると、山からの水脈が海岸部に流れ出しているのが南西部と北東部にある。北東部は冬の季節風・北風をもろに受けるので不向きである。本拠地の古賀村は南西部の下側水脈の海岸部に建てられている。



尾滝延太郎製図

この場所だと、①良質な水が得られる。

魚釣島（和平山）地図（「明治 33 年 地学雑誌」より）

また、②居住に必要な広さの平地が確保でき、珊瑚礁の岩山を切り開き、開拓本拠地（3千坪余面積）が造成でき、③船が発着できる船着場（掘割）が造れる。

さらに④冬の季節風の際は、魚釣島の南側の島陰に船を避難させることができる。

尾滝の地図に「和平山汽船錨地」として表示してあり、ここは汽船の沖泊、時化の際の避難場所にも近いなど最良の立地にあった。

それ故に、尖閣諸島の開拓本拠地・古賀村は、魚釣島の南西部に建てられた。



上空から魚釣島の写真、○印が開拓本拠地古賀村跡。(第 11 管区海上保安庁撮影)

○印が古賀村跡、海岸の掘割はぼんやり確認できる。ハゲ山状になっているのは墾地跡。後方山並みが豊潤な水をもたらしている。高く突出しているのが最高峰奈良原岳(452 ㍎)。



明治 41 年の和乎山（魚釣島）地図、○印が開拓根拠地の古賀村。この他に作業小屋、詰所の類か？ 島の数か所に、北側海岸、東岬、南斜面にあったことが分かる。

(明治 42 年「藍綬褒章下賜ノ件」より)

5、どのような経緯で、古賀村は建てられたか？

専門家に現地調査を依頼、助言を得て、開拓計画を樹てる

明治 28 年、古賀辰四郎は、「官有地拝借御願」を提出し、尖閣諸島開拓の認可を受ける。最初は、労働者を派遣してアホウドリの鳥毛、水産物を採取していたが、限界を感じた。古賀は、尖閣諸島開拓は、永住の方針で行うべきだと考え、開拓拠点の古賀村を建設し、永住民を送ると決意した。

明治 32 年に単身上京して、東京帝国大学教授箕作佳吉博士に教えを乞うた。

箕作は、弟子の理学士宮嶋幹之助を推挙した。

明治 33 年 5 月、古賀は、宮嶋と沖縄師範学校教諭黒岩恒 2 名に依頼し、現地調査を実施させた。その結果に基づき、開拓の基本方針を定めた。

- 一、鳥類魚介ノ濫獲ヲ戒メ繁殖法ヲ講シ種族断絶ノ憂ナカラシムルコト
- 二、家屋ヲ建テ移住者ノ安息ヲ図ルコト
- 三、久場島ニハ河泉ノ依ルヘキモノ無キガ故ニ天水貯槽ヲ設クルコト
- 四、船着ノ安全ト海陸運搬ノ利便ヲ図ル為メ碇繋所ヲ築クコト
- 五、道路ヲ開鑿シ兼ネテ汚穢物排除ノ方法其ノ他衛生的設備ヲ講スルコト



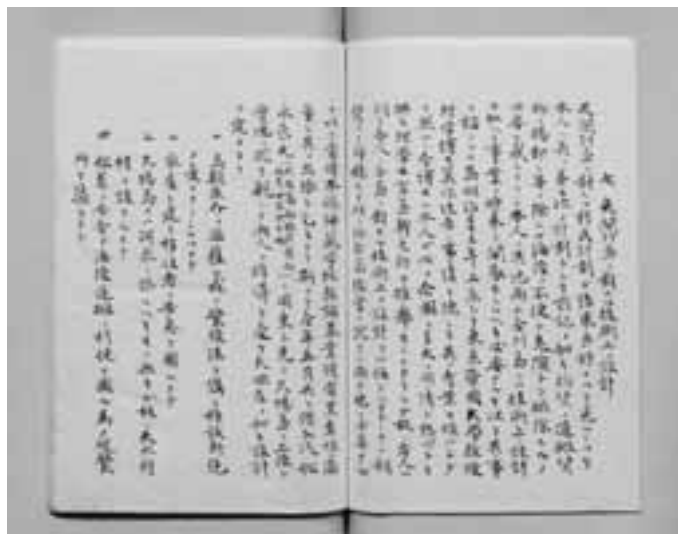
宮嶋幹之助



黒岩 恒

(「藍綬褒章下賜ノ件 明治 42 年」より)

次いで、熊倉県技師を招いて、開拓計画の現地指導を受け、本格的に古賀村の建設に乗り出した。



明治 42 年「古賀辰四郎へ藍綬褒章下賜ノ件」。この中に「七、尖閣列島ニ対スル技術上ノ設計」があり、古賀村建設の経緯を記している。(「外務省外交史料館」)

6、古賀村は、どのような構造となっていたか？

水の確保が最優先 山から水を引き入れ、水汲場、水タンク造る

絶海孤島で生存要件は、①水の確保、②食料の確保、食料自給自足体制の確立、③住まいの確保。④開拓者や必要資材、諸物資を運ぶ船が出入りができる港の建設である。

古賀はこの4点を如何にして解決しただろうか。

これを見ると、①水の確保は、良質な水が手に入り、移住者が安心して暮らせる衛生的居住環境を維持するための必須要件である。古賀はこれに意を注ぎ、山から水を引き入れ、各所に水汲み場、水タンクを設置した。事業所建物配置図(後出)に記されているだけでも水タンクは9個もある。



調査団も古賀村跡でキャンプをし、この水汲み場をよく利用した。
(新納義馬 1971)

のち琉大調査団によって、この水は酸性度の少ない魚釣島一番の良質の水であることが分った。古賀村は良質の水豊かな開拓本拠地であった。

魚釣島 飢餓の島、食えるもの クバの芯とシュウダだけ

魚釣島は飢餓の島だった。戦時中の昭和20年6月米機の爆撃を受けて遭難した疎開船が魚釣島に漂着した。石垣町民150名余が避難生活を送った。クバの木を倒し芯や野草を食べて、飢えをしのいで。50日後に救出された時は栄養失調や飢餓、病気で50名余りが亡くなっていた。1952年琉大・琉球政府資源局調査団で島に3日間滞在した上運天賢盛は、「魚釣島にいる時はズーとヤーサ(飢餓)した。食えるものはクバの樹の芯とシュウダ(臭蛇)だけ。用船した漁師から米分けてもらったから助かった。」と述懐している。

山林開墾し 耕作地60町歩に及ぶ 食料自給自足態勢 築く

古賀は、この飢餓の島を、豊かな実りある島に変えなければならなかった。

開拓の進展に伴い、移民は日を追って増加の一途。彼らの食を確保するためには、人跡未踏の山林を伐り倒して開墾し、豊かな沃土の耕作地に変えていかねばならなかった。

同列島ニ於ケル移民ノ数多キヲ加フルト共ニ、開墾ノ事業ハ益々忽諸ニ附スヘカラサルヲ以テ、此ノ点ニハ少カラス資力ヲ傾注シタル結果、現今開墾ノ地積六拾余町歩ニ達スルニ至レリ。而シテ栽植物ノ種類ハ重ニ雑穀甘藷野菜類等ニテ、日々移民ノ給養ヲ充

シツアリ。斯クテ其後移民ノ総数ハ二百四十八名ノ多数ニ達シ、戸数亦九十九戸ニ及ヘリ。右開墾ノ地積ヲ戸ロニ割当ツレハ、一戸ニ付六反歩余一人ニ付二反四畝歩ノ平均ニ相当セリ。斯クテ疇昔荒蕪タリシ無人ノ列島、今ヤ聖沢ニ潤ヒ次第ニ殷賑ニ赴ケリ。

(明治42年「藍綬褒章下賜ノ件」より)

②については、開墾面積は、60町歩(1町歩3千坪、18万坪)に達し、食料の自給自足態勢は築かれた。

「吾人は古賀氏に導かるゝまゝ行きもてあれば各所開墾の處には甘藷や、雑穀蔬菜類の美事に成長せるを認めたり」と漏溪は報告している。

雑穀甘藷野菜類の栽培とあるが、甘蔗、陸稻、麦、粟の穀類、豆類は味噌や豆腐を作るため大



古賀村後方斜面の耕作地跡、往時の面影もない。(新島義龍 1991)

豆を、また蔬菜類はゴーヤー、ヘチマ、ダイコンやニンジン、ゴボウなどが持ち込まれ、また、嗜好品として茶や煙草も栽培されたであろう。明治33年に大東島を開拓した玉置半衛門は、ダイダイ、マンゴ、パパイヤ、バナナ、レイシなど熱帯果樹を試植している。古賀もボンタン、ミカン、パパイヤ、バナナなどの栽培をいろいろ試みたであろう。

ブタ、ヤギ、ウサギも飼育 ブタは客人用か 正月用だった？

後出「事業所建物配置図」には、ブタ小屋が記されている。

このフール跡が戦後まであつたと漁師は報告している。

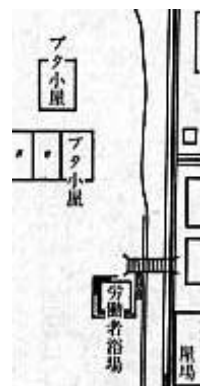
ここで飼育されていた豚はアグー(在来種)だったであろう。ブタは沖縄の人たちの好物であり、客人のもてなし、祝いの席や季節毎の節日には欠かせない食材である。

多くの移民(出稼ぎ者)島で年越を迎えたであろう。

ブタのご馳走は慰めの1つだったかも知れない。

また、昭和5年の新聞に古賀の息子善次に尖閣4島を払い下げるにあたって、沖縄営林署が実地調査に赴いたら、魚釣島にヤギもウサギ(黒)もいたとある。(先島朝日新聞「この頃無人島」昭和5.7.28)

ヤギは、昭和10年代には、山に放たれて、繁殖し、時化で出漁できない時は、漁師たちが山に入って、ヤギ狩りを楽しんでいたようである。このウサギ、ヤギたちは、開拓時代に山に放たれたものであろう。



ブタ小屋4か所ある。(後出「配置図」より)

珊瑚礁岩盤 爆破し 船出入りできる掘割（船着場）建設

③の住まいを一覧する前に、④の港の確保について見る。

珊瑚礁の岩盤をダイナマイトで爆破、掘削して、船が出入りできる掘割を築いた。

古賀氏が那覇の本店より回送する漁船より荷役をするに必要な舟、及び鰹漁船等の出入及び其の寄着きを便利ならしめんが爲め、古賀氏が多大の勞力と經費と、及び其の長き年月を経て、列島各嶼沿岸の各処に岩礁を開墾したる・・・其の船寄せ場＝港灣（掘割）の大なるものは奥行き五六十間もあるべく、間口は拾有七八間もあるべし。内地形鰹漁船は其の出口の處に於て自由に且つ容易に回轉運動をなすを得る・・・

（「前出「尖閣列島と古賀辰四郎氏（七）」」）

当時の配置図を見ると掘割の前には船捲き上げ機を設け、その横には造船所も設置している。船着場は、魚釣島に2個、黄尾島に1個、南北小島に1個設けている



魚釣島古賀村海岸前の掘割。サンゴ礁の固い岩盤をダイナマイトで爆破、掘削して造った船着場。暴風時に備えて船揚場も設置されている。（明治41年）

山の手から見た掘割。尖閣諸島調査団は古賀村跡にベースキャンプを設営、掘割を利用して本船からボートで荷下ろしする。写真は1979年開発庁調査団のキャンプ小屋。（荒井秋晴1979）



岩山切り開き 平地3千坪造成 堅固な石垣驕らし 家屋を建設

魚釣島・古賀村は、海岸部の凸凹起伏の岩礁を切り開き、3千坪の平らな地盤に、開拓本拠地として魚釣島事業所建物が建てられた。ここは西側から吹き来る風は猛烈を極め、時には高波、高潮を捲き起こして襲いかかるので、海岸には防波堤を築き、堅固な石積みを驕らして、安全を図らねばならなかった。

“明治40年代・古賀辰四郎作製”と記された建物配置図、即ち「和平安建物配置平面図」がある。この配置図の出典は不明だが、明治42年の「藍綬褒章下賜ノ件」に関わる資料として作製されたものと思われる。古賀の列島開拓は、その頃には大きな進展を見せ、鳥剥製とカツオ漁・節製造に力が注がれていた。

前者の鳥剥製事業の中心は南小島古賀村であり、魚釣島はカツオ漁・節製造である。

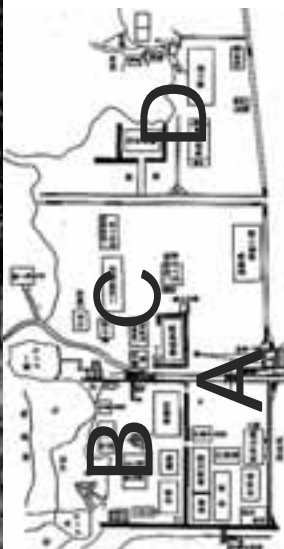
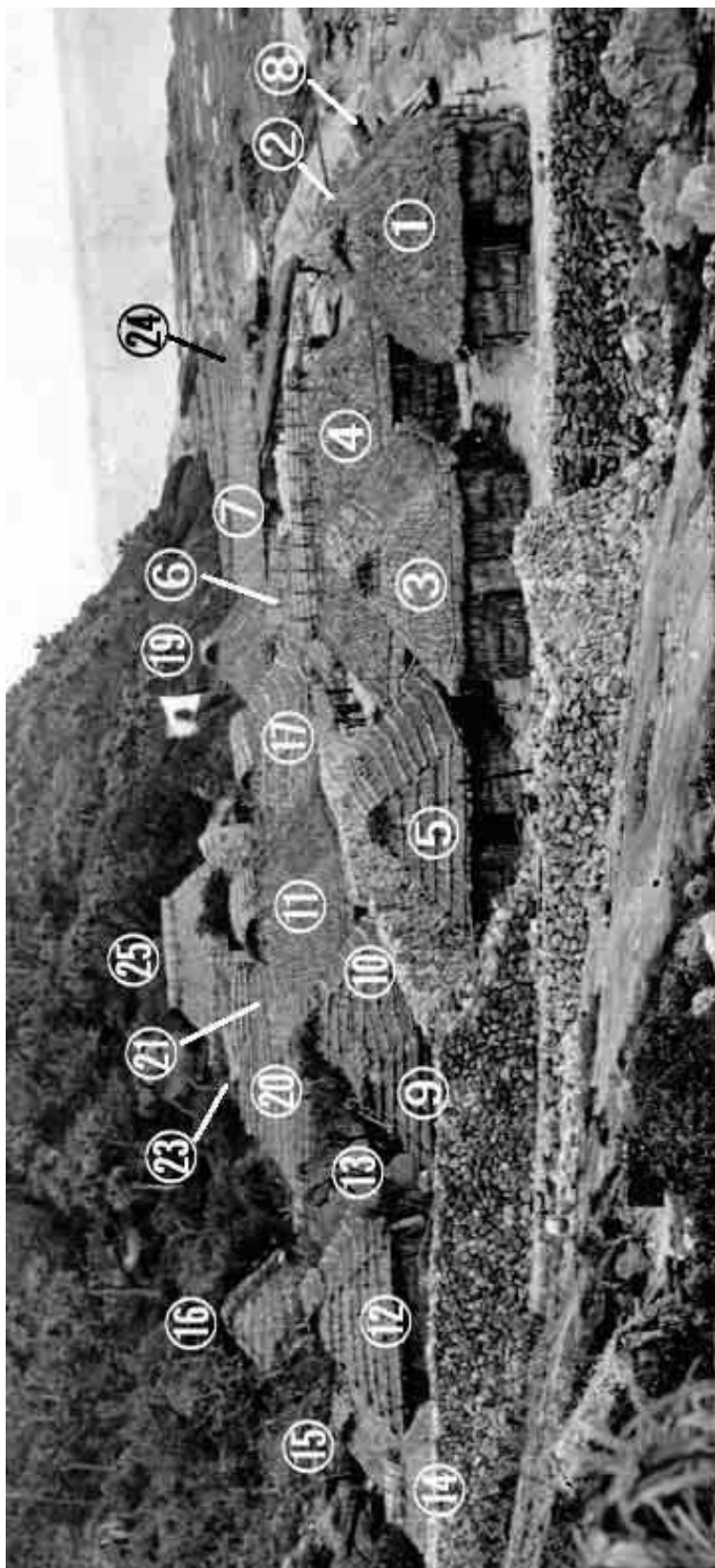
この建物配置図には、事業所本部（和平安事務所）があり、水産物採取とカツオ漁・節製造事業所建物が主である。作業場、鰹切場、鰹仕事場、女工場、鍛冶屋場、鰹釜納屋、塩焚屋とある。また住屋は、陸員住屋、海質？住屋、女工場住屋、小供住屋、製造人住屋、漁師住屋とあり、倉庫3棟、雑庫2棟、保存倉庫、鰹倉、石倉、製造道具小屋、火薬庫、等々がある。浴場も、労働者浴場、事務所湯風呂、漁夫浴場と仕分けされ、食堂も賄所：労働者食堂、労働者賄所、製造人賄所、漁師賄所、女工賄所とあり、機能的に分化されて建てられていることが分かる。



明治41年和平安（魚釣島）事務所。真ん中に古賀辰四郎がいる。（「藍綬褒章下賜の件」より）

尖閣諸島開拓本拠地：魚釣島古賀村の偉容（明治41）





- A地区(石積み～防波堤)：①鍛冶屋場・仕事場 ②陸員住屋 ③倉庫 ④作業場
 ⑤倉庫・海質住屋 ⑥労働者食堂 ⑦造船乗船小屋 ⑧船乗上場入口
 B地区(後背地高台西側)：⑨倉庫 ⑩雑庫 ⑪事務所 ⑫小供住居
 ⑬女工場同住屋 ⑭事務所湯風呂 ⑮女工場同住屋別棟？ ⑯客室
 C地区(後背地高台中央)：⑰鯉釜納屋 ⑱漁夫浴場(*) ⑲二階附製造人住家
 ⑳鯉切場 ㉑二階附鯉住居 ㉒薪小屋(*) ㉓二階附鯉倉
 D地区(東側斜面～海岸)：㉔漁師住屋・賄所 ㉕保存倉庫

(*)：上掲写真では隠れて見えない、次掲写真を参照

日の丸を高々と掲げ ここ国境の島 尖閣諸島 "日本領土なり"

尖閣諸島は、東シナ海に浮かぶ絶海の孤島である。往昔は日本に向かう異国船は沖合を航行し、また開国後は海外交易航路の近くに位置し、「通航スル大型汽船・・多キハ一週ニ二、三回ニモ及フコトアリ」(後出大正4年「見聞記」)と見聞され、外国船の往来が絶えなかった。国境の島古賀村には、「ここは日本領土なり」と国旗日の丸が高々と掲げられ、ヘンポンと風に翻っていた。日の丸のもとに集い揃った写真がある。開拓本部事務所と鰹釜小屋に、古賀ら幹部は正装して、客人を迎え、婦人たちはきれいに髪を結い上げ、晴れ着姿で、勢揃いしている。古賀の列島開拓に賭ける意気込み、気迫がひしひしと感じられる。

右下の写真は、鰹釜納屋の裏側から撮ったもので、中の様子は暗くて見えないが、茅葺の軒、梁や柱は頑丈に造られている。

奥には石垣囲いが見え。そこに立っているのが古賀辰四郎である。



上：鰹釜納屋前での
記念写真
向かって右には婦女子
中央は古賀ら幹部と客人
左は漁師が陣取る
日の丸ポール右寄りに
古賀辰四郎が見える
(明治41年撮影)

右：古賀は鰹釜納屋を
いたく気に入り
納屋前で写真撮影に
臨んだであろうか
(同上)



II、アホウドリ羽毛採集から、剥製、カツオ節製造へ

1、開拓草創期 アホウドリ羽毛 海産物採集から

好調な滑り出し 現地人夫任せで乱獲し 羽毛生産高 激減 窮地に

古賀は、開拓の認可後の明治30年3月八重山より、改良遠洋漁船（帆船）を建造し、これで以て出稼ぎ移民35名を送り込んだ。翌31年には、大阪商船汽船須磨丸（1600ト）を用船して、自ら移民50名を率いて渡島した。これを機に、列島経営は緒に就いた。

開拓初期は、海産物と鳥毛採取事業だった。

とりわけアホウドリの鳥毛採取は有望な事業と見なされ、列島経営の大きな柱と位置付けられていた。アホウドリ羽毛は神戸横浜の外商に好評だった。明治30年の1万7千斤から翌31年には6万5千斤、さらに翌32年には8万5千斤の羽毛を採集した。

だが、33年にはたちまち2万5千斤に激減した。アホウドリの捕獲は、現場の労働者任せだった。羽毛採集の成績を上げるため、乱獲に突っ走ったのである。

事業の継続を危ぶんだ古賀は、件の宮嶋幹之助に、改善策の調査を依頼した。

両先輩から得た教訓 アホウドリ乱獲して、激減させてはならん

アホウドリ事業先輩の玉置半衛門と水谷新六の2人から教訓を得ていた。

玉置は天保9年（1838年）生まれで、古賀は安政3年（1856年）であり、玉置は18歳年長だった。水谷は嘉永6年（1853年）生まれで3歳年長だった。

玉置は、明治21年に、すでに伊豆大島の鳥島でアホウドリの羽毛採集を始めていた。当時の鳥島は、無数のアホウドリで埋め尽くされていたという。玉置は、何人もの雇人夫を鳥島に投入し、ひたすらアホウドリを棍棒で殴って撲殺し、羽毛をむしり取った。1羽のアホウドリから大体百匁（375g）が採れたようである。年に平均40万羽のアホウドリを捕獲し、巨万の財を築き、有力実業家として全国長者番付に名を連ねていた。明治29年帝国ホテルの向かいに、豪壮なレンガ造りの二階建て邸宅を建て、アホウドリ御殿と呼ばれていた。



玉置 半衛門

だが、そのアホウドリは、番（つがい）で1年に1回の産卵で、繁殖は極めて遅い。

にもかかわらず、ひたすら撲殺乱獲したため、絶滅寸前に追い込まれていた。

明治35年には、鳥島は突然大噴火に見舞われ、アホウドリは絶滅した。噴火当時、玉置が派遣した雇人夫125人がいたが諸共犠牲となり、遺体は全く発見されなかったという。巷間ではアホウドリの呪いだったのでと噂された。



乱獲される以前の鳥島アホウドリ（明治10年頃）（「風にのれ アホウドリ」長谷川博著より）

一方の水谷も、明治29年南鳥島を発見するや、すぐに小笠原から労働者20名を投入して、アホウドリ羽毛採集を行っている。開拓当初は、南鳥島でもかなりの羽毛が採れたが、アホウドリアはすぐに激滅したようだ。

明治33年には羽毛採集からアジサシ類の鳥剥製事業に切り替えていた。が、35年頃には海鳥が激滅したので、水谷は鳥剥製事業も廃業している。

ともあれ、玉置と水谷ともに、アホウドリを絶滅に追いやった張本人とも言えた。古賀にとって、これは愚行としか思えなかった。目先の儲けだけ考えて、何ゆえ、アホウドリを乱獲し、激滅させたのだろうか。古賀は、事業に対しては先見性を持ち、明晰な頭脳と判断力を備えていた。この聡明な資質は列島経営のいたる所で発揮されていた。アホウドリ羽毛採集事業も長期視点でやるべきだとした。



水谷 新六

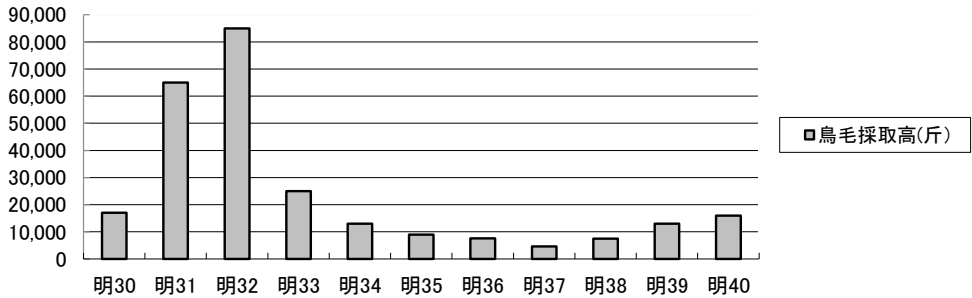
古賀、宮嶋の捕獲制限策 徹底させ、6年以降、回復基調に

調査を依頼された宮嶋は、古賀に、アホウドリが危うい状況にあると説明し、繁殖の障害にならない程度に制限する捕獲策を提言した。さらに、現場の労働者たちが、これをしっかりと守ってくれるか懸念していると付け加えた。

もし従来の如く労働者のなすまゝになし置かば、数年を経ぬ中に、信天翁は全く此島に其跡を絶つに至る可し、故に永遠の策にはあらざれとも先づ差當り鳥の採集に制限をつけ置けり、其制限は鳥の島より外へ飛去るものは少なくとも己に産卵に関係なきものなれば、之のみを捕獲し、他は禁するることとなし来れり、予の去りし後、該島の労働者果たして此禁を守り居る、懸念の至りなり、兎に角斯様に有用の鳥なれば充分に保護し、一定の制限を付して採集することは必要なり。

（「沖縄県下無人島探検談 宮嶋幹之助 地学雑誌第142巻 明治33年10月）

古賀は、捕獲制限策を徹底させた。下表は鳥毛採取高の推移を示す。



鳥毛採取高は、明治33年から37年まで捕獲制限のため減少しているが、6年後から効果が現れ始めている。明治38年から上昇に転じ、翌々年40年には、明治30年のレベルまで回復していることが分る。明治41年以降のデータがないが上昇傾向にあったと思われる

大東島開拓断念 生涯の不覚 古賀 玉置の開拓を倣う？

古賀の列島経営を考える場合、玉置と水谷の影響は大きい。2人は古賀のライバルでもあった。玉置も、水谷も、次の活躍の場を他の地に求めていた。

2人が目を付けたのが大東島だった。古賀は大東島開墾許可の第一号を得ていて、明治25年には、汽船大有丸で糸満漁夫31名引き連れ、南大東島に向かった。島に着いたものの、風波荒く上陸に危険を感じた漁夫たちの反対で、みすみす島を目前に、上陸を断念、無念の思いで帰航した。のち、古賀に続き何人かの冒険家が南大東島に上陸に挑戦した。

成功したのは玉置だった。明治32年、玉置は所有船第一回洋丸に、八丈島から島民ら22名を乗せて大東島へ派遣した。61日間の航海の末、大東島に到着、上陸を果たした。

以来、大東島の開拓は、玉置半衛門の手に帰するところとなった。

玉置が手掛けたのは、大東島での製糖事業であった。

玉置の大東島開拓事業は、地の利もあって、大発展の一途をたどる。

古賀は大東島開拓を断念したことを、生涯の不覚であったと述懐していたという。

古賀の尖閣諸島の開拓経営は、玉置の大東島のそれを倣っていたように思える。

この点についてはあとで触れたい。

さて、もう一方の水谷は元々南洋貿易に従事しただけあって、商才に長けていた。

鳥島では、アホウドリ羽毛採集の他、肉は絞って鳥油、残りは骨と混ぜて肥料にし、アジサシ類の剥製作りも行っていた。その海鳥が激減したので、南鳥島から撤退し、次の活躍の場を沖の大東島に狙いを定めていたかも知れない。だが、大東島開拓は玉置に託されることとなった。明治34年止むなく沖の大東島(ラサ島)の開墾出願し、帆船的矢丸に乗り込んで仲間らともに島に向かったが、途中嵐に遭った。フィリピンまで漂流し、沖の大東島の開拓を断念した。沖の大東島は、島全体がリン鉱石(グアノと石灰岩が化合生成された窒素肥

料の原料) からなる宝の島だった。

その水谷は、明治 36 年には、東京府から南鳥島の鳥糞(グアノ)の採掘権を得ていた。

台湾北端沖合に綿花嶼と彭佳嶼の 2 つの島がある。その北側に尖閣諸島はある。

水谷は台湾総督府に、綿花嶼と彭佳嶼のリン鉱石の採掘権を出願するといった按配だった。古賀は、尖閣諸島で、鳥剥製作り、鳥肉肥料や鳥油の製造、さらに鳥糞の採掘を行うことになるが、これは南鳥島における水谷の海鳥事業に倣ったものであろう。

2、鳥剥製、カツオ節製造に乗り出し、開拓経営盛り返す

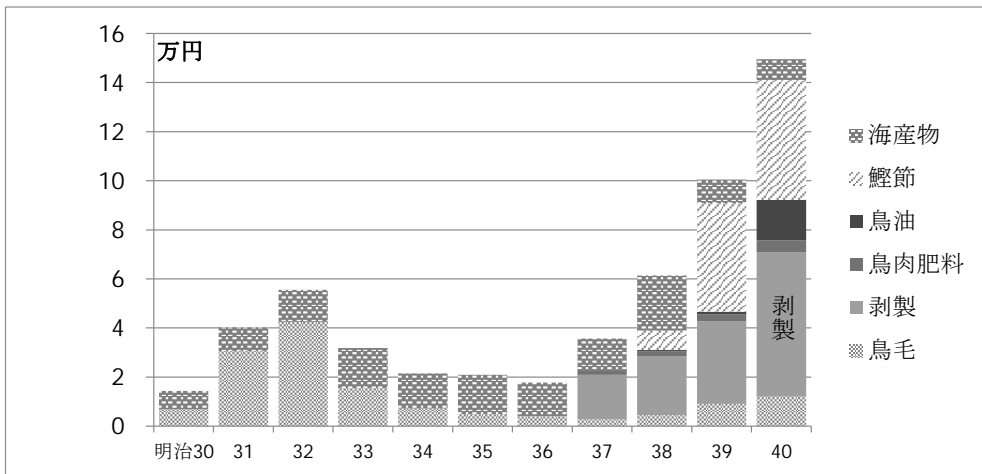
明治 37 年鳥剥製事業に着手 40 年には 鳥毛高ピーク時超す勢い

アジサシ類の剥製は欧米諸国の婦人帽子装飾用として有望だったが、剥製職人を探すことは容易でなかった。古賀は、明治 37 年、種々苦心の末、横浜で南洋帰りの剥製職人見つけて、16 名雇い入れ、南小島で鳥剥製事業に着手した。彼ら南洋帰りの剥製職人は、南鳥島の水谷の工場で働いていた剥製職人だったろうと平岡昭利 (2005) は推測している。カツオドリ、アジサシ類を剥製にし、初めて横浜神戸の外商に売込み、望外の好評を博した。



ドイツの画家フリードリヒ・アウグスト・カウルバッハの「羽飾りの帽子の若い女性」

明治 39 年には、鳥剥製品は、20 余万羽を輸出し、40 年度は約その 2 倍以上の取引を行った。また、剥製製造の際に出る鳥肉は絞って油を取り機械油にし、肉や骨などは肥料にして売り込んだ。その結果、海鳥事業は大きな伸びを示し、明治 40 年には下表で示すように、明治 32 年の鳥毛採取高ピーク時を超える勢いで成長していった。



明治 41,2 年頃の賑わいを、古賀辰四郎の息子善次（当時 17,8 歳）は、次のように述懐している。

南小島や北小島は海鳥の繁殖地になっており、・ウミツバメ（アジサシ類）の捕獲を大々的にやりました。そのころヨーロッパとりわけドイツではウミツバメのはく製が婦人帽のかざりとしてもはやされており、横浜の貿易商を通じてかなりの数量を輸出したものです・このころが尖閣諸島の最盛期で、シーズンには漁船員だけで八十人、カツオブシ作りや海鳥のハク製作りの人間もいれると、百五、六十人もの海の男が集り、にぎわったものです。

（日本経済新聞 「尖閣諸島のあるじは私 古賀善次」昭和 45.8.26）

沖縄カツオ業事始め 明治 34 年 慶良間・座間味の松田和三郎から

他方、古賀は、鳥剥製事業に着手した翌年、尖閣諸島においてカツオ漁、カツオ節製造にも乗り出している。ちなみに沖縄でのカツオ漁の発祥地は慶良間である。

明治 28 年頃宮崎のカツオ船が慶良間沖で操業していた。座間味間切長松田和三郎はカツオ業が有望なことに着目し、島の若者をカツオ船に乗せ、漁労・節製造技術を習得させた。

明治 34 年国頭沖で暴風で遭難した静岡の鱮延縄漁船(相生丸)を買い取り、カツオ漁を試み、カツオ節製造を始めた。沖縄においてカツオ業が慶良間座間味村で誕生した。

以後、カツオ業は基幹漁業として、枢要な位置を占め、製糖業と並び、沖縄経済を支え大きな発展を遂げる。明治 36 年松田らは購入した相生丸は鱮延縄漁船で、使い勝手が悪かったため、宮崎から金剛丸を購入した。これはカツオ船として建造された帆船で、船体も堅牢で設備も整い船足も速かった。連日大漁となり、その年に一躍 2600 余円の生産額を上げることができた。明治 38 年には安里積勲は、那覇において、「沖縄全島ノ水産物ノ製造ヲ改良シ、県内及ビ県外ニ販売スルヲ目的トス」として「沖縄水産製造会社」（資本金八万円、本店：那覇区西 99 番地）を設立した。彼の店の古賀商店は西区 96 番地にあり、99 番地とは目と鼻の先だった。カツオ業の将来性を人一倍見抜いていた古賀は、松田・安里らの動きを見ながら、尖閣諸島におけるカツオ業操業をすでに企図していた。

金剛丸翌年 漁船 3 隻新造 明治 38 年には 尖閣諸島で カツオ業

南西諸島はカツオの好漁場だった。宮崎鹿児島のカツオ船（帆船）が南下し、沖縄本島近海で操業し、賑わいを見せていた。尖閣諸島はこれに劣らず好漁場だった。

件の漏溪はカツオが沿岸を帯状で群れなして回遊来りて、頭上は無数の鳥が鳥巻となって乱舞、海中に突っ込みながら、カツオを追いかけている様に驚嘆している。

（尖閣）列島沿岸の鰹魚道は、漫々たる海洋見渡す限り、数十裡に亘りて、長き通路をなして魚群の往来せるを認むる・其の黒潮急流の通する處、海面に長き帯をなし、數萬若くは數十萬の海鳥其の上に飛翔し、或は海波の上に隠頭たるの有様、奇觀、大

観と謂つべき・・・蓋し海面鳥群の集まる處、魚族其の下に居て食餌を逐ふものなり・・・
(前出「尖閣列島と古賀辰四郎氏」)

古賀は、すぐ様カツオ業に乗り出した。座間味の金剛丸購入翌年 37 年には、カツオ船 3 隻を内地において新造し、魚釣島にカツオ節製造工場も建て、宮崎県より熟練のカツオ漁師たちと節製造人数 10 人を雇入れて、明治 38 年には、カツオ船を操業させ、節製造を始めている。古賀の時機を見る目、決断の速さ、そして先進地に赴き、カツオ漁師と節製造人を探し当て、尖閣諸島に招聘し、カツオ漁と節製造させる行動力には驚かされる。

餌小魚・カツオも 沿岸で 漁場近い 操業 数倍有利

古賀は、「藍綬褒章下賜ノ件」(明治 42 年)の中で、「同列島ニ於ケル鯉漁ノ有望ナルコト第一ハ食餌ノ潤沢ナルト鯉ノ魚群ガ極メテ近岸ニマテ来集スルニヨリ必スシモ遠洋ニ出漁スルノ要ナキ等孰モ天与ノ好適地ナル・・・」と自賛し、沿岸で、餌の小魚も採れ、カツオも釣れる、漁場が近い利点をあげている。

件の漏溪も、久場島から魚釣島へと魚道が続く様を目撃し、その魚道は和平山(魚釣島の別称)から僅か十数町(約 1.5~2.0km)ほどしか離れていないため、尖閣諸島での操業は日に 4 度の出漁が可能であり、「列島中鯉の大漁に際しては一日六、七千尾以上一萬近かくの鯉魚の釣り上げられることもありと云ふ」と驚き記している。カツオ船は帆船だが、尖閣諸島は沿岸近いため、一日に数度の出漁が可能だった。古賀が新造したカツオ船 3 隻は操業結果は良好だったが、その年襲った暴風で 3 隻とも破壊された。だが、翌 39 年にはカツオ船 5 隻を新造したという。古賀の経済力というか、スケールの大きさには驚かされる。

年々のカツオ節製造高は 6、7 万斤を越え、「爾来一層ノ好成绩ヲ収メツヽアリ」と記している。カツオ節工場も古賀一流のやり方で大胆大規模だった。漏溪は見聞している。

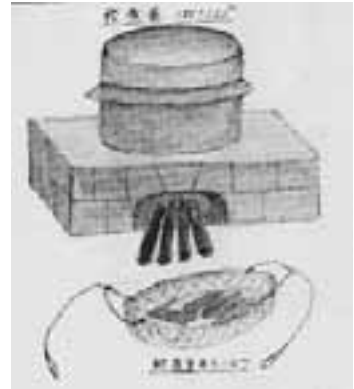


掘割に帰港するカツオ船、手漕ぎの帆船である。尖閣諸島はエサ小魚もカツオも沿岸で獲れ、漁場も近いので他に比し数倍有利だった。(明治 41 年)

其の鯉節製造場に据へ付ある製造釜の太さは口經三尺四、五寸計りなるが六個相並びて一棟の内に据付られ、他に二個の製造釜が別屋の内に据へ付ある認めたり。此の外、不時の準備の爲めにとて四個の釜は用意せられありしが、此の一釜による鯉節の煮沸量は通常一回四百本に及ぶものあるが故に、六個の釜が全時に活動する時は、煮

沸を始めたるより僅々數十分時にして二千四百本の鰹節は、先づ其の第一次の製造を見る譯なり。然るに鰹節の製造は、其の全たく終了に至るまでには、燻蒸其の他六、七回の手數を経て始めて完成を告ぐる次第なるを以て、他に之れに處する設備は幾ヶ所にもありたる・・。

(前出「尖閣列島と古賀辰四郎氏」)



古賀時代の鰹煮釜と煮釜用蒸籠。
(「思い出のわが島・太田正義画」)

尖閣列島産カツオ節 形状整い 品貨優良 高い評価得る

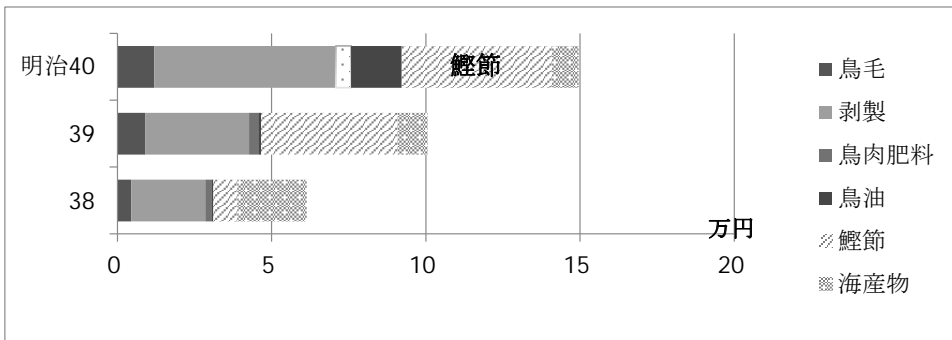
古賀のカツオ業に賭ける意気込みは高かった。尖閣諸島産カツオ節は、評価はよかった。明治42年5月25日付沖縄毎日新聞は、「大日本水産会主催の第一回鰹節即売品評会で、古賀出品の鰹節は2等賞銀牌をもらい、本節十貫目に付き53円50銭で売れた」旨と報じている。鰹節製造人は当初は宮崎県から雇入れたが、その後土佐節を製造するにあたって明治41年頃から四国方面の節削り女工に切り替わったようである。明治43年には、形状整い、品貨優良であるとして、市場で高い評価を得ている。

古賀辰四郎氏の経営に處する尖閣列島に於て製造せられたる鰹節は、主産地より雇ひ來られる熟練なる製造人に依て製造せられしものなれば、形状整い一品貨優良にして良く貯蔵に堪へ、亦雇人も一定の主義の下に一意熱心に改良進歩を計り居る模様なれば、大に市場に於て稱揚せられ鰹節界に於ける一霸王たることは之を認むべきなり。

(沖縄毎日新聞 本県と鰹節(続)：勝男武士 明治43.9.27)

明治38年に始めたカツオ業は高い勢いで伸びていった。明治40年には剥製生産高を越す勢いである。明治39年は4.4万円(前年0.8万円)前年比で5.6倍、翌40年は4.8万円、前年比1.1倍の高い伸び率である。まだまだ伸びる勢いである。

古賀は、このカツオ業に大きな期待を持っていた。



2、労働者確保に苦慮、目ざすのは、永久移住民

労働者の確保に苦勞 食糧日用品支給、高賃金で雇う

尖閣諸島の開拓経営は、年追って大きく進展していったが、開拓当初は、労働者の確保には相当苦勞したようだ。新聞広告で募集したが、絶海の無人の孤島であり危険を恐れて志望する者は少なかった。応じてきたのは、仕事にあふれた一癖二癖もある者だった。しかも驚くほど多額の賃金を要求してきた。食料煙草その他日用品を給与した上、高額な賃金を支払っていた。ところが、島での仕事に慣れると、意外に労働は容易で収入は多いと知り、帰還すると友人知人にこれを吹聴したため、出稼ぎ志望者は次第に増えてきた。

志望者が増加するに随い、労働者の選択を行い、優秀な労働者を送り込みことができたようだ。

明治 33 年 3 月 労働人 今回よりは 家族携帯も差し支えなし

明治 33 年 3 月の労働者募集の広告欄の外に、“家族携帯も差支なし”とある。

●無人島開墾地労働人募集 本日の広告欄に掲示の如く古賀辰四郎氏には来る四月十日頃無人島開拓地へ渡航の筈にて目下労働人募集の由るか聞く所に由れば従来の労働人は男子のみに限りしか今回よりは家族携帯も差支なしと。

(琉球新報 明治 33.3.29)

家族同伴、夫婦同伴でも可とのことである。古賀は、一時的な出稼ぎ労働者ではなく、永久移住民の確保に腐心していた。また、移住民が増えると、賄い婦、雑役など婦女子の働き手が当然必要だった。

左：久場島開拓主任
井沢弥喜太夫妻
と次女の娘
後列中央は弥喜太
(明治 41 年?)

右：琉球新報紙
(明治 33.3.29)



出稼ぎ人募集 開拓進展に伴い、募集広告に変化

当時の新聞に掲載された出稼ぎ人募集広告を幾つか掲載した。この広告から古賀の開拓経営の変化が読み取れる。「無人島か」から「無人島（ヨコン・久場島）」、「尖閣列島（無人島）」へ、また雇い主についても、「古賀辰四郎」から「古賀商店」に変化している。

<p>明治 32 年 4 月 5 日</p>	<p>明治 37 年 8 月 9 日</p>	<p>明治 39 年 2 月 11 日</p>
<p>明治 40 年 4 月 25 日</p>	<p>明治 42 年 3 月 30 日</p>	<p>明治 43 年 4 月 23 日</p>

(琉球新報掲載出稼ぎ人募集広告)

明治 39 年 2 月 11 日付け広告の本文を記すと、「広告 無人島出稼人募集 陸業従事者 40 名 鰹漁従事者 20 名 事務員 2 名 但し事務員は 25 年以上にして履歴書を要す 右募集す 志望の人は本月 25 日限り御来談あれ 2 月 6 日 那覇区 古賀商店」とある。

これまでの広告に比べ、募集内容が具体的になり、開拓の規模拡大と分業化が進んでいることが窺える。翌 40 年 4 月 25 日の広告には「医師 1 名」を募集している。

明治 43 年 4 月 23 日の出稼ぎ人募集では、初めて「尖閣列島（無人島）」と記している。

明治 33 年に黒岩恒が「・・此の列島には、未だ一括せる名称なく、地理学上不便少からざるを以て、余は窃かに尖閣列島なる名称を新設する・・」（尖閣列島探検記事 地質学雑誌 140 巻）と命名して 10 年、漸くにして当の島の主である古賀の方も「尖閣列島」を使用するに至っている。

熟練労働者 宮崎、高知、横浜から連れて来る

尖閣諸島の開拓経営は、明治 37 年以降、カツオ業と鳥剥製事業に新規参入し、大きな進展を遂げたが、これは熟練労働者が貢献する所が大なる所以であった。

一般労働者は、新聞広告するなどして、沖縄本島、宮古八重山、与那国など県内各地から

確保できたが、熟練労働者、即ち当時数少ない技能労働者である。彼らを県外各地に求めざるを得なかった。このため古賀はその確保に奔走する。カツオ節製造人は、宮崎県油津辺りから雇入れたが、その後土佐節を製造するにあたって四国方面の節削り女工に切り替えた。

熟練労働者の確保は時間と金が掛かるなど一苦勞であったようだ。

鳥剥製職人の場合、東京横浜各地を探したが得られず、種々苦心の末、横浜で、彼らを見つけ16名を雇入れることができた。彼が提出した「藍綬褒章下賜ノ件」(明治42年)には、明治41～45年の事業計画がある。これに、毎年、カツオ漁は監督者3人・漁夫120人～220人、海鳥剥製業は監督者3人、剥製職人150人の雇い入れも計画している。

古賀は、この新規事業に大きな期待をかけていたことが分かる。列島経営を大きく発展させるには、彼ら熟練労働者の力が大きいことを認識していた。

永久移住者目ざし 東北から、子供雇いを、試験的に雇い入れ

このためにも、古賀の開拓経営の方針は「永久的労働者ノ移植」であった。苦勞して労働者を確保しても、彼らが作業に慣れる頃には契約期間が過ぎてしまい、いろいろと不利益、不都合を被っていた。

この問題を解決するため、明治41年5月宮城福島2県より、7歳～11歳の子供たち11名を丁年(成人)までの契約で連れて来た。11名うち2名を除き外は皆不就学であり、移住者の1人に山形県師範学校卒業生がいるので、教育の任に当たらず予定としている。

沖縄の「糸満売り」に倣ったものだろう。糸満漁師の雇い子(ヤトイングワ)方式を「永久的労働者移植ノ計画」として試験的に導入を試みていた。



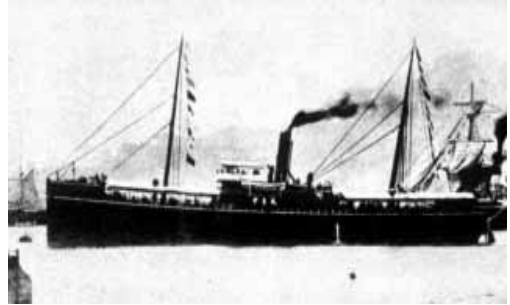
前出「鑿釜納屋前」記念写真の一部を拡大したもの、左端に子供たち5人の姿がある。子供たちも5月に来ているから渡島間もなく撮った写真か、少し戸惑っている様子が見られる。

3、絶海の孤島 交通の隘路 切り開く

日本初千ト超す豪華商船「須磨丸」借り受ける

尖閣諸島は遠隔の無人の島であり、人間を寄せ付けない荒海の只中であつた。

明治30年には改良遠洋漁船2隻で、甥の尾滝延太郎を遣わし尖閣諸島に出稼ぎ労働者35名送り込んだ。翌31年には、大阪商船の汽船須磨丸(1600ト)を用船して、自ら労働者50名とともに渡島した。



日本初千ト超す商船「須磨丸」。完成後間もなく三菱から大阪商船に売却された。(「昭和船舶史」より)

この須磨丸は明治28年建造、日本初の千トを超す商船であり、全通した二重底の商船として、日本造船史上に特筆すべき船とされている。この千ト超す豪華客船須磨丸

を、当時無名だった古賀が用船したわけだから、尋常でない。金に糸目をつけないスケール大きさと言うか、先見の明か、彼の豪胆さには驚かされる。

用船から回航船へ、汽船三浦丸を購入し、列島航路に供する

以後、尖閣諸島へは航海の安全を考えて汽船を回航させ、交通路を切り開いた。

明治39年には、汽船三浦丸(のち辰島丸と船名変更)を購入している。

その理由として「同列島ニ於ケル事業ス其緒ニ就クト共ニ、本島トノ交通モ從テ繁劇ヲ加フルヲ以テ、他ノ借入船及回航船ナドニ依頼スルハ不便不利尠カラサルヲ以テ、同島トノ運輸ヲ円滑ナラシムル為メ汽船ノ購入ヲ企図シ、明治三十九年十一月台湾総督府所有船三浦丸(百四十五噸)ヲ購入シ、之ヲ辰島丸ト改称シ該列島トノ交通ニ供スル事トセリ」(前出「藍綬褒章下賜ノ件」)としている。

活気づく尖閣諸島・古賀村、明治40年には、回航年11回に増加

尖閣諸島への汽船回航度数を見ると、明治31年の年2回から、明治40年には11回と増加している。40年に回航した船は、「球陽丸、辰島丸、仙頭丸、宮島丸、三笠丸」となっている。ちなみに、明治40年9月3日の琉球新報は「縣下の宝庫 無人島の産物」として、尖閣諸島産の輸出品が大阪商船二見丸に積載され内地へと輸出される様子を報じている。輸出品の内訳はアジサシ鳥142箱、鰹節55包、肥料及諸雑貨160包。アジサシの剥製は婦人帽装飾材料としてドイツへ送られる、この年約30万羽の剥製を製造したこと。今回積載した鰹節は見事な大節で総量凡そ5tである。肥料の原料はアジサシの剥製を製造する際に出る肉と骨であり、またその際に出る脂かすを絞り機械油として製造していること等々記している。この積載の様子を新聞記者を含め県知事奈良原以下多数の人々が那覇港で観覧したとした。

明治 40 年代に入り、カツオ節及び海鳥剥製の製造が盛業していたことが窺える。

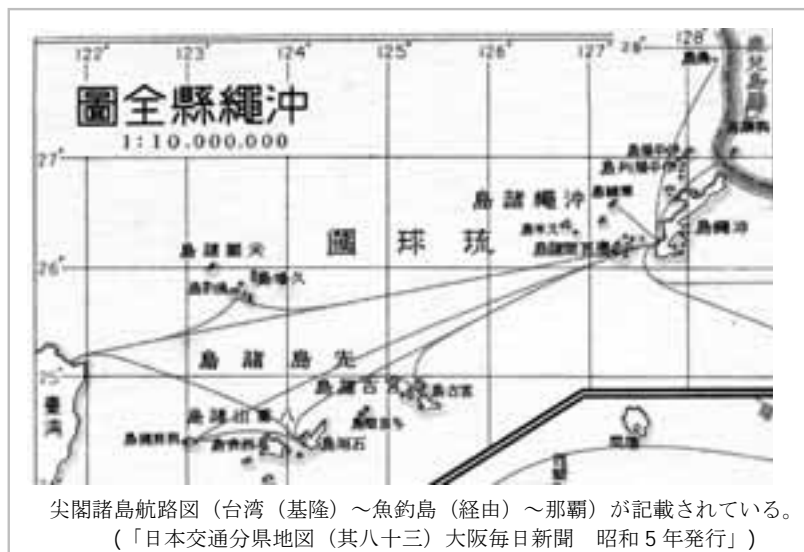
魚釣島の沖合には、汽船が停泊し、尖閣諸島で生産された物産を輸送するため、艇舟が荷役作業で頻繁に行き来して積荷し、古賀村は賑わいと活気に満ち溢れていた。



古賀村沖合に停泊した球陽丸。この時は多数の乗客を乗せて来た。明治 41 年 5 月

明治 41 年 8 月 16 日の記事には「辰島丸 同船は（台湾）基隆より尖閣列島を経て（那覇港へ）入港せり、乗客は無人島出稼ぎ人等男 11 名、女 1 名ありたり」とある。

尖閣諸島への航路は、「日本交通分県地図（沖縄県全図）」にも掲載されている。だが、これは昭和 5 年印刷である。大正以降、尖閣諸島へ汽船の回航はなされていない。この理由は後に述べるが。だとしたら、これは先の記事で見たように、明治 40 年代には、基隆～魚釣島（経由）～那覇の航路があったようだ。これをもとに作成された航路図と推測 4 される。



4、物産の輸送と販売 古賀商店と支店 大阪古賀商店担う

古賀商店：那覇西町 古賀支店：石垣大川

尖閣諸島で生産された物産の輸送、販売は、那覇西町の古賀商店と八重山支店 大阪にある大阪古賀商店が担っていた。



那覇西町にあった
古賀商店
昭和 19 年 10.10 空襲で
土蔵（左端）残して消失
（「望郷沖繩」より）

石垣町大川にあった
古賀商店八重山支店
戦災で焼失
（「八重山写真帖」より）



海外輸出の窓口 大阪古賀商店が担う 2人の兄が経営

尖閣諸島の本格的な開拓は古賀辰四郎の商才と資本、なにより大阪古賀商店という海外輸出への窓口がなければ成し得なかったろう。

彼を支えていたのは2人の兄が経営する大阪古賀商店だった。

大阪古賀商店については論文「古賀辰四郎と大阪古賀商店：望月雅彦」（南島史学第35号収録）に詳しい。同論文によると古賀商店は八重山—那覇—大阪と、各々役割を分担し大阪古賀商店は主に販売を、那覇古賀商店は商品の開発と仕入れを受け持っていた。大阪古賀商店は大阪西区にあり主に各種介殻や真珠を扱う海産物問屋として営業していた。なお、八重山古賀支店、那覇古賀商店、大阪古賀商店共に山に三の商号で統一されている。



左端：
八重山古賀支
店広告

右上： 古賀 與助

那覇古賀商店広告

右下：

大阪古賀商店広告

それぞれ山に三の商号を用いている
事がわかる。

望月雅彦氏著「古賀辰四郎と大阪古賀
商店」に掲載の「the trade directory of
the kansai」1895を使用。

長男国太郎、大阪古賀商店を經營し、次男與助が引き継ぐ

古賀辰四郎は4名の男兄弟がいた。

古賀國太郎（長男） 古賀 與助（次男）
古賀辰四郎（三男） 古賀 光藏（四男）

長男國太郎が亡くなり、大阪古賀商店營業主は、次男與助に代わる。資料によると大阪古賀商店は大正末年頃まで營業活動していた様だ。墓碑に與助の事蹟が記されている。

與助ハ嘉永五年八月二十六日父喜平母キマノ二男トシテ山内村ニ生ル・明治十年戰役平定後長兄ト共ニ鹿児島市ニ出テ商業ヲ営ム後機敏ニ商機ヲ察シ大阪市ヲ中心ト

シテ沖繩縣物産ノ貿易ヲ始メ就中介鉤ノ原料介穀類ハ廣ク南洋方面ヨリ輸入シテ相當利潤ヲ得タリ爾來堅實ナル基礎ヲ固メツ、次第ニ其ノ大ヲ致セリ晩年其業ヲ養子ニ譲リ悠々自適余生ヲ郷里其他ニ送り遂ニ大阪ノ自邸ニテ永眠セリ故郷愛ノ熱情強ク川崎小學校ノ村立圖書館ハ與助ノ寄附スル處其他各面ニ寄附セシ金額亦頗ル多シ」とある。



故郷福岡県八女にあった古賀兄弟の墓。右から長男國太郎の墓
次男與助・三男辰四郎合同墓、脇の人は墓守していた古賀六郎。
(古賀安徳提供)

なお、同墓碑の辰四郎の碑文については、IV-5 で詳述する。

Ⅲ、開拓経営 愈々軌道に 目指すは カツオ王国

1、古賀辰四郎、開拓功績認められ、藍綬褒章を受与される

人之れを危み密に指笑するも、今大発展の域に達し、羨望せらるる

明治 42 年 12 月、古賀は尖閣諸島の開拓功績が認められ、藍綬褒章を受与された。

沖縄県においてカツオ産業で功績あった明治 36 年松田和三郎の褒章に次ぎ、第 2 号だった。古賀の褒章は「官報第七九五四号明治四十二年十二月二十七日」に掲載されている。



藍綬褒章(Medal with Blue Ribbon)
 (「内閣府ホームページ」より)

翌 43 年元旦の沖縄毎日新聞は、「琉球群島に於ける古賀氏の業績」と題して、尖閣諸島開拓の業績を 8 回(01/01~14)にわたって連載し紹介した。また、古賀の友人の護得久朝惟(号:緑堂)が「投書 古賀辰四郎君の褒賞を慶す 緑堂」と寄稿した。古賀の開拓を見守ってきたことが分る一文である。

古賀辰四郎君此の度藍綬章を受けられたる吉報に接し、余は友人として深く君の光栄を慶す。君が尖閣列島を経営するの初に当りてや、人多く之れを危み甚しきは密に指笑するものありしを知る。絶海無人の孤島、其業たる実に容易ならず。

報酬を厚くして漸く労働者を得、汽船を賃してかろうじて食料を供給し、新に岩礁を砕て舟の碇泊場を設け、或は野菜を栽て不時の用意に供ふる等の困難に加うるに、鳥毛の採取より鳥類の剥製に変じ、貝類の漁労は艇船の製造となり、事業の曲折又た苦心の少からざりしことを見るに足る。

今は経営其の緒に付き更に一大利源の発見ありて大発展の域に達せんとし、漸く人に羨望せらるるに至れるも君の如き熱心精力、人に超越したるものなきに非は終始一貫、此の孤島を玉化せしむるに堪えじや否、俄に期すべからず。

此の如き苦境を経て茲に成功の一端を国家に認められたる君の喜余は遙察に余りあるを知る。



「古賀辰四郎へ藍綬褒章下賜ノ件」(明治 42 年 11 月)

今にして 人もうらやむ浦島か このよろこひに あへる君かな

君が画ける未来の金殿玉楼は乙姫の昔語りに非ず、必ず現実すべきを信じ、且つ国家の為に之を訴るもの也。 緑堂。」(琉球新報 明治 43.1.14)

100名余の各界紳士 風月楼に招き 披露宴を開く

古賀は、海産物商としての実績と尖閣諸島開拓の功績を認められ、賞勲局より表彰を受け藍綬褒章を下賜された。県庁に燕尾服姿で出頭し県知事日比重明より褒章を受け、後日古賀は知己朋友を風月楼に招き披露宴を開いた。集まった各界紳士は百数名、料亭の表座敷全てを開け広げ、古賀の挨拶に始まり県知事以下関係者の祝辞が続き、最後は那覇区長喜入休の音頭による古賀氏の万歳三唱で酒宴へと移ったそうである。

2、列島事業ノ経営 帝国産業界ニ貢献スル所大ナラン

これからが本領発揮 将来見据えて 遠大な計画打ち出す

古賀は希代の開拓者、壮大な夢を持った事業家であり、果敢な挑戦者だった。

古賀が政府に提出した「褒章資料」がある。これ読んでみると、藍綬褒章の受賞はさらなる出発点だった。彼は、「此ノ他同列島ニ対スル事業ノ経営ハ、将来拡張シ又新ニ着手スヘキモノ多々アリ之カ経営ノ目的ヲ達セハ、帝国産業界ニ貢献スル所頗ル大ナラン」とし、これからが本番、本領発揮するとし、将来見据えた遠大な計画を打ち出している。

「明治四十一年度以降尖閣列島経営豫算書」の中で、山林開発への意欲を示し、軌道に乗り始めた鳥剥製は「監督者3名外150人」を雇入れる。またカツオ節製造事業も拡大増しカツオ船17隻新造、「監督者3名外漁夫120人～220人」を雇入れる。

またサンゴ採取事業にも乗り出すという遠大な計画を樹てている。

同計画書（該豫算書）から、①山林開発事業、②サンゴ採取事業、③カツオ漁・節製造事業について見てみよう。

クスノキ 毎年2万本植え付ける

松杉・養蚕 ヤギ・ウサギ牧畜も

古賀は、①の山林開発にも意欲的だった。

明治42年には魚釣島、久場島の開墾面積は60町歩（18万坪）に達し、ここで産出した雑穀甘藷野菜類等は、日々の食卓に供せられていた。

明治39年、古賀は台湾よりクスノキ苗3万本購入し、これを魚釣島、久場島に植付、好成績を得た結、5ヶ年かけて10万本、毎年2万本を植付・植林するとしている。

松杉や柑橘ミカン、トリモチの木の栽培、また天然野生の桑の木があることから養蚕も：計画し、百合の球根栽培も試験的に試みていた。

またヤギ、ウサギなどを繁殖させ牧畜も考えていた。だが、それらは山林、平地の効率利用と食料供給のためであり、開拓経営の大きな収入に利するものではなかった。



魚釣島に咲き乱れている百合。愛らしさで調査団を慰めてくれた。（多和田真淳 1952）

サンゴ漁に大きな期待 土佐より 珊瑚網買ひ来り 毎年5艘新造

②のサンゴ採取事業を見ると、大胆で、先駆的な計画だ。

明治40年には「愈々土佐より珊瑚網を買ひ来り試験的に行ひつゝあり」とある。

土佐から来たカツオ加工職人から話を聞き、興味を持ったのだろうか。名にし負う土佐はサンゴ漁の発祥地・本場でもある。明治6年藩の禁令が解かれるや、サンゴ漁が忽ち盛んになった。明治20年代にはサンゴ船が700隻もいたという。今も土佐はサンゴ漁が盛んで、100隻余りのサンゴ船が操業している。

ともあれ、古賀は、何の情報をもとに、尖閣海域はサンゴ有望だと知ったのか。台湾海域にサンゴ漁場が着目され、もしや尖閣海域にもと期待したのだろうか。

古賀は、毎年「珊瑚船を5艘新造」、「珊瑚採取者」20人雇入れ、5年後には珊瑚船20艘、採取者100人に増やすと計画、サンゴ採取事業に大きな期待を寄せていた。

初年度から3万円の収入も見込み、船1艘中り600円、明治44年20艘で12万、45年9万円の収入を計上している



上: 土佐西泊天満宮天井絵に描かれたサンゴ漁の様子
下: 明治期の土佐サンゴ船(手漕ぎ帆船)の操業光景、古賀のサンゴ船も同様だったろう。(「珊瑚」より)

	明治41年	明治42年	明治43年	明治44年	明治45年
珊瑚船(漁師)	5艘(20人)	10艘(40人)	15艘(60人)	20艘(88人)	25艘(100人)
収入	30,000円	60,000円	90,000円	120,000円	90,000円

※珊瑚船艘数：累積艘数

このサンゴ採取事業の顛末は不明だが、毎年、5艘新造予定のサンゴ船はどんな船だったのか。予算書から計算すると、1艘建造費200円である。カツオ船建造費750円と比べると3分の1以下である。右上写真に見るような5、6名乗りの小さな手漕ぎの帆船であったろう。この帆船で以て、尖閣でどのようにサンゴ採取を企図していたのだろうか。

200メートル深さに サンゴ探す どんな方法で 網入れた？

宝石サンゴは、海底120～200メートルの深さに生育する。サンゴ漁は、船からサンゴ網をこの深さの海底に下ろし、船を走行させながら網を引っ張り、サンゴを網に引っ掛けて採る漁法である。即ち、(1)海底の深さを魚群探知機で測りながら、サンゴ生えている場所(120～

200メートル深度域)を探していく。(2)サンゴが見つかったら、ブイを投げ、これを目印にサンゴ網を入れる。(3)網入れたら、潮の流れを見ながら船を走行し、サンゴ網を引いていく。

(4)サンゴを引っ掛けたら、網を揚げて、引っ掛かったサンゴを網から外して採るという手順である。右図は、明治43年頃のサンゴ網である。古賀が買い求めたのも同様に、今でもほぼこの形が使われている。

(1)と(2)について、古賀が雇い入れた土佐のサンゴ漁師は、どんな方法で、海底の深度を測りながら、漁場を探し出し、そこに投網したのだろうか。これが第1の疑問である。

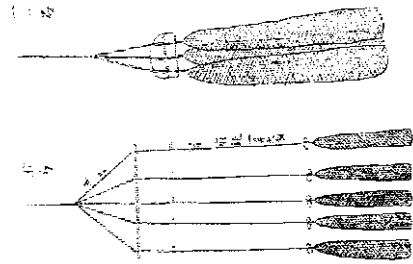
沖縄では、大正以降になると、底魚を獲る深海一本釣りや底延縄が盛んになった。深度120~200メートルにいる底魚を狙う漁法である。魚探がない頃は、彼らは、縄に長さを印し、これを海に入れ深度を測っていた。この操業もサンゴが生えた場所と同じ深度で操業することから、彼らの釣り針に、たまにサンゴの破片が引っ掛かってくることがあった。

これがサンゴ漁場発見の決め手ともなった。

戦後沖縄で、古賀と同様にサンゴの魅力に憑かれた男がいた。森田真弘である。彼は沖縄にサンゴは必ずあると信じ、家財を擲ってサンゴ探しに奔走した。魚探、方探など近代装備したサンゴ船福太郎丸

(19ト)を拵え、土佐から招聘したベテラン船長中

平謙太郎を乗せ、南西諸島全域で、サンゴ探しを始めた。だが、簡単に発見できなかった。1年目は無論ダメ、2年目も、3年目もダメ、森田は、資金も底を尽き、半ば諦めかけていた矢先の4年目に、たまたま、この深海一本釣り船が、宮古宝山ソネで、サンゴの破片を引っ掛けた。これを手掛かりに、森田の福太郎丸は、サンゴ漁場をようやく宝山ソネで発見することができた。これがきっかけで、1960年代の沖縄の一大サンゴブームが起こったのだが、このことは魚探など近代装備を備え、百戦練磨のベテラン船長を得てしても、サンゴ漁場の発見が如何に困難かを如実に示している。



明治43年代土佐で使われたサンゴ網
古賀が試みたのも同様の網だったろう

手漕ぎ帆船なら 海象厳しい尖閣 サンゴ操業 難しい

(3)について見ると、動力船・発動機船であれば、潮の流れを見ながら、船を自在に所定の方向に走行させ、サンゴ網を引いて航行できる。大正12年台湾でサンゴブームが起こるのはこの理由による。サンゴ船が発動機船になり、自在に操船できたからである。

第2の疑問は、古賀のサンゴ船は帆船、手漕ぎであり、(3)ほどの程度可能だったのか。尖閣で操業したサンゴ漁師は、次のようなことを指摘している。

「土佐海域なら、いざ知らず、尖閣海域は、波が高くて荒く、潮の流れも速く危険である。サンゴ網が海底のヤナ(サンゴ礁)に引っ掛かる場合がよくある。運悪いと船が潮に巻き込まれ、網に引っ張られてグルグルと回り、沈没寸前になる。慌てて網のロープを切って命拾い

した。油断すると命取られる危険な海域だ」(西銘成吉談)。

加えて、(4)の大変さを指摘する。「尖閣の海はサンゴ単体が掛からないで、海ユリ、海サボテンなど厄介なものが一緒に掛かってくる。これがものすごい量。この中に混じってサンゴはあるが。もう海藻類がびっしり絡み付いて、ものすごい重量だから、動力の捲揚げ機がないと網は揚げられない。この捲揚げ機でも大変だった」(前同)。この指摘は重要である。サンゴを見つけ、網に引っ掛けたなら、次はこの難問が待ち受けている。あの当時は動力はない、手繰りで揚げるか、手動の機械を使って揚げるしかない。手動の機械なら掘割近くに設けてあった船捲き上げ機(タグラサン、神楽棧)の類が考えられるが、200メートル近くの海底から、石のように重くなったサンゴ網を果たして揚げることができただろうか。

西銘は、尖閣で危険な目に遭っただけに、さらに手厳しい。「装備や漁労技術はともかく。小さな帆船で、尖閣で操業するのは、まず無理だ。嵐や大しけに遭うと1分ももたない。木の葉のように、船はもうこんなこんなだよ。すぐ沈没する、危険だ」(前同)。

賢明なる古賀のことだ。サンゴ漁は、カツオ漁と違い、帆船では危険だと悟り、サンゴ採取事業に早々と見切り付けたかも知れない。

だが、沖縄におけるサンゴ漁第一号の荣誉は古賀に帰することになる。それにしても、明治30年末期に、尖閣諸島にサンゴが産する彼の予言に、慧眼には驚かされる。

しかも明治40年「土佐より珊瑚網を買ひ来り(尖閣海域で)試験的に行ひ」とある。これは沖縄のサンゴ漁の歴史に特筆すべきことである。

古賀の予言 的中 サンゴ船 各地から蝟集

古賀の予言は、ほどなく的中した。帆船が終りを告げ、発動機船時代が到来した彼の死後の大正13年頃である。台湾北部の彭佳嶼で底延縄にサンゴが引っ掛かり、一大サンゴブームが台湾で起こった。

台湾全土の発動機船のみならず、高知、愛媛、宮崎、鹿児島、長崎からも蝟集し、漁場は、サンゴ船140~150隻が操業活況を呈した。当初、基隆~綿花嶼~彭佳沖合が漁場であったが、尖閣諸島百尋線近くまで分布していると考えられた。年により、サンゴ漁は増減豊凶はあったが、昭和6年以降、台湾総督府の方針で、サンゴ許可船50隻に制限された。

昭和10年に入り台北州水産会の試験船によって新漁場が発見され、再びサンゴブームとなった。沖縄近海にも、総督府から許可もらった台湾サンゴ船が連日70隻ほどが押し寄せてきた。



尖閣諸島で採れた巨大な赤サンゴ

本県にも珊瑚の所在について古き以前より謎の如くに謂ひなされて来たが愈々本格的に実現せられ本年の揚り高は二十数万円といふ躍進ぶりである。就中尖閣列

島の周囲は大いに有望視され一般の注目するところであったが尖閣列島と縁故者たる古賀氏に許可された。(先島朝日新聞 昭和 10.7.3)。

だが、息子善次はサンゴ船操業することなく、ほどなく戦争に突入した。

尖閣諸島でサンゴ漁がおこなわれたのは、先に述べた 1960 年のサンゴブームからであるが、まもなくブームも下火になり、沖縄のサンゴ船は 1 隻もいなくなってしまった。

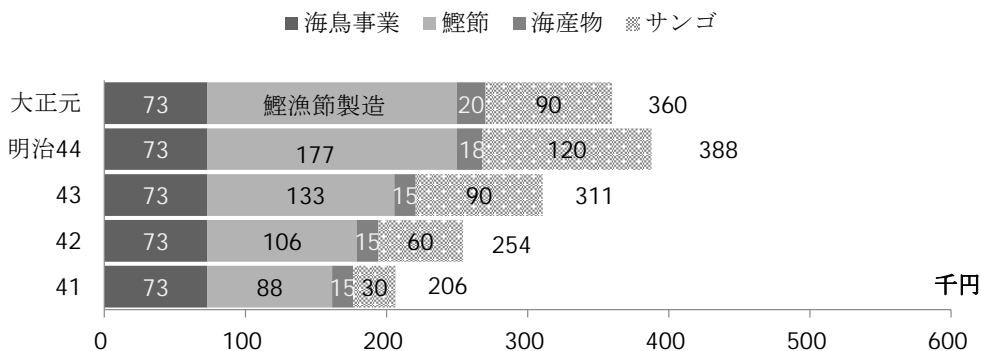
昨今尖閣諸島から宮古の宝山ソネにかけて台湾・中国のサンゴ船が押しかけて不法侵入しサンゴを乱獲している。古賀は、みすみす盗り尽くされている無様な現状に、嘆いているではなかろうか。

3、列島経営の要 節製造 目指すのは カツオ王国

カツオ 枯渇する資源でない 目指すは カツオ王国

最後に、古賀は、③のカツオ漁・節製造事業をどのように位置づけていただろうか。

彼の 5 か年経営予算書の各事業の収入予定金額を下記のグラフにしてみた。



海鳥事業（羽毛・剥製・鳥肉肥料油）は 5 か年間 7.3 万円と一定である。

海鳥事業の占める割合は、水産事業（海産物、カツオ業、サンゴ採取）と比較すると、概ね 20% 台と小さい。古賀は海鳥事業の限界を悟っている。

水産事業はどうだろうか、海産物の収入を 1.5～2.0 万の範囲に留めている。

サンゴ採取は、先に見たように珊瑚船の増加に比例し 3.0～12.0 万を見込み、5 年目に落ち込み 9.0 万となっている。これらの数値から見ると、古賀は海鳥・海産物・サンゴなど根付け資源に限界があると認識していたのかも知れない。これらに比すと、カツオは時季なると海の彼方からと回遊してくるから無限の資源であった言えよう。

加えて、尖閣諸島はカツオの好漁場であり、豊漁し、良質なカツオ節さえ造れば、大きく発展できる事業だった。明治 40 年のカツオ節製造実績は 4.8 万円とある。

古賀は5か年予算書では、初年度41年はその倍の8.8万円に、さらに2年度42年は10.6万円、翌43年13.2万円、44、45両年は17.6万円と、40年実績の4倍を見込んでいる。

カツオ業収入の全体に占める割合が大きい。

このカツオ業 カツオ節製造は全国市場を相手にした仕事である。

品質のいい節造れば、幾らでも売れる。カツオ業の将来性は大きく、発展する可能性を無限に秘めている。自らの力と努力次第で、それを成し遂げることができる。

古賀は、そう思い、列島経営の要に、カツオ業を位置づけ、カツオ王国を目指していたのではなかろうか。尖閣の利点を最大限に活かせば、カツオ王国も夢ではないと。

毎年カツオ帆船 2～5 艘新造 漁師 120～220 人擁し 掘割拡張工事も

ともあれ、古賀のカツオ業に賭ける意気込みは高かった。

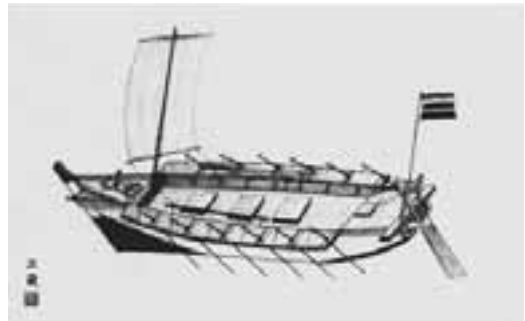
カツオ船を毎年2～5 艘新造し、「監督者3名外漁夫120人～220人」雇入ると意欲満満である。

	明治41年	明治42年	明治43年	明治44年	明治45年
鯉船(漁師)	5 艘 (5 艘)	2 艘 (7 艘)	3 艘 (10 艘)	5 艘 (15 艘)	2 艘 (17 艘)
漁 師	120 人	154 人	220 人	220 人	220 人

予算書からみると、カツオ船1隻の建造費750円になる。ちなみに明治36年座間味の松田らが購入したカツオ帆船金剛丸は770円。明治44年座間味西組が購入した発動機カツオ船和泉丸の代金は2000円からして、古賀のカツオ船は無論帆船だった。

尖閣諸島の漁場は、帆船であっても、他と違い一日に数度の出漁が可能である。この利点を最大限に発揮することだった。

「・・・同列島ニ於ケル鯉漁ノ有望ナルコト
第一ハ食餌ノ潤沢ナルト鯉ノ魚群ガ極メテ
近岸ニマテ来集スルニヨリ必スシモ遠洋ニ
出漁スルノ要ナキ等孰モ天与ノ好適地ナ
ル・・・」 (前出「褒章資料」)



カツオ船帆船 櫓で漕いでカツオを追っていた。
前出 (太田正義画)

また、カツオ節製造人も宮崎、高知から雇入れ、品質に意を注いるため、尖閣列島産カツオ節は形状整い・品質優良で、大阪東京の市場で高い評価を得て高かった。

古賀の5ヶ年予算書(計画書)では、カツオ船17隻新造する。多数の船が行き来するから掘割・港の拡張工事は急がなければならない。

「監督者 3 名外漁夫 120 人～220 人」も雇入れるから、家屋工事も計画した。

	明治 41 年	明治 42 年	明治 43 年	明治 44 年	明治 45 年
掘割・港拡張費	18,000 円	18,000 円	18,000 円	18,000 円	18,000 円
家屋増築費 (500 坪)	15,000 円	15,000 円			

※築港岩石粉碎 1800 坪を 5 か年継続事業として分轄計上

名にし負う尖閣諸島はカツオの好漁場である。一日に数度の出漁が可能という利点を活かせば、カツオ業、カツオ節製造は、大躍進すること間違いなかった。

さらに言えば、他の漁業者にとって、尖閣は垂涎の好漁場だったが、遠隔の地にあり、帆船での出漁は不可能だった。このため古賀の独壇場だった。



前出魚釣島カツオ工場での節製造光景。(明治 41 年)

発動機船時代 目前に迫る 台湾総督府 尖閣まで 漁場拡張

だが、発動機船時代は、目前に迫っていた。各地から発動機船を仕立てて、カツオ船が押し寄せて来ることは予想された。

明治 39 年静岡県水産士試験場船富士丸が初めて石油発動機船による操業試験に成功した。これを契機にカツオ船の動力化が始まった。沖縄では明治 42 年照屋林頭が発動機船照島丸(19ト)を建造した。これを皮切りに、翌 43 年には座間味の安里積勲が第 2 号となる朝日丸を宮崎から購入した。翌 44 年には座間味阿嘉東組が大吉丸、西組が和泉丸を購入、以後、発動機船が次第に普及していった。

発動機船時代の到来ともなれば、台湾は漁場に近く、動向は無視できなかつた。明治 42 年台湾で宮崎の漁師坂本某の試漁で以てカツオ業が始まったという。翌 43 年に八重山から

漁船 2 隻回航し、総督府の補助で発動機船 1 隻を建造し、試験操業で好成績を取めた。

翌 44 年には台湾水産会社が発足し、総督府主導による漁場調査が始まった。

その結果「・・・漁場も北は尖閣列島より南は火焼島、紅頭嶼に及び、東は八重山沖合に至り、将来はバシ、バタン海峡及沖縄県下に拡張されん傾向にあり」(「北台湾の水産 宮上亀七 大正 14 年」)としている。大正 5 年には総督府の「本船ノ試験調査ノ結果尖閣列島及与那国島ニ至ル間ニ漁場ヲ拡張スルニ至レリ」(「大正五年台湾事情」)とある。

古賀が尖閣諸島から撤退した大正 4 年には「台湾からカツオ船が毎年時季には出漁に来ている」(後出「見聞記」)。

ちなみに、古賀は、列島経営から撤退後の大正 3 年には、自らも「尖閣列島ニ使用スル無点火式発動漁船三隻製造ニ着手」(閣褒第四二号稟請ノ・・・古賀辰四郎履歴書送付)している。



発動機カツオ船 前出 (太田正義画)

明治 43 年漁獲高 沖縄県第 3 位 発動機船と 互角に競う

明治 41 年以降の尖閣諸島で操業したカツオ業のまとまった資料がない。

大正元年整理したとされている明治 43 年の漁獲一覧高があり、この中に古賀支店がある。

古賀支店の漁獲高は 0.84 万円であり、これは「褒章資料」に記載した 40 年の節製造実績 4.8 万円の 17%、43 年の見込み額 13.2 万円の僅か 6%である。これが全体を反映した数値か、一部なのかは不明だが、これを上げたのは、「尖閣列島にて漁獲」とあることと、沖縄全体のカツオ業者の漁獲が列記されてい高良である。その中で、下表の 3 者が抜きんでており、他 4 位以下は 60~20~10 台を大きく引き離してダントツだった。古賀支店は帆船なのに 3 位、1 位の玉城五郎、2 位の照屋林頭の発動機船と互角に競い合っている。

明治 43 年	漁獲高	鯉節生産高	概価	備考
1 位:玉城五郎	122,015 斤	24,403 斤	9,273 円	小浜島を根拠地とす補助機関付漁船なり
2 位:照屋林頭	109,027 斤	21,805 斤	8,504 円	石垣島を根拠地とす照島丸
3 位:古賀支店	104,942 斤	20,988 斤	8,395 円	尖閣列島にて漁獲

(「沖縄県水産一般 戸澤逸郎 大正元年」より)

古賀は、カツオ業の将来性に大きな期待を持ち、意欲的に取り組んでいた。

沖縄県は後発にもかかわらず、彼の予想違わず、大きな発展を遂げる。

大正 12 年には、「鯉節の産額二百九十三万七千円余円にして、全国中第三位にあり、品質も亦優良の地位を占め、東京大阪等の市場に於て其の声価を高めつつあり」(「沖縄県水産概況」)とある。

4、多望多繁を極め、前途洋々たる列島経営

恒藤博士 久場島のグアノに太鼓判 愈々採掘の運びに

当時日本は窒素肥料の原料となるリン鉱石の外国からの輸入が年間 500 万円にも達していた。国内に産地を見つければ大きな国益になると確信し、リン鉱石探しに奔走していたのが恒藤規隆博士だった。

リン鉱石は海鳥糞（グアノ）が石灰岩と化合したものである。

恒藤は、農商務省技師、農学博士で、のち同省の肥料鉱物調査所長となるが、明治 36 年同調査所が廃止された時、退官して独力で、リン鉱・グアノの調査に乗り出していた。

恒藤は、鳥糞は金貨であると喝破している。リン鉱もグアノも金貨並みの価値があり需要も大きかった。これが為、この採掘権、利権をめぐる、紛争、訴訟も多く起こっていた。

水谷新六は、南鳥島のグアノ採掘権に加えて、西沢吉治と連名で、台湾総督府に綿花嶼と彭佳嶼に、リン鉱石採掘の鉱区出願をして、綿花嶼は明治 40 年 12 月、彭佳嶼は 41 年 1 月に許可をもらっていた。水谷らは実際採掘に至ったかは分からない。

他方、玉置半衛門は、明治 41 年北大東島で、リン鉱石採掘を出願、許可され、明治 43 年には採掘を開始していた。

古賀は、明治 40 年 3 月、福岡鉱山監督署に、久場島のグアノ採掘出願書を提出し、同年 8 月 19 日付で許可された。翌 41 年 2 月上京して、恒藤に鉱石の検査を依頼した。

恒藤はその年 5 月に来県、尖閣諸島を調査、久場島にグアノ堆積層を発見し、良質だと太鼓判を押している。尖閣諸島調査の体験も含めて、「南日本之富源」を著わしている。

恒藤は、水谷に南方航海の時はぜひ岩石を採集してもらいたいと再三頼んでいた。

明治 39 年玉置がラサ島に調査船を派遣した時、水夫の一人に水谷の甥がいて、ラサから岩石の標本を持ち帰って来たという。（以下は「北大東島村史」を参考にした）

恒藤はこれを分析させたところ間違いなく見事なリン鉱石であることが分かった。

明治 40 年恒藤は松岡操をラサに派遣、調査に当たらせた。調査によってラサはリン鉱石の有望産地と分かった。明治 43 年 10 月恒藤が理事長となり、日本産業商會を設立、ラサ島のリン鉱開採、尖閣諸島の海糞採取、台湾高雄の肥料工場建設などを目的としていた。

古賀が待ち望んでいた久場島のグアノは、いよいよ採掘の運びとなった。

明治 43,44 年 古賀村 百合根、グアノ肥料でも 大忙し

明治 43 年から 44 年の動きを、当時の新聞報道から見てみよう。

古賀村は、百合根、グアノ肥料の件で忙しそうである。



恒藤 規隆

百合の球根は主に欧米の復活祭で飾られる輸出用として人気があった。沖縄県下で、その栽培が盛んで、古賀はまた尖閣諸島で試作中だった。恒藤の斡旋で、グアノもようやく実現の運びとなった。なお、下記の「琉新」：琉球新報、「沖毎」：沖縄毎日新聞の意

明治 43 年 古賀店の肥料 03/17 琉新
 広告 百合根買入並星印肥料 古賀商店 04/06 琉新
 広告 尖閣列島出稼人募集 古賀商店 04/25 琉新
 広告 百合根買入並出稼人募集広告 古賀商店 05/14 琉新
 尖閣列島の宝庫いよいよ開かる 07/23 琉新
 尖閣列島窒素肥料 08/08 琉新
 発着広告 球陽丸 無人島行 4 件 (03/31、05/26、06/23、08/20) 琉新

「**広告 百合根買入並星印肥料 古賀商店**」 肥料販売と百合根買入の広告である。恒藤が配合肥料は「星印完全肥料」と命名した。また県産百合根の海外自家輸出を開始したと記し、那覇西 96 番地電話 19 番古賀商店と連絡先が記されている。

「**広告 百合根買入並出稼人募集並星印肥料**」 出稼人募集の文を記す一出稼人募集広告尖閣列島(無人島)行出稼人募集候に付 応募志望の方は御来談相成度候 古賀商店一。

「**尖閣列島の宝庫いよいよ開かる**」「**尖閣列島窒素肥料**」

恒藤博士斡旋の勞をとりたる結果、この度古賀氏と某肥料会社間に特約販売の契約が成立し、尖閣列島中黄尾島(久場島)の窒素肥料を採掘することになったと報じている。

明治 44 年 古賀辰四郎氏上坂 01/24 琉新
 葬儀広告 古賀辰四郎弟 古賀光臈 02/11 沖毎
 古賀商店の百合根買入 06/05 琉新
 至急広告 百合根買入 古賀辰四郎他二名 06/06 琉新
 急告 百合根耕作者 百合根耕作者組合委員 06/16 琉新
 頭痛鉢巻の百合商 古賀商店他 06/25 沖毎
 発着広告 江陽丸 無人島行 08/25 琉新
 台湾肥料会社支配人を訪ふ 尖閣列島外 09/14 琉新
 大演習陪観者出発 古賀辰四郎他 11/09 琉新

「**発着広告**」 本文を記す一江陽丸 8 月 26 日午後 3 時出港 宮古、八重山、西表、無人島行。江陽丸は台湾肥料株式会社の持船で、広運会社が借受け主として西表台湾航路に用いた。

「**大演習陪観者出発**」 この年福岡県で陸軍大演習が実施されたが、古賀は陪観者として参加することを許可された。11 月 9 日、久留米へと、意気揚々と出発したであろう。

Ⅲ、古賀村に異変？

1、突如、古賀村消息絶える 尖閣諸島に何が？

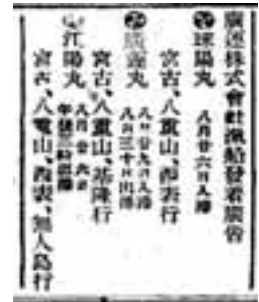
江陽丸・発着広告最後に 尖閣便船絶える 古賀村の消息も

明治44年8月26日江陽丸は午後3時出港、「宮古、八重山、西表、無人島行」である。

これを最後に、尖閣諸島行きの発着広告はプツリと切れている。

また、45年(大正元年)以降、古賀村の消息は新聞紙面から消えている。41年5月には、新聞人、知名士が大挙渡島した。宮田漏溪は、「ああ、これ古賀の王国にあらずや」と感動して現地レポートした。翌年末には藍綬褒章授与である。これを契機に古賀の列島経営は内外から関心と呼ぶところとなった。

古賀もこれから本領発揮だとして、次々と構想を打ち出し、大きな展開を見せていた。渡島者も増加し、尖閣諸島の開拓状況は、頻繁に報じられ、紙面を賑わすはずだった。どこ探しても列島経営の記事は見当たらない。古賀個人の動向は時々報じているが、古賀村となると全く不明である。藍綬褒章を授与されて、僅か2年8か月後である。なぜ、突然、尖閣諸島の情報は途絶えたのか。古賀村の消息は秘密のベールに覆われてしまっていた。



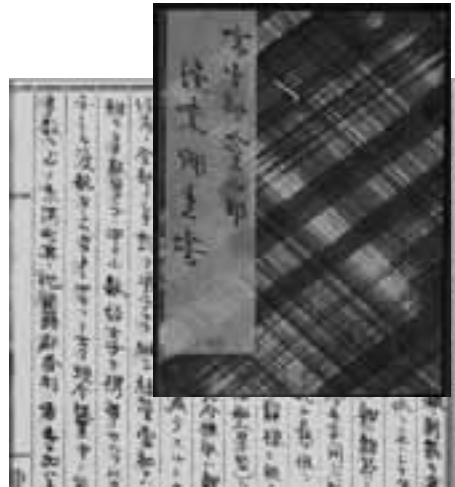
明治44年8月最後の船発着広告(琉新.8.20)

“大正2年漁業報告” 在住者漁夫52名 統て男子なり

ところが、意外の所から情報は得られた。大正2年頃にまとめられた「宮古郡八重山郡漁業調査書」(著者不詳)からである。

予期せぬ内容だった。本文の一部を記すと。

住民ノ職業ハ着手當初ハ主トシテ鳥類ノ剥製ヲ為シタリト雖モ其ノ後漁業ノ有利ナルト鳥類捕獲ノ数減少シタルニ依リ、主トシテ漁業ニ従事セリ。・・・大正二年中該漁業ニ従事スルハ漁船(日本型)二隻漁業者五十二人ナリ。内製造ニ従事スルモノ七人ナリ。鰹釣及夜光介採集ハ鰹釣漁業終了后テ於テ營ムモノニシテ、夜光介ハ年々其産額ヲ減少スルト云フ。前記漁夫ハ本嶋在住者ノ全部ニシテ総テ男子ナリ。但シ経営當初ニハ女子モ渡航セシメタリト雖モ多数男子ノ中ニ少数婦女子ヲ携帯セルヲ以テ弊風ヲ生シ弥后全ク男子ノミヲ渡航セシムルコトナセリト云フ。



宮古郡八重山郡漁業調査書:大正2年頃編纂・著者不詳(「琉球大学図書館サイト」より)

鳥剥製事業は中止されたことには驚いた。漁業が有利であり、鳥の捕獲数が減少したから辞めたというは腑に落ちない。古賀は厳しく捕獲制限措置を講じていたはずなのに、いきなり事業中止は意外だった。カツオ船はたった2隻だけ操業、また婦女子を連れて来たため、弊風を生じ、男だけに渡島を制限している。

古賀は初期の開拓から夫婦同伴を認めていた。それに島には多数の節削り婦もいたのに、いきなり男だけの方針に替えたのか納得いかない。

一番の謎は、この間まで、古賀が言う「永久移住民(者)」が2百人余りいたのに、何ゆえに、52人ほどに激減したのか。それに与那国人が主で、あとは沖縄本島人とのこと。

あの県外から来た熟練動労者らはどうしたのだろうか。「之ハ八重山村字登野城古賀支店ニ付調査シタル概要ナリ」とあり、八重山古賀支店で聞き取った話である。

実際に島を訪れて調査したわけではない。これだけではよく分らない。

大正4年海軍水路部の見聞 永住者なし 1年契約漁師22名のみ

ところが、実際尖閣諸島に上陸し、見聞した記録が出てきた。

大正4年(1915年)3月に、海軍水路部の測量調査班が尖閣4島に上陸、久場島(黄尾嶼)、魚釣島、南北小島を測量調査した。

これが「尖頭諸嶼見聞記」(大正4年6月3日)である。

この見聞記に、「永住者ナク・・・」と驚くべき内容が記されていた。先の漁業調査書に記された「在住者漁夫」は、古賀と1年契約で送られた漁師たちだった。

黄尾嶼・・・島ニハ永住者ナク只沖縄方面ヨリ出漁者来リテ鰹漁ニ従事ス。測量班滞在中、六名ノ琉球人昨年十月ヨリ本年十月迄ノ契約ニテ鰹漁ニ従事シ居レリ彼等ハ帆船ニヨリテ八重山列島ヨリ此ノ島ニ送ラレ只一隻ノ「カヌー」(三人乗)ヲ以テ平穩日島周ニ於テ鰹漁ニ従事シ居レリ。三名ハ鰹節製造ノミニ従事シテ出漁スルコトナシ。以前ニハ此ノ島ニ約二百モ入り込ミテ漁業並ニ百合草栽培ニ従事セシモ思ハシカラスシテ事業ヲ放棄セリト云フ。

魚釣島・・・本島モ黄尾嶼ト全シク永住者ナク只鰹漁ニ従事スル琉球人十六人来リ居レリ。本島ニ於ケル琉球人ト黄尾嶼ニ於ケル者モ共ニ那覇在住ノ古賀辰四郎ノ雇用ニ係ル・・・。(「海軍水路部測量調査班「尖頭諸嶼見聞記」大正4.6.3)



「尖頭諸嶼見聞記」
(大正4年6月3日)

1年契約の漁師たちは、久場島(黄尾嶼)に6名、魚釣島に16名来ていたという。

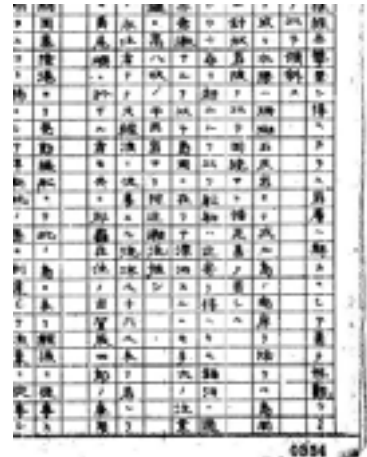
文中の「以前この島(久場島)に約200人も入り込みて」云々は、測量班の人たちが聞き違いをしたか、もしくは漁師たちが言い違い、誤って報告がなされたであろう。

古賀村 廃村同然 破れ朽ちた小舎 数軒佇む 床板なく粗末

見聞記は、古賀村の様子も記している。賑わっていた数年前の面影なく、まるで廃村としか思えない。破れ朽ちた小舎が数軒佇む。粗末な小屋で、床板がないのもあるという。

黄尾嶋・・・島の南西部ニ小舎四、五軒アリ。棕櫚樹ヲ用キテ棟梁トナシ其ノ葉ヲ以テ屋根ヲ葺キ又壁ノ代用トナシアレドモ年月ノ経過ニテ腐朽シ住居スルニ適セズ出漁ノ琉球人ハ此ノ内ニ一屋ニ住居シ居リ。

魚釣島・・・和平山西方ノ浜岸ニ小舎六、七軒・・・一屋平均七、八坪ニシテ繞ラスニ石壁ヲ以テス・・・而シテ居住ニ適スルモノ僅カニ二軒ニ過ギズシテ他ハ床板ナク物品格納庫トシテ使用セラルルノミ・・・島ニハ耕地ナシ只僅カニ丘側ニ一小平地ヲ求メテ少量ノ野菜ヲ植エ喫烟用ノ煙草ヲ植エアルノミ、黄尾嶋ニ於テ見ル甘藷百合等ノ栽培ナシ・・・。(前出「見聞記」)



同見聞記の魚釣島に「永住者ナク只鯉漁ニ従事スル琉球人十六人來リ居レリ」とある。

小屋もクバの木を使った棟で、梁はなく、俄か作りで、壁屋根はクバの葉で覆い葺いた粗末なあばら家である。

いったい、いつ誰が建てたのだろうか、年を経過して腐り朽ちて壊れたまま、契約漁師らはその1軒で寝起きしているという。これいったい、どういうことなのか？

契約漁師、島の様子知らずに来た 早く帰りたい

測量班の人たちは、絶海の孤島に送り込まれた漁師たちに同情している。

定期航海船ハ勿論不定期航海船モナク・・・渺タル海中ノ孤島ニ在リテ変化ナク単調ナル生活ニ厭キツツアル彼等琉球人ノ眼ニ映ジテ何トハナシニ物思ハシムルモノハ天候平穩ナル時沖合ヲ通航スル大型汽船ナリ・・・多キハ一週ニ二、三回ニモ及フコトアリ・・・海荒レテ出漁シ能ハサレハ終日臥床スル彼等ノ状態亦憐レナリ。彼等此ノ島ニ送ラレテヨリ以来家郷ノ通信ヲ得ルコトナク・・・此ノ孤島ニ在リテ日毎夜毎全ジ人ト全ジ顔見合ハセテ暮ラスコトノ趣味ナク早く夜ヲ明カシ早く日ヲ送りテ帰郷シタシ。契約前ニハ斯ノ如キ土地トナラントハ夢ニモ知ラザリキトハ彼等ノ述懐ナリキ。

(前出「見聞記」)

ここに来ている漁師たちは新たに契約した人たちで、数年前に古賀村にいたあの永住者たちではない。いったい彼らは、どこに消え去ったのだろうか。

2、神隠しに遭ったのか 移住民・家屋群 どこに消えた？

200 余名いた永久移住者 どこに消え失せた 神隠しにあった？

明治40年には、永住民総数248名、永住者99戸を数えた。翌41年、11名の児童も東北から移住してきた。43年4月には尖閣諸島に上陸視察した農学博士玉利喜造(鹿児島高農校長)は、「去年十月以来百数十人の歳越しを爲さしめたるか如き實に容易のことにあらず。之を能く維持して行かるゝ点は感服なり。」(琉球新報 明治43.4.19)と述べている。

また、古賀は、明治41年以降5ヶ年予算書(計画書)では、“漁業：鯉船20艘、珊瑚船20艘”、“鯉業監督者3人漁夫220人珊瑚採取者100人”、“海鳥剥製業：監督者3人剥製者150人”を打ち出しているが、これを差っ引いても、優に200名余り永住民がいたであろう。

ここで、改めて「鯉釜納屋前」と「事務所前」の記念写真を見てみよう。前者の右方を拡大したものが下の写真。上半身裸で、ねじり鉢巻き姿をした男たちも写っている。

後方の石積みに束ね立掛けてあるのはカツオ釣りに使う竹竿か？ 前に転がっている丸太は船揚げ用のコロである。ここに立ち並んだ男たちは面構えからして海の男たちに間違いない。この中に、カツオ船の漁師も、カツオ節工場の製造人、サメやべつ甲亀採捕や造船場の船大工も混じっているかも知れない。



ねじり鉢巻き姿で立ち並んでいる面構えからして、荒くれ者の海の男たちか？ 当時カツオ漁は最先端の漁業であり、これに勤んでいる男たちの誇りと気概が感じられる。(明治41年)

古賀村は海の男たちだけでなく、陸(おか)の男も必要である。鳥毛採取の人夫、剥製作りの職人だけでなく一般労働者も大勢いたはずである。山林開発や耕作地開墾に加えて、古賀村の土木や建築工事は、大勢の人間とその技に長けた者たちを擁していたであろう。

そうでなければ、絶海の孤島という厳しい条件の中で、あれだけ見事なものは造れない。

さる建築家に、古賀村の石積み囲い、防波堤、家屋の写真を見てもらった。

石積み1つ見ても大変な作業を要するという。まずは、島中探して石を拾い集め、これを一定の場所に仕分けして置いておく。石積み作業は、この中から、同じは大きさと形の石を選んで、積み上げていく。角とか、楼門とかになると難しい。その箇所に適う形の石を探し出して、割る削るしながら形を整えていくが、これは熟練者でないとできない。

古賀村のあれだけの石積みは、見事に積み上げている。これは専門の石大工を連れて行って積ませたはずだ。家屋の造りも然り。柱や梁のある構造からして、山から伐り出した生木を、木挽きが、大鋸一丁で、柱、板、棟木、化粧材にし、家大工が仕上げていると。こんな感想を頂いた。ならば、この陸（おか）の男たちも、と探してみたのがこの写真である。

息子善次のアルバムにあったもので、撮影時期不明だが、真ん中に猟銃を片手に、腹には弾倉という物々しい姿が古賀辰四郎本人ではないかとも言われているが、よく分らない。

これが陸の男たちだとしたら、やはり海の荒くれ男たちと少し雰囲気が違う。

4,5月のしのぎやすい時季なのか、端正に衣服着て、全員が威儀正して立ち並んでいる。この中に鳥毛採取の人夫、剥製作りの職人、石大工、木挽き、家大工、鍛冶職人たちがおり、古賀と一緒に揃って撮った写真ならば貴重である。



着物姿、洋服姿と様々である。鳥毛採取の人夫、剥製作りの職人、石大工、家大工等々、陸の男たちが揃った写真か。中央の古賀らしき男が鉄砲を持っている。ヤギを山中に放し飼いでいた。これを仕留める鉄砲だったのか。（撮影時不詳 明治41頃か）

かの海の男たち、この陸の男たち、その家族の婦女子、さらに節削り女たちを含めると、古賀村にいた永住者は優に200人は超えたはずである。それが突如として消えてしまった。全員が神隠しに遭ったのか？ 遭ったとしたら、どこに連れ去られたのだろうか。

“古賀村”も 忽然と 消え失せる？

怪力乱神の神隠しに遭ったのは永住者だけでない。

まるごと事業所建物も一緒に連れ去られている。

水路部測量班が魚釣島に上陸して目にしたのは、古賀村の荒れ果てた姿だった。

「小舎六、七軒アリ・・・一屋平均七、八坪ニシテ繞ラスニ石壁ヲ以テス・・・居住ニ適スルモノ僅カニ軒ニ過キスシテ他ハ床板ナク物品倉庫トシテ使用セラルノミ」と見聞している。廃墟には、粗末な小舎が半ば崩れかけたまま佇み、寝起きできるのは僅か2軒だけ。

「ああこれ古賀の王国にあらずや」と讃嘆された古賀村はどこにもなかった。

高々と日の丸が掲げられ、尖閣開拓の本拠地として偉容を誇っていた事業所群、家並みは1つ残らず消え失せていた。

神隠しに遭い、永住者、家屋まるごと、怪異に連れ去られてしまった。

否、さにあらず、茅葺家屋は長くもたない、寿命きて、一斉に朽ち果ててまったのか？。

古賀村の家屋 最低何年もつ？ 茅葺屋根でも 最低 20 年

ならば、あの茅葺家屋は何年位もつかと、専門の建築家に尋ねてみた。

建物の構造によるという。幸い、内部構造が写ったのがある。鯉釜納屋を裏手から撮った古賀辰四郎が脇に立っている写真（前出）である。これ見ると軒、梁や柱は頑丈に造られている。台風で壊れなければ構造的にも優に3,40年はずつと言われた。

こんな壁板構造を持つのは鯉釜納屋や事務所、客室とか特別な家屋だろう。写真見ると壁はクバの葉や茅で作られている家屋もある。だがこれも柱梁と骨組みが頑丈であればさほど問題ないという。壁の茅やクバの葉は朽ちればすぐに取り替えて、丹念に補修すれば、この家屋でも優に20年位はもつという。では、茅葺屋根はどうだろうか。すぐ朽ちてしまうものではないか、何年もつのだろうか。



古賀村の茅葺屋根は押さえ竹、押さえ木や綱など頑丈に固定されている。これら茅葺家屋でも最低20年もつはずだが、石積みだけ残して、突然全部消え失せた。（前出明治41年）

80代の人たちは自らで茅を葺き、この茅葺屋根に詳しかった。

新納会長（92歳）も、若い頃には共同作業で屋根の茅葺作業を何回か体験されていた。

大量のカヤを使うので、材料あるかがポイントで、幸い魚釣島には、材料になるチガヤ、ススキ、それに真竹、ローブ代用のトウツルモドキも豊富にあり、恐らく、あれだけの家屋があるから常時茅を蒔っていた専用の蒔場もあったに違いないと説明された。

そして、茅刈りは誰でもやれるが、屋根の茅葺きになると手慣れた者しかできない。

先尖らした竹の穴に縄通して、屋根の上と下でペアー組んで、声掛け合って、これ上下に交互に貫通させながら内側の垂木な縄で結んで、屋根の茅を次々に固定していった。

イリヤーと呼ばれる屋根の天辺の茅葺き一番難しい作業だったようだ。

古賀村の茅葺屋根は、押さえ竹、押さえ木や網などで、風に飛ばされないよう頑丈にしてある。新納会長は、こんなに上等にやっているのは、村の有力者、金満家の家だけだった。自分たちのは、簡単な茅葺屋根だった。それでも優に14.5年位はもった。

古賀村の上等な茅葺ならば、最低20年はもつのではと話されていた。

だとしたら、古賀村の家並みは、永住諸共、突然、しかも一斉に、消えてしまったのか。骨組みも頑丈に、茅葺屋根も上等にできているというのに、まさか、天狗に連れ去られたのではあるまい。

3、いったい、何が起きた？ 天変地異に見舞われた？

いったい古賀村に何が起きたのだろうか。

この異変の情報を得たのは大正2年の「宮古郡八重山郡漁業調査書」からである。

明治44年12月から45年（大正元年）の間に何が起きたはずである。

新聞記事や他の資料を見る限り分からない。

神隠しでなければ、天変地異に見舞われたとしか考えられない。

①地震、②高波・高潮、③台風などの天変地異でやられた？

ここではこの3つを想定して検討してみよう。

①地震の可能性は？

「石垣島災害資料」（石垣島測候所 1963.212）を見ると、南西諸島における地震の発生は極めて少ない。1903年（明治36年）（鳥島噴火）のあと、明治42年から珍しく3カ年連続起きたが、八重山地方への影響少なしとある。

そのあとは大正12年の鳩間沖海底噴火、昭和22年の地震が続いている。

明治42年	沖縄東方沖地震で那覇首里に多少の被害あり
1909年	石垣島被害記録なし。

明治 43 年 1910 年	7 月石垣島強震、多少の被害あり
明治 44 年 1911 年	6 月震源は奄美大島沖の裂震、那覇、石垣島を襲う。沖縄島に於いても石垣の崩潰おびただしく、家屋の傾斜せるもの 2,3 棟ありて死傷者数名生じた。石垣島被害記録なし。
大正 12 年 1933 年	10 月八重山鳩間島近海海底異常噴出あり、各列島の海岸には無数の軽石漂着し、とくに黒島小浜では船舶の出入り困難極めた。
昭和 22 年 1947 年	9 月石垣島強震、山崩れ、死傷者あり。

〔石垣島気象災害資料〕1963.12 石垣島測候所

明治 44 年 12 月～明治 45 年の間に地震は発生していない。

従って、古賀村の異変は、地震によるものでないことが分る。

ちなみに、昭和 22 年の地震の震源地は尖閣諸島久場島の近くと推測されている。

石垣島では「強震、山崩れ、死傷者あり」と記録されている。

震源地に近い魚釣島の山崩れの一部はこの地震によるものと思われが、古賀村の石垣積みは崩潰していない。地震に耐えうる堅固な構造であったことが分る。

②高潮・津波の可能性は？

これは昭和 20 年 7 月～11 月頃まで魚釣島に取り残された人の話である。

「・・・親父が死んで 2 カ月ほどして、とても海が荒れたことがあったそうです。宮川さんたちは、崖の近くに小屋をつくっていたようですが、夜中、ものすごい音と共に波が打ち寄せてきて、びしょ濡れになった。びっくりして山の奥の方に逃げ込んだ。島中が水びたしになるような状況の中で、やっとの思いで居住地を移したそうです。翌日、もとの小屋に戻ってみると、石が転がっていて大部様子が変わっていた。」（

「与那国沖死の漂流 伊良皆高吉著」

この高潮は昭和 20 年 10 月～11 月前後に発生している。この間に発生した台風を見ると、9 月 30 日のバシー海峡を北西に進んだ台風（石垣島で最大風速 E16.7m/s）と 10 月 9 日の宮古島・沖縄間を通り九州へ上陸した阿久根台風（石垣島で最大風速 NW21.7m/s）の 2 つである。この高潮は、台風と関係ないようだ。

尖閣諸島は、台風と関係なく、天気が悪いと頻繁に起こっているかも知れない。

満潮時に台風が来て、潮位が高くなり、大きな被害をもたらすこともある。

この高潮・高波については後述する。

③台風の可能性は？

「石垣島気象災害資料」は貴重な資料だ。これが大変役だった。
地震の所で引用したが、八重山を襲った明治から昭和までの気象災害が記録されている。
明治44年～明治45年（大正元年）に、八重山襲った台風が下表である。
なお、紙幅の関係で、最大風速は省いた。

明治44年（1911年）に発生した台風 No.77～No.83

月日	最低気圧 mb	最大風速 m/s	降水量 mm	進行経路
6/17	997.3	SW 10.1	2.9	沖縄と宮古の間を通り北東に転向
8/10	994.1	NW 6.3	4.1	沖縄付近を通過 北西に進む
8/14	1001.3	SSE 8.8	70.7	ルソン島東方海上を北西に進む 奄美大島付近で北東に転向
8/26	998.9	E18.3	13.2	ルソン島東方を西北西に進む 台湾南部海上で北北西へ
8/31	956.3	SSW31.0	224.5	沖縄南方海上を経て西進、石垣島付近 を経て大陸に入る
9/16	1008.0	E9.5	13.8	北緯20度線にそって西進
9/20	1007.7	NW 9.5	0.2	グアム島北西方から北西進、沖縄を横断、 名瀬西方海上から北東へ

気圧、風速、降水量：石垣島測候所で観測

大正元年（1912年）に発生した台風 No.85～No.91

月日	最低気圧 mb	最大風速 m/s	降水量 mm	進行経路
6/19	997.3	W 15.7	2.4	台湾坊主か、気象要覧に台風とあり
7/22	999.9	SSE17.4	222.6	
8/1	1002.1	S 18.8	29.1	バシー海峡を北西進
8/28	964.3	WSW 35.6	229.6	ルソン島東方海上から北西に進み石垣島 北東100km以内で西北西に転じ北方西進 被害記録なし 台湾北部風水害甚大
9/16	981.0	ESE34.7	127.8	石垣島南方100km以内を西進、台湾中部 に上陸
9/20	1002.4	NNW 10.4	94.0	バシー海峡東方海上にて北北東に転向、石垣島南東200km海上通過
9/30	982.9	NNE 25.5	354.2	バスコー付近で北東へ転向、宮古島、久米島付近通過
12/28	1009.3	WNW 19.0	34.1	バシー海峡から北東進、石垣、与那国間通過

同 上

上記の表から、明治44年には7個、大正元年には8個の台風が石垣島を襲っている。
だが、どこに、どんな被害を与えたか、この資料だけではよく分らない。

4、大正元年8月28日襲った台風 真犯人か？

石垣島襲った顕著な台風 31個の進路 調べ上げる

台風の進路が分かれば、尖閣諸島に被害を与えた台風なのか、否かが分かる。

だが、明治44年・大正元年の台風だし、石垣島測候所の気象観測では限界があり、台風の進路はとて分るはずないと半ば諦めていた。

ところが、驚くべき資料が見つかった。

石垣島測候所の「気象調査報告(第二号)」(昭和23年3月)である。

何んと、瀬名波長宣は、石垣島を襲った最大風速32m/s以上を顕著台風とし、明治34年8月～昭和8年9月まで発生した31個の台風を取り上げて、これら全部について進路を調べ上げていた。これには驚いた。

いったいどのような方法で進路を調べたのだろうか、

これは、台湾総督府測候所の気象観測資料がないとできない作業である。

台湾総督府測候所は、明治29年には台北、台中、台南、恒春、澎湖島の5か所に置かれ、33年には台東測候所が増設され、東シナ海南部、台湾海峡、南シナ海にかけて気象観測を為していたから、当然その中に件の台風観測資料はあったと考えられる。

終戦後は、蒋介石の国民党がやってきて台湾に居座った。

気象観測資料は軍事機密扱いされ、とても見るできない。

恐らくは、総督府時代に、岩崎所長ら石垣島測候所は、台風観測資料をもらい受けていて、瀬名波は、倉庫に保管されていた膨大な資料の中から、31個の台風の進路を調べ上げたと思われる。大変な作業である。

氏の熱意と努力に脱帽せざるを得ない。



瀬名波 長宣

序でに言うと、「気象調査報告(第二号)」に、昭和22年9月に石垣島を襲い「強震、山崩れ、死傷者あり」と報告された石垣島地震。伊志嶺安進はこの震源地を尖閣諸島久場島近くと推測した。この根拠となった「震源地の決定の一方法」論文も掲載されている。

また、比嘉正雄所長は、「石垣島台風に関する予報資料」で、台風の進路を大別して、細かく論じている。これも大いに参考になるものと思えるが、気象学知識もない筆者らには、残念ながら、よく理解できなかった。

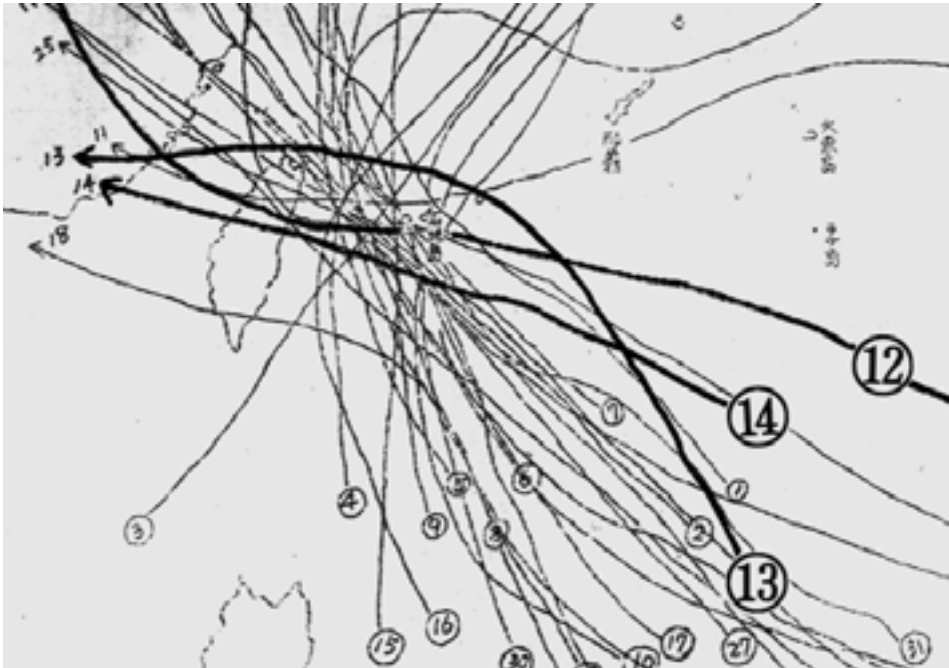
伊志嶺は、昭和38年、43年に2度にわたり尖閣諸島に渡島し、海洋調査を行っている。

また、比嘉は、戦時中の中央気象台藤原咲平台長の意志継いで、戦後初期には尖閣諸島に測候所設置に尽力したが、種々の事情で計画は、惜しくも頓挫した。

2人共、石垣島測候所にあつて、尖閣諸島に深く関わっていった。

話は、瀬名波の石垣島襲った顕著な31個の台風に戻る。

この中から明治 44 年から大正元年間に発生した台風の進路図を見ると、尖閣諸島を襲った台風は、3 個に絞られた。瀬名波が付した番号 12~14 を筆者が太線で示した。



石垣島を襲った顕著な 31 個の台風進路 (明治 34 年 8 月~昭和 8 年 9 月)
 (「石垣島の顕著台風 瀬名波長宣 気象庁調査報告第二号 昭和 23 年 3 月」より)

この 3 個に該当する台風を前表「石垣島気象災害資料」から抜き出してみた。

下表がそれである。

12	明 44 8/31	956.3	SSW31.0	224.5	沖縄南方海上を経て西進、石垣島付近を経て大陸に入る
⑬	明 45 8/28	964.3	WSW 35.6	229.6	ルソン島東方海上から北西に進み石垣島北東 100 ㌫以内で西北西に転じ北方西進被害記録なし 台湾北部風水害甚大
14	明 45 9/16	981.0	ESE34.7	127.8	石垣島南方 100 ㌫以内を西進、台湾中部に上陸

なお、瀬名波の資料と災害資料とでは最低気圧・方位などに若干の違いはある。

この中で、⑬が尖閣諸島に接近した台風であることが分る。

明治 44 年~大正元年間に、尖閣諸島を襲った台風は、これ 1 個だけである

これを尖閣諸島の地図に書き写して見た。

筆者の手書きなので、瀬名波の進路と少しズレはあるかもしれない。

ともかくも、台風の進路を見ると石垣島北東 100 ㌫以内で西北西に転じ、尖閣諸島の遙か南方海上を台湾に向けて西進した。

この時に、尖閣諸島に大きな被害をもたらしたかもしれない。
 なお八重山では「被害記録なし、台湾北部風水害甚大」と記録されている。



大正元年 8 月 28 日の台風⑬進路

瀬名波の進路をもとに手書きしたので、若干のズレはある。

大正元年 8 月 28 日、尖閣諸島を襲った台風が真犯人の公算が大きい。

真犯人であるならば、何ゆえに、大きな被害をもたらしたか。

筆者らには気象学の知識はない。せいぜい、台風の進行方向の右側は強風になる程度の知識しかないので、素人の勝手な推論を進める。

①、特異な進路になり、予期せぬ方向から強風が襲った？

瀬名波が取り上げた、明治 34 年から昭和 8 年までの 33 年間で発生した 31 個の台風で西進したのはこの 1 個だけである。

風向	NNE	NE	E	ESE	SE	SSE	S	SSW	SW	W	WNN	計
個数	1	2	1	3	4	1	6	3	8	1	1	31

台風は、進路図が示すように、尖閣諸島沖合を通り、台湾北部に向けて西進しているが、尖閣諸島にどのように影響を与えたのか？

無防備の方角からも、強風が襲い、古賀村は甚大な被害を受けたのではなかろうか。

魚釣島	西側立地	壊滅的な被害
久場島	南西・北側立地	壊滅的な被害
南小島	東側立地	壊滅的な被害

②、台風による巻き風、山頂から吹き下ろし風も 想定できないか？

漁師たちは興味ある証言している。「尖閣列島という所は風も潮も半端じゃない・・・冬には北風が吹くと、ものすごくシケるから、・・・普通は潮は風上に、南側に流れて行きますが・・・魚釣島の近くだと（逆で）、潮は風の来る北側に、反対に流れていき・・・島に向かって突っ込んで流れていきます・・・尚丸に積んであるアイスボックス・・・風に飛んで、海に落ちたら、ものすごいスピードで島に引き寄せられて流れて行きます。・・・結局、北風が吹くと・・・島の大きさの割には山が高いから・・・巻き風となって回ってきて、北風が強くなればなるほど、風も、潮も、島に向かうわけです」（尖閣研究 2014 志村武尚）。

ならば、風吹くと、魚釣島の形状上、島の大きさの割には山が高いから、山頂からの吹き下ろし風、山裾から巻き風が発生し、古賀村を、背後から、脇腹から襲ったか、あるいは突風、竜巻が巻き起こり、一瞬にして、建物を吹き飛ばしたことも想像されまいか。



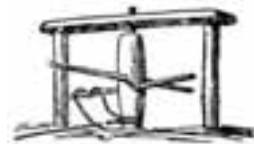
山頂から吹き下ろし風、山裾から巻き風が発生し、古賀村(○印)を、背後から、脇腹から襲ったか、何らかの原因で突風竜巻が巻き起こり、一瞬にして、建物を吹き飛ばしたことも想像されまいか。

③、台風に伴う高波・高潮の影響はあったのか

大正元年 8 月 28 日の潮の満ち干、この当時旧歴表記か、ともかく月齢を計算すれば、大潮・小潮は判断できる。

だが大正 4 年の見聞記には次のような報告がある。

「本島唯一ノ着舟地点ナリ人工ヲノ施シテ浜岸ノ岩陴ヲ穿鑿スルコト約二十間幅約二間半、舟艇引揚用ノ神楽棧ヲ備へ枕木ヲ固定シアリ」（前出「見聞記」）



舟艇引揚用ノ神楽棧。台風被害に遭わず残っていた。
（「ウェブサイト」より）

海岸の掘割近くの船揚げ場には、船捲揚機の神楽棧(タグラサン、轆轤式捲揚げ機)がまだ残っていたことが分る。これは木で造られた装置で、1960 年代まで八重山の離島でも使われていた。これに被害がなかったことから、高波、高潮が襲って来なかったと考えられる。

ともあれ、①～③については、風力、風向、地形等の条件をもとに、島の南西側に位置する古賀村に、台風がどのように影響をもたらしたかはシミレーションは可能と思う。

ぜひ、気象専門家の検証をお願いしたい。

2、台風で 古賀村潰滅 列島経営から 撤退？

堅固な石積みのお陰か 死者皆無？ その時 古賀 どこにいた？

ここからは、筆者の勝手な想像で進める。

大正元年8月28日に襲った台風で、古賀村は、一瞬にして壊滅した。

家屋建物は倒壊したもの、堅固な石積みのお陰で死者は皆無だったと考えられる。

もしも、死者が出たならば、一大事故として大騒ぎとなるが、当時の新聞は報じていない。

石垣島測候所も、「被害記録なし、台湾北部風水害甚大」としている。

古賀は、その時は、どこにいたのだろうか。8月9日付琉球新報には「この年県重要物産品に関する産業調査会が組織され、古賀は調査会委員の1人に選定された」旨とある。

伝令の早船が石垣に到着し、潰滅の知らせに八重山支店は、慌てふためいて、すぐ那覇にいる古賀へ電報を打った。古賀は、急ぎ石垣へ向かい、石垣から、尖閣諸島に着いたのは、天候の事情もあり、台風から2週間余り経った後だろう。

堀割に向かう舳から、惨状を目にして、驚いた。石積みだけを残して建物は吹き飛ばされ、古賀村は廃墟と化していた。永住民たちは、急ぎ引き揚げたため姿はなく、二度と島に戻ることもなかったようだ。大正2年「漁業調査書」と4年の「見聞記」には、古賀の契約漁民は全員が沖縄漁師で、しかも渡島経験ない者であるとしている。

200人余りいた永住者は、島から引き揚げたあと、どうしたのだろうか。

皆散り散りに 伊澤弥喜太の家族のその後

久場島開拓主任の伊澤弥喜太の娘2人は久場島で生まれた。写真で抱かれているのは次女である。長女真伎の話では、明治34年2月に生まれ、その後那覇に行き、小学校3年まで過ごし、9つの時(明治43)父の郷里熊本県益城郡河江村字住吉に帰ったが、久場島の事業が行きずまり、家族と共に台湾に渡った。弥喜太は大正3年61歳で、花蓮で亡くなったとのことである。(「群星1号昭和46.8.29」より)。

これは昭和46年70歳頃の彼女か

ら聞き取ったものである。伊澤弥喜太は尖閣開拓当初から関わっており、興味ある人物である。大正元年8月の台風のあと、久場島から引き揚げ、熊本から長女を連れ戻し、家族で台湾に渡り、再起を図らればならなかった。3年後には妻子を残して花蓮で亡くなった。

波乱の生涯であったが、何が彼の死を早めたのだろうか。



上：久場島の永住者の面々、娘次女抱いているのが伊澤弥喜太。(前出明治40年？ 久場島にて)

東北から連れて来られた子供たちは？

右は明治41年に撮影した掘割の写真
を拡大したもので、大人に混じって11
名の子供たちが写っている。

「福島県安積郡日和田より熊田平次
郎氏が連れ着たり」とある。41年5月
に来て、大正元年8月の台風で島から
去ったとすれば4年間島にいたこと
になる。

あれだけの台風で皆無事だったら
うか。この子供たちの故郷に関係者
を探し訪ねたならば、その後の消息は
分るかも知れない。



子供たちのけなげな姿が痛々しい。(前出明治41年)

3、古賀の壮図 道半ばで 潰える？

台風ならば、いつまた襲ってくるかも 速やかに撤退決意？

「其の財を費やすこと三拾餘万円、年月を積むこと二拾有五年。單身創業的の勇氣を揮つて」作り上げた古賀の王国は壊滅した。哀れなる哉、古賀辰四郎。一人の死者も出さなかったのは幸いだったが、壊れはてた姿を見て呆然自失した。

古賀にとって、藍綬褒章受章は出発でしかなかった。これからが本番、自分の本領を存分に発揮していた所だった。その矢先、襲いかかった台風で、古賀村は木っ端みじんに破壊され、道半ばで潰えた。本来なら、捲土重来を期して、再挑戦に励むはずであるが、ことが台風だけに、いつまた襲いかかってくるか分からない。今度は命まで奪われるかも知れない。

ならばと、速やかに撤退を決意した。意気消沈のまま、島を去るしかなかった。

古賀は、この時の惨状、己の心情を、つぶさに日記に記していたかも知れらん。

・古賀辰四郎君が琉球の海産物に着眼して、那覇に海産物商を始めたのは明治十二年五月で昭和四年迄に五十年になる。先代辰四郎君の嘗めた辛酸と労苦を回想し永久にこの光輝と名誉を記念する為に古賀商店は茲に株式会社に変更することになった。・辰四郎君は実直に五十年間の詳細なる日記が保存されてあるが、それによると当時の沖縄が写真のように写されてあるさうである。(先島朝日新聞 昭和5.1.8)

この日記は、彼の死後、戦災で焼失したのか。あるいは生前に自分で処分したとも考えられる。

朋友・知人 古賀の悲運を嘆き 悲しみすれど 黙して語らず

古賀村が事実、災害で壊滅したのであれば、なぜ、これ伝える資料がないのは不思議だ。岩崎卓爾の「ひるぎの一葉」では、尖閣にちよびりしか触れてない。岩崎は戦後初尖閣調査した高良鉄夫に尖閣の手ほどきをしたほど、興味も持っていたはずなのに、古賀村については、なぜか触れてない。

御木本幸吉は、古くから古賀の知己だった。明治33年宮嶋幹之助の調査に際して、協力者の一人に御木本の名前がある。大正4年には古賀は、御木本と一緒に真珠養殖事業を始めている。また古賀が息子善次を大倉高等商業（東京経済大学の前身）へ進学させたのは、御木本の勧めによる。彼の自伝には明治20年古賀と組んで琉球泡盛を名古屋で物産店を持って販売した位しか記してないという。なぜだろうか？ 思うに、朋友、知人は、古賀の悲運を嘆き、悲しみすれど、他人の不幸を黙して語るまじきとしたためではないか。



岩崎 卓爾



御木本幸吉

明治41年恒藤博士のグアノ調査に同行して、琉球新報主筆宮田漏溪、小嶺幸之、高嶺朝申、渡久地政湖、与儀喜恒、大久保周八、県属玉城五郎、同真境名安興、沖縄新聞記者安元ら当時沖縄の著名人が尖閣諸島を訪れた。

古賀から説明を受けながら、開拓状況を親しく見聞した。

彼ら一人として、古賀と古賀村のその後の消息について語っていない。

恒藤博士も、グアノ調査の際の島の状況を「南日本之富源」の一編に著わし、古賀の久場島のグアノ開発に関わっているが、その後の消息については、同様に語っていない。

宮田漏溪は、「これ古賀の王国にあらずや」と驚嘆し「尖閣列島と古賀辰四郎氏」と題して、列島の開拓、古賀村の状況を紹介した。

彼は、前年44年には琉球新報主筆を辞めて、熊本に帰郷していた。

真境名安興は、沖縄の著名な歴史家であり、「沖縄現代史」の著書がある。この中に「大東島と尖閣列島の開拓」の章を設けているが、玉置や古賀の開拓については僅かな記述である。大半を開拓前史に記している。



真境名安興

古賀の開拓については、「**・** 夙に古賀辰四郎出願して之を開拓し、漁業、鳥毛及び燐鉍の採掘をなししものにて、同人は開拓の偉功を奏せしにより、藍綬章を下賜せられたりき。農学博士恒藤規隆著「南日本の富源」、志賀重昂著「太役小志」に詳記せり。」のみである。真境名は恒藤、漏溪らとともに、古賀から直に列島開拓の話を見聞した一人である。ならば、歴史家として、尖閣諸島の開拓、古賀村についてもっと書くべきはずだが、もしも筆をとるならば、古賀村の顛末、古賀の悲運まで言及せざるを得なくなる。

やはり、明治人にとって、朋友、知人の悲運、不幸は、共に嘆き悲しむものであって、語るべきものではない。これ人間たる規範作法であり、男として美学だったのだろうか。

4、撤退後の古賀村 どうなった？ （大正期）

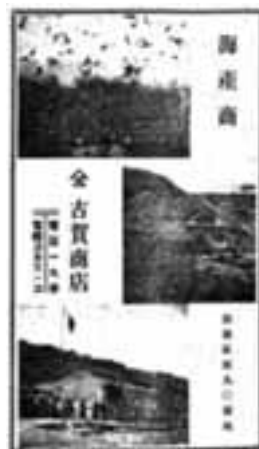


水路誌の記述 昭和初期まで 大正4年見聞記 踏襲、古賀村はどうなっていたのだろうか。関係の資料を探してみた。古賀辰四郎の動向を報じた新聞資料はあるが、古賀村の消息はない。もしや水路誌にあるかもと考え、水路誌を揃えて調べてみた。

- 1、日本水路誌第二巻下（明治41年10月刊）
- 2、日本水路誌第六巻（大正5年刊）。
- 3、日本水路誌第六巻改版（大正8年7月刊）
- 4、臺灣南西諸島沿岸水路誌（昭和5年12月刊）
- 5、臺灣南西諸島沿岸水路誌改版（昭和7年7月刊）
- 6、臺灣南西諸島沿岸水路（昭和16年3月刊）

1には、古賀村の記述ない。2は大正4年の見聞記をもとには古賀村のようすを記述してある。2から7まで、ほぼ同じ内容である。

例えば6に「此处（掘割の意）ニ舟捲揚機ヲ備フ」とあり、昭和16年まで見聞記をそのまま踏襲している。



古賀村の様子を紹介した最後の古賀商店広告。
〈「沖縄県案内 大正3年 親泊朝権著より」〉

大正7,8年頃 70人ほど住む？ 中国難破船 救助

先に述べた岩崎卓爾の「ひるぎの一葉」には、「嶼附近鯉魚群集スル事多ク現時六十九人住ミ漁勞セリ」とある。この本が大正8年刊行であるからして、大正7,8年には、漁期には70名ほど住んでいたことが分かる。

大正7年8月には古賀辰四郎は亡くなった。そのあと息子善次が相続している。

翌8年8月、難破した中国漁船が魚釣島に漂着、島にいた漁師たちが発見し救助した。遭難者には病人もいたので彼らを石垣島に送り届けた。石垣島では町長登川善佐らが遭難者に食事を与えるなど手厚く世話し、病人も救護して、遭難者31名全員を無事中国に送り届けた。

翌大正9年5月20日中華民国長崎領事から、魚釣島主古賀善次、石垣町長登川善佐ら4名に感謝状が贈られた。

周知のように、この感謝状には「日本帝国沖縄県八重山郡尖閣列島内和洋島」と明記して、中国は尖閣諸島をれっきとした日本領土として認めている。この件については、多くの解説書があるので、これだけに止めたい。

筆者が言及したいのは、アホウドリについてである。古賀はアホウドリを絶滅させた張本人だと誤解されている。古賀が絶滅させたのではない、アホウドリの保護者だったのである。



古賀 善次

5、尖閣諸島のアホウドリ 乱獲と野生ネコで 絶滅する

恒藤博士 鳥糞は金貨 これ産み出す海鳥の乱獲に 怒る

古賀は、労働者たちに、宮嶋のアホウドリ捕獲制限策を、厳しく守らせた。それが効を奏し、アホウドリは徐々に回復に向かっていた。その半ばに、島から撤退を余儀なくした。

大正5年に「鳥糞は金貨 恒藤農学博談」の記事が出た。明治41年古賀の招きで、尖閣諸島の海鳥とグアノ(鳥糞)を調査した恒藤博士の談話である。

彼は、沖縄のある島では金貨に等しい鳥糞を産み出すアホウドリ(信天翁)を、布団の中に入れる為に猟師が次々と殺していると怒っている。さらに飼猫が野生化し、毎夜鳥を襲い、島から鳥を駆逐してしまったと嘆いている。本文を続けると、

「漁師の鰹漁を奨励する爲め?の信天翁の居る島へ▲小屋掛けを許した處、鼠が船から上陸して非常の勢ひを以て繁殖し、とても耐らぬので猫の番を一疋島へ連れて來た。或日一漁師が悪戯に猫の尾を鉈で打ち斬つたので猫は驚いて其儘森林に隠れ、茲で盛に繁殖し、終に毎夜信天翁の巢を襲ふやうになり、爲めに鳥はとうとう何れかへ逃て仕舞つた」。(琉球新報 大正5年5月4日)

これは魚釣島を指している。山に逃げていった猫の番(つがい)は殖えていき、夜な夜なアホウドリの巢を襲い、魚釣島から駆逐してしまったというわけである。

せつかく古賀の努力で殖えつつあったのに、古賀が去った後から、大将が居ぬまにと、漁師たちが猫を勝手に島に持ち込んで、鳥たちを全部追い払ってしまった。

かくして、古賀が撤退後の魚釣島には、アホウドリはいなくなった。

久場島はどうだったであろうか。

宮嶋の懸念 警告的中 労働者禁破る 山猫 最期のとどめ刺す

宮嶋は、捕獲制限策を守れるかと懸念していた。

「もし従来の如く労働者のなすまゝになし置かば、数年を経ぬ中に、信天翁は全く此島に其跡を絶つに至る可し、予の去りし後、該島の労働者果たして此禁を守り居る、懸念の至りなり」（「沖縄県下無人嶋島探検談」前掲）。

だが、古賀が去った後、宮嶋の懸念は的中した。もう口うるさい大将もいない。俺たちの天下だとばかりに、片っ端からアホウドリを撲殺乱獲し、羽毛採取を恣にしたであろう。

とはいえ、大正4年の「見聞記」には、「久場島：信天翁属、目白、山猫多シ・海鳥類ニアリテハ信天翁属最モ多シ」とあり、その頃まで、山猫も、アホウドリも見聞している。文中の山猫だが、宮嶋も、明治33年久場島でアホウドリ調査の際、野生化した猫、山猫を見て警告している。

家猫の野生の状に変せしも者多きを見る。去明治28年頃漁船この島に来たりしことあり、船中に雄雌の猫を飼い置けるが、船の着島するや猫は直ちに島上に逃れ去りて帰り来たらず止むなくこのまま放置せりと云ふ、雌雄二頭の猫今や繁殖し・猛悪となり、昼は岩窟樹林の中にかくれ、夜間出て島に宿れる禽類を襲ふ。予は島上各處に鳥の屍体の、頭部のみ傷きて横はるを多く目撃セリ、蓋し之れ猫の所業にして、猫は鳥の体中尤緊要なる脳を好む者と見ゆ・此の如き大害ある猫の夥多生存し、暴爪兇牙を擅にする。豈寒心せざるを得んや、已に前車の覆るあり、后車たる者最此猫撲滅の策を計る可きなり。



西表で撮影された山猫、イリオモテヤマネコではない、家猫が野生化したもの。(高良鉄夫撮影)

（「黄尾島 宮嶋幹之助 地学雑誌第145巻」）

このアホウドリに最期のとどめを刺したのは、魚釣島同様、やはり山猫であろう。

昭和14年5月、農林省南西諸島資源調査団の一行は島に上陸して見聞している。

石垣島測候所正木任の「尖閣群島を探る」には、魚釣島、久場島にはアホウドリの報告はない。調査団が上陸したのは5月で、親鳥たちは島を渡りで飛び立った後だが、もしも生息しているなら、飛べないアホウドリの若鳥やヒナたちは残っているはずだが、一羽も見当たらなかった。久場島のアホウドリは、山猫に襲われて絶滅に追い込まれた。

古賀が島を去ったあと、宮嶋の懸念と警告は的中し、魚釣島、久場島からアホウドリは絶滅してしまった。

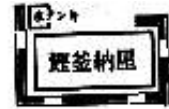
V、魚釣島古賀村(跡) その後の歩み (昭和期)

1、戦時中 昭和14年南西諸島資源調査団、魚釣島に上陸

カツオ工場跡 漁師が建てた納屋あり、ここに宿泊・調査する。

昭和期に入り、尖閣諸島の学術調査が行われるようになった。魚釣島・古賀村のその後の歩みについては、これら調査団関係者が撮った写真で見ていこう。

昭和14年、農林省南西諸島資源調査団が尖閣5島に上陸した。古賀村跡を本拠地にして魚釣島を調査した。下の写真はその時に宿营地となった納屋である。堅牢な石垣に囲まれていることから、漁師たちが鰹窯納屋(カツオ工場)跡に建てたことが分かる。



「見聞記」にある小舎はこのような納屋だったろう。俄か作りの粗末な納屋が5つほどある。配置図に記された水タンクも見える。
(正木譲提供)

殆ど壊れかけていたが、寝起きはできる納屋もあったようだ。

納屋の中で、食事を摂る調査団一行。
(同上)



与那国から定期的に、魚釣島に、クバの葉採取に来る

与那国から定期的に、魚釣島に、クバの葉脈を採取に来ていた。この時、調査団と鉢合わせになった。古賀村跡の石積み前でも撮った写真を見ると、全員の顔ぶれと表情が面白い。婦女子から男の子、学生、それに海軍姿は船の船長か、貴婦人らしきも写っている。

与那国島から、まるでピクニック気分で、物見遊山で、魚釣島には、クバの葉脈を採取に来たようだ。正木任は、古賀村跡の石積みについて、「古賀氏は高さ3米余、幅2米、現在残っているものだけでも長さ120余米もある・・・西側から見ると古城の跡のように見える」(「尖閣群島を探る」昭和16年)と報告している。



船長姿と貴婦人除いて全員が与那国からクバ採取きた人たちか。中列真ん中の女の人は乳児を抱いているように見える。魚釣島は隣村に行くように気軽に来ていたのか。
(「よみがえるドゥナン」より)

山中で撮影
前列はクバ葉脈
で与那国から渡
ってきた人。
後列向かって左
古賀商店多田武
一支配人。

右は正木任
(正木譲提供)



2、戦時中：米軍、上空から撮影 石積みがくっきり

古賀村跡の石積み遺構、生い茂る草木の中に ひっそりと眠る

昭和45年3月、米軍は沖縄に総攻撃作戦で上陸1月前に、尖閣諸島の島々も航空撮影していた。魚釣島西側部分を見ると、古賀村跡の石積みがかっきりと写っている。

地上から観察すれば、草木に覆われているが、見えないところもあるが、上空から俯瞰すれば、隠れた部分は薄く筋が浮かび上がり、石積み全体が残っているのではと思われる。



下の配置図と比較しながら、両者を見比べると、見取り図に黒線で示したのは写真から石積みが仄かに確認できる。右端の保存倉庫跡の石積みも残っている。(米軍航空写真：沖縄県公文書館蔵)



防波堤の石垣積み跡、1980年代まで残っていた

下の写真は、鯉窯納屋(カツオ工場)跡の石積み前庭である。盛土され草木が生い茂っており、建物配置図の A 地区である。海側方向の低い勾配にあったため、BC 地区に高さ合わせて盛土し、海岸線手前まで、防波堤を築き、高波高潮を防いでいた。

1979年に撮った写真では、防波堤の石積み跡もはっきりと確認できる。



海岸手前まで盛土され、防波堤が築かれていた。石積み跡がよく分かる。(荒井秋晴 1979)

また A 地区には、掘割からの船揚場もあり、船捲揚げ機の神楽棧も設置してあった。大正4年の「見聞記」に、台風被害を免れて残っていたことが報告されている。



海岸に陸揚げされた船1艘見える。
左図は当時使われていた捲揚機（神楽棧・タグラサン）。台風被害免れて、大正時代まで残っていたようだ。
(「ウェブサイト」より)



耕作地 打ち捨てられ、無毛の荒地・禿山に

尖閣諸島には最盛期には 250 名近くの永住者が居住し、一日たりとも食糧供給は止むことなかった。彼らに食料を供給していたのは、面積 60 町歩に及ぶ耕作地からだった。

そこには蔬菜、穀物、芋などが植えられ、豊かな恵みをもたらしていた。

大正元年の撤退で、この耕作地は打ち棄てられ、豊かな沃土は、無毛の荒地、禿山と化していった。

大正 4 年の「見聞記」には、1 年契約で渡ってきた漁民たちは「耕作地もなく、僅か丘側の平地を求め、そこに野菜と煙草を植えているだけ」と記している。

尖閣諸島魚釣島は、豊かな島から、飢餓の島になり変わっていたのである。



古賀村跡の後背にある耕作跡。豊かな実りをもたらした面影はどこにもない。荒地禿山と化している。
(新納義馬 1979)

かつての沃土は雑草の生い茂る不毛の荒地となり、魚釣島は飢餓の島に舞い戻ってしまった
(同上)



2、昭和 20 年、台湾疎開者 命からがら、魚釣島に漂着

魚釣島 飢餓の島 食べるものなし 次々と栄養失調で 餓死

昭和 20 年 6 月、石垣町民 200 名が台湾への疎開途中、東シナ海で米軍機の爆撃を受けて遭難した。沈没を免れた船 1 隻に 150 名が乗って、魚釣島に漂着した。

魚釣島は飢餓の島だった。「山にはクバもあった。アダンもあった。・・百合が少々あった。長命草（ポタンボウフウ）も少々あった。・・一番の御馳走はクバの若葉であった。断崖絶壁で素人には漁りできない。・・ヤドカリ蟹は白浜で三、四個拾っただけである。・・海辺の岩に船虫がいたが、この小さな動物は動きが敏捷で、衰弱して行動の鈍くなったわれらには捕まらない。食物は草の葉だけなるも、その草もあまりない。・・段々、栄養不良のため力は脱け、体力は減じ、高きクバも切れなくなり草のみを食べるため段々と衰弱を来せたり、三十日目より体力の弱き者より死亡しはじめた。昨日は甲が死んだ。今日は乙が死んだ。」（「宮良当智 60 才 p75」）。悲劇は次々に起こった。身体弱い老人婦女子が次々と、栄養失調や病気で亡くなっていった。50 名余が島で死んだ。



岩場に自生している長命草（ポタンボウフウ）
食べられる野草は種類も数も少なかった。長命草、ニガナ（ホソバワダン）など食べたが、すぐに食べ尽くしてしまった。
(新垣秀雄 1952)

魚釣島に群生するクバ
山に入り、クバの木を倒し、芯の部分を食べた。
それとて、体力と鉋や鋸等の道具がないとできなかった。（多和田真淳 1952）



このままでは座して死を待つしかなかった。が、疎開者に船大工が一人いた。難破船から板切れを皆で拾い集めて、船大工が救助連絡用サバニを造った。これに決死隊が乗り込んで、石垣島に向けて漕ぎ出した。不眠不休で漕ぎ続け、丸 2 間日かけて、石垣島に到着し、救助を求めることができた。漂着から 50 日後に、救助船がやってきて、無事救出された。

後日譚：昭和44年、石垣市と遺族 慰霊碑建て、慰霊祭行う

昭和44年、無念の思いで亡くなった人たちを魚釣島で弔うため、石垣市と遺族が渡島し、慰霊碑を立て、慰霊祭を行った。



魚釣島で亡くなった御霊を祀る慰霊式典が石垣市長(後姿)と遺族関係者によって営まれた。
(「八重山写真帖」より)



左：古賀村跡の石積みと耕作地跡、その間の高台に慰霊碑（○印）建っている。(野原朝秀 1971)
右：昭和44年5月に石垣市と遺族が建立した台湾疎開石垣町民遭難慰霊碑。(下謝名松栄 1971)

万一遭難者が出た場合と 長命草 植え付ける

慰霊祭に同行の記者は、「・・・黒島信治（六三）は、当時家族六人が疎開船に乗りこんだが魚釣島で妻初さん（当時三歳）と息子二人を亡くし、二十四年ぶりにたざずんだ魚釣島で当時の状況を思いおこし涙ぐんだ。また、老父母をこの地で失ったという宮良当智さん（八四）は、食べ物を求めてさ迷った人たちの霊よ安らかに、と約十株の長命草を慰霊碑に植え付けている姿が痛々しかった。宮良さんは『万一、遭難者が出た場合に役立てば・・・』と話していた。」(沖縄タイムス 1969.5.13「魚釣島に慰霊塔 遺族の念願叶い」と報じている。

3、終戦直後 宮古・八重山漁師、カツオ節を製造

魚釣島、古賀村跡で、カツオ節製造を営む

尖閣諸島は島の周りでカツオが釣れる。1949,50年には、宮古・八重山のカツオ船がやってきて、島の周りでカツオ釣り上げ、当時は氷ない時代だから、魚釣島、南小島に仮工場を設け、カツオ節製造を営んでいた。

八重山石垣の発田重春も、魚釣島古賀村の鰹鯨納屋(カツオ工場)跡に仮工場を建て、カツオ節づくりを行っていた。操業間もない1950年3月、発田の船に便乗して、一人の男が島を訪れた。足にゲートルを巻き、大きな背のうを背負い、肩には胴らんと水筒、手には捕虫網を持っていた。この男こそ、戦後初の尖閣諸島調査を行った高良鉄夫である。高良はイリオモテヤマネコの発見者であり、ハブ博士として著名である。

戦後初の高良による尖閣調査は、この時に第一歩を踏み出した。以後68年まで5次に亘る調査を成し遂げて、今日の尖閣諸島の自然の学術的解明に大きく貢献した。



上：発田重春 下：古賀村鰹鯨納屋跡に建てられた仮工場納屋。(多和田真淳 1952)

発田と高良の出会いなければ 戦後初の調査 誕生せず？

他方、発田重春は、兄喜平と共に、戦前与那国で、発田カツオ工場を経営していた。

発田カツオ工場は、戦前東洋一といわれるほどの規模で、工場は夜間は煌々と電気が灯り不夜城の感あった。天を衝く高い煙突が軍需工場と間違われ、米機の空襲に遭い、壊滅した。戦後石垣の大川に移転、ここでもカツオ工場を営み、魚釣島でも節製造を行っていた。

発田の話聞きつけて、高良は、尖閣諸島調査を決意した。尖閣は当時は古賀の無人島と呼ばれ、少年の頃から古賀の無人島探検は夢だった。

高良は、尖閣諸島調査を為しえたことに、終生発田に感謝していた。



高良 鉄夫

愛蔵していた将校用双眼鏡(高良は小隊長大尉だった)を、発田にプレゼントしたのも感謝の表れである。高良は、発田の協力による戦後初の調査を敢行し、これに続き5次調査まで主導し、戦後の尖閣調査に大きく貢献している。高良は発田との出会いがなければ尖閣調査の第一歩は踏み出せなかったであろう。八重山農林高校長から琉球民政府農改局へ4月転勤の最中になされている。沖縄本島赴任直前の調査であり、本島赴任後は石垣に暫くは戻れない。4月1日には初出勤だが、八重山に留まったまま3月27日に、魚釣島に駆け込み上陸し、石垣に帰島したのは4月10日で、滑り込みセーフで調査を為し遂げた。

高良、岩崎の教え、黒岩の衣鉢、恒藤・正木の調査に刺激される

高良の話 少し続けよう。高良鉄夫は小2の頃、石垣島に移住、天空がかき曇るほどの乱舞する海鳥の島があるとの話しを聞き、古賀の無人島に魅了された。

その尖閣諸島のことをいろいろと教えてくれたのは石垣島測候所長岩崎卓爾だった。

ヤギの草苅りや薪取りが日課だった少年の頃、山野へでかけテンモンヤヌシューメー（天文屋の御主前）に出会うと、いろいろと教えを乞うた。岩崎は高良少年に、尖閣の海鳥や八重山の自然のすばらしさを手ほどきしてくれたという。

長じて沖縄県立農林学校に進学した。学校の初代校長は、“尖閣列島”と命名した黒岩恒だった。高良が入学した頃には、黒岩は世になく直接の教えを受けることはできなかったが、黒岩が育て上げた農林学校の実学重視の校風に薫育された。

奇しくも、黒岩校長の衣鉢を継いで戦後初の尖閣諸島調査を敢行することになる。

高良は、調査の動機の一つに海鳥の雛の訓練が見たかったことを上げている。

窒素肥料研究の泰斗恒藤規隆博士は、古賀辰四郎に乞われて、尖閣でグアノ調査を行った。その際に親鳥がヒナたちを訓練するのを見て感嘆し、この様子を「南日本之富源」に記した。

高良はこれを読んで強い衝撃を受けたという。高良は、少年時代と農林学校時代は、岩崎の教えと黒岩校長の遺風を受け、青年時代には、恒藤と岩崎の門弟正木任の尖閣調査に刺激されて、戦後初の尖閣諸島調査を成し遂げたわけである。

1950年の報告で、“海鳥の楽園、漁業資源の宝庫”として認識高まる

高良は、憧れの海鳥の島には渡島できず、魚釣島に約2週間滞在し、生物相の調査に専念した。周辺海域は多数の漁船が入り乱れて操業、沖縄はもとより二本マストの大型船は四国からのカツオ漁船、九州のサバ漁船やカジキ突ん棒、台湾からの漁船で賑わっていた。調査成果は、地元八重山紙「南琉タイムズ」に「無人島探訪記 1～10」（1950.4.25～5.22）。全県紙「うるま新報」、「尖角列島訪問記上下」（9.15～16）に寄稿した。

古賀の無人島「尖閣列島」の情報は、戦中・戦後久しく途絶えていたので、大きな反響を呼んだ

尖閣列島といえば「漁業資源の宝庫」と「海鳥の楽園（又は王国）」がすぐに連想される。戦後一時期は、この2つが尖閣を象徴し、イメージさせた。このキーワードを作り、島のイメージを定着させたのは高良の功績である。

「海岸で鯉の釣れる島」「卵と鳥で島は一ぱい」の記事はそれを如実に示している。また「…冬の漁場としてのねうちが高いように思われた…鳥のくそを利用することを考えなければならぬ」として、次の調査を目論んでいる。高良の報告が契機となり、戦後の尖閣諸島は、“海鳥の楽園” “漁業資源の宝庫”として認識が高まり、再び脚光を浴びることになる。



(うるま新報 1950.9.16)

4、戦後 魚釣島・古賀村跡 宿営地に 連綿と調査

1952年富源を求めて、琉球大学・琉球政府資源局の合同調査団

戦後の尖閣調査は、高良の1次から5次に亘る調査に続き、多くの調査がなされた。

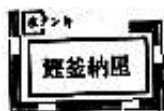
その際魚釣島古賀村跡は、調査団の宿営地として利用されている。

調査団が撮影した写真をもとに、古賀村跡の様子を見ていくことにする。

鯉釜納屋の石積み “古賀村跡”のシンボルとなる



1952年戦後初の鯉釜納屋石積み写真。絶海の孤島に城砦の如く屹立した姿は感銘を与えた。“列島開拓・古賀村跡”のシンボルとして親しまれる存在となる。(新垣秀雄 1952)



正面楼門前でテッポウユリを手にしているのは高良鉄夫団長。

石積み天辺部分が崩落していることが分かる。

(多和田真淳 1952)



1952年写真で、石積み、大凡の高さ・幅分かる。

石積みの規模、寸法を測定した報告はない。戦後古賀村跡のシンボルとなった鯉釜納屋の石積みの高さは、明治期の写真から大凡の推測はできる。だが、他の石積みについては写真がなく不明であるが、戦後の写真と調査団の証言から大凡の高さと幅が推測できる。

下の写真から、事務所～倉庫の石積みは、目測で大凡高さ 2.2、幅 1.5メートルほどか。



前列向って右より 多和田真淳(林業試験場)
棚原清一(資源局)、上運天賢盛(琉大2年)、
後列 松元正男(同4年) 高良鉄夫団長
(新垣秀雄 1952)

1953年高良ら、琉大学生11名引き連れ、野外実習調査

古賀村跡は、水も豊かにあり、以後調査団の宿营地として利用される

鯉釜納屋の
正面石積み写真
石積み前庭は
草木が
生い茂っている
後方平坦地は
耕作地跡
(泉川寛 1953)





鯉釜納屋跡
石積み内側の
宿営地の様子。
採取したイリオモテランを
手にしているのは
宮城元助教授。
(田中一郎 1953)

漁師が建てた納屋
朽ちてしまったのか
前年の5棟が1棟に
調査団、仕事終え
採集した品整理中か？
右下に水タンクが
見える
(同上)



魚釣島は水が豊富。
ドラム缶風呂だ
何日ぶりの入浴か
身も心もすつきり。
(泉川寛 1953)

1970年九州大・長崎大学、合同調査隊を組織 尖閣調査



合同調査隊も
古賀村跡に
テント張った。
7年前の写真に
比べると
草が生い茂っている。
(「東シナ海の谷間—
尖閣列島」より)

右上に石積みの楼門
2つ写っている
右端は正面楼門、
その隣は
袖垣脇門であろう
(同上)



左は石積み正面楼門
右は袖垣の端
建物配置図見ると
この袖垣の傍らに
水タンクがある
(同上)

1971年琉球大学総合学術調査団も 古賀村跡 宿営地に



古賀村跡は
三千坪の広大な敷地に
工場、事務所、住屋等
が建てられていた。
往昔を偲ぶのは
崩れかけた石積みと
夏草生い茂る広場
だけである。
(野原朝秀 1971)

古賀村跡に
思い思いにテント張る
唯一水が得られる場所
水飲み場を往復
夕食の準備に
取り掛かる。
(新納義馬 1971)



楽しい夕餉のひと時。
三味線を手に
島唄を唄う。
開拓時代も
故郷に想いを馳せ、
同様な光景が
(新納義馬 1971)

1978年日本青年社 日本青年社 魚釣島灯台建設で 上陸滞在

尖閣諸島海域は、国内有数の好漁場として、各地から漁船が参集していた。

1978年、日本青年社は、船舶の航海安全を期するため、魚釣島に上陸、古賀村の鯉釜納屋跡を宿営地にして、灯台建設に従事した。



宿営地にはテントの他、プレハブ小屋（右上）を設置している。ベース基地には古賀開拓時代の礎に倣い、国旗日の丸を高々と掲げた。（「日本青年社」提供）



1978年に設置された魚釣島灯台第一号古賀村跡付近の高台に建てられている。（新納義馬 1979）



日本青年社隊員による魚釣島漁場灯台の補修作業光景のち灯台は国に移管された正式な灯台として海図に記載され国で管理されている（「日本青年社」提供）

ヤギ番（つがい） 非常食用にと 山中に放つ

灯台建設は、島に長期滞在して作業を行うので、自前で食料を確保せねばならなかった。

古賀時代の耕作地は荒れ果てて、飢餓の島と化していた。そのため、非常食用にと、ヤギを放し飼いにし山中に放った。これが思わぬ結果を招くことになる。



古賀村跡の平坦地を利用して蔬菜造りに励む隊員たち。潮風が吹きさらす荒地だけに並大抵でない。古賀開拓民の苦勞が偲ばれる。
〔「日本青年社」提供〕

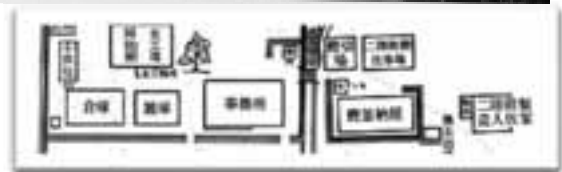
1979年沖縄開発庁による学術調査・利用開発可能性調査

沖縄開発庁調査団も、古賀村跡に調査本部を設置した。これが下の写真である。



海岸側からは鰹釜納屋の石積みしか見えない。配置図の倉庫～事務所は草木に覆われている。内側から石積み脚部は確認できる。

(新納義馬 1979)





学術調査班の面々。上空や海上からも団員が確認できるように各人ナンバーつけての行動。地質班⑧・⑨、陸上動物(2)班⑩・⑪、陸上動物(1)班⑫・⑬、植物班⑭・⑮、水中動物班⑯・⑰。(新納義馬 1979)



内側から見た倉庫～事務所の石積み
小ぶりの石が積まれている。(同上)

学術調査と利用開発可能性調査の様子



尖閣諸島には臭い無毒のヘビが生息する。捕獲したシュウダを計測中か。調査員は安部琢哉琉大助教授。(新納義馬 1979)

古賀村前掘割で海中生物を潜水調査中
水中生物班
(同上)



利用開発可能性調査で土質調査ボーリング(予定深度 20m)実施
魚釣島西岸でのボーリング掘削光景。
(尖閣諸島文献資料編纂会所有)

開発利用可能性の検討



魚釣島西区(旧古賀村付近)の利用開発計画平面図。魚釣島西避難港、魚釣島西無人気象観測施設、魚釣島西灯台、魚釣島西ヘリポート等の設置可能性を検討した。



魚釣島西灯台設置候補地遠景
(尖閣諸島文献資料編纂会所有)

古賀村跡掘割を中心とした魚釣島西避難港(漁港)候補地。今だに実現していない。
(同上)



1981年沖縄県による尖閣諸島漁場調査

沖縄県は、尖閣諸島周辺漁場の利用開発を促進するため、沖合漁業資源調査と沿岸の磯根資源（サンゴ、海藻類、エビ、貝など）調査を実施した。



沖合漁業資源調査で
ダツの蛸集状況も
調査した。
「尖閣諸島周辺漁場
調査報告書」より）

調査団は古賀村跡
に本部を設営した。
（沖縄タイムス
1981.7.25）



魚釣島海岸の甌穴で
海藻、貝類など
磯根資源を調査。
（「同上報告書」より）

VI、ヤギ食害で 崩壊する魚釣島

1、1978年 食料用に持ち込んだヤギ 思わぬ展開に

僻地離島では伝統的な食料対策 古賀時代も 山に放していた

1978年日本青年社が非常食用に番（つがい）のヤギは持ち込んだ。これは沖縄の離島僻地での伝統的な食料対策だった。古賀開拓時代から大正～昭和に至るまで、魚釣島でもヤギを山に放ち繁殖させていた。

大正9年頃、古賀(善次か與助であろう)は、魚釣島に雌雄のヤギ2頭を放ち、のちに群れをなすほどヤギは繁殖した。

昭和10年頃、同島で2隻のカツオ船が操業していたが、雨天や風波が荒れて出漁できない日は、ヤギ狩りをしたようだ。これは八重山古賀支店喜捨

場孫正からの聞き取りにある。(「南島研究」第40号南島研究会刊1999.3)

また、昭和18年、八重山古賀支店伊地柴贅からの聞き取りによると、当時魚釣島には野ヤギが数百頭棲息していたそうである。(「軍事極秘1943年08/03付石垣測候所秘發第242號」)。1952年に高良は、調査に猟銃を持参して、ヤギを仕留めて、ヤギ汁食べる積りであったが、一匹も見つけることができなかった。同行した上運天に、「おかしい? 相当居るはずだ」と話していたという。



ヤギ番が持ち込まれた翌年の古賀村跡のキャンプ付近に現れた親ヤギ2頭、仔ヤギ2頭。(新納義馬1979)

ヤギ捕獲依頼され 捕獲したヤギ 網ごと 保安庁に没収される

日本青年社が持ち込んだヤギも殖え続けた。八重山の漁師の話である。

「島に行くときすぐ10頭ほど飛び出してくる。1990年頃かな、那覇の業者からヤギ捕獲してほしいと50万で3日間雇われた。雌ヤギ2頭持って上陸した。魚獲る網を2つ建てて、この雌ヤギを泣かせて、その中に誘い込み捕獲する。その方法で首尾よく20頭位捕っていたら、保安庁の船が見える目の前だから、警備の者が怪しいと上って来た(笑)。もうお手上げになったよ。一遍に運ぶ積もりで岸壁に繋いでいたヤギも、連れてきた2頭の雌ヤギも、自分たちの網まで、全部没収された。名前と住所を船の登録番号を書かされて、もう何日に来なさいと、あの時は散々だった(笑)」(八重山漁協 玉城亀一談)

国の上陸禁止措置で 殖えに殖え 魚釣島 ヤギ天国と化す

国の上陸禁止措置で 捕獲されずに殖えに殖え、島はヤギの天国と化した。

爆発的に殖えたヤギは、植物を片っ端から、食い荒らし、食い尽くしていった。



ヤギは最終的には、
どんな食材でも
食欲に食べる。
固い葉のピロウさえ
既に食害受けている。
(新島義龍 1991)

林床を覆いつく
していた植物も
食べられている。
林床は乾燥、裸地
化し、森林の破壊
を早める。
(仲間均 2002)



国が尖閣諸島への
上陸禁止措置にしたため、
魚釣島は
ヤギの天国となった。
海岸岩上をたむろするヤギ。
(東京都 2012)

2、深刻化するヤギ食害、植性破壊し、地滑り・崩壊招く

1991年の琉大生物グループの洋上観察調査で、南斜面だけで採食に出てきたヤギ約300頭を目撃した報告もある。これらヤギの食害により、魚釣島の植生は破壊され、裸地化が進行し、地滑り・崩壊を招いている。



北側斜面も地滑り・崩壊が深刻化している。ヤギは草地を食い尽くし、林地まで食い荒らしている。一部林縁ではすでに崩壊が始まっている。
(石垣市 2012)

ヤギ食害前の景観
1979年の未だヤギの食害を受けてない南西端の景観。海岸植生のクサトベラ、アダンなど海岸林からピロウと混生した植生へと続いているのが分る。
(新納義馬 1979)



ヤギ食害後の景観
2012年の景観。ヤギが放たれて34年後、島中の食材を食い尽くし、この有様。これから山頂に向かって移動し、被害は拡大していくであろう。
(石垣市 2012)

2、古賀村跡も様変わり 海岸一面 岩塊がゴロゴロ

高波・高潮防いだ 防波堤の盛土と草木 消失する。

ヤギ食害で古賀村跡周辺も一変した。食害前と後に撮った写真を見比べて見ると一目瞭然である。防波堤跡までの石積み前庭広場（A 地区）に、うず高く生い茂っていた草木、盛土は消え失せた。海岸一帯は、岩塊がゴロゴロと散らばった異様な光景になり果てている。



ヤギ食害前

鯉釜納屋石積みの前庭(A地区)から防波堤まで緩やかな上り坂状に盛土され、海浜植生の草木が生い茂っている。これらが古賀村を高波、高潮から守ってきた。

(新納義馬 1979)



ヤギ食害後

1991年の変容

ヤギが持ち込まれてから13年後の景観。石積み前庭の海浜植生は消え、盛土は流出海岸一面に散らばっている岩塊は、防波堤など構成していたものであろう。

(新島義龍 1991)



食害は深刻の一途 地盤緩み、石積み一角から崩落？

固いアダンも食べられ、食害は深刻の一途、防波堤の盛土と草木も消失したため、基礎の地盤が緩み出し、高波や高潮の影響をもろに受けて、一角から石積みの崩壊は始まった。



前出 1991 年の変容では、石積み両端の角部分(○印)が崩落、また、前庭にアダン 2 株が残されている。アダン葉は固いから食い残したであろう。(新島義龍 1991)



1997 年の景観。地盤が緩み、東側楼門一角(○印)が何んと崩落している。ヤギ食害も止むことない。ついに前庭の固いアダン、鉄塔前のモンパの木も食べられ消失している。(仲間均 1997)

古賀村跡のシンボル 鯉釜納屋石積み 幾星霜、風雪に耐えてきた

この鯉釜納屋(通称カツオ工場)跡の石積みは、雄姿を誇り、古賀村跡のシンボルだった。

古賀の一番のお気に入り、この鯉釜納屋を前にして一人で写真を撮っている。

国旗日の丸を高々と掲げ、東シナ海の絶海の孤島に、沖縄県八重山郡尖閣諸和平山(魚釣島別称)古賀村ここにありと、誇示していた。まさに国境防人の砦の感をなしていた。



かの石積みは、古賀村が殷賑極めた光景を、台風で壊滅し、島人たちが撤退していく様を、列島経営の歴史の一部始終を見守り続けてきたのである。

その間幾多の艱難があった。台風襲来あり、高波・高潮あり、また、戦時中、漂着した疎開民を迎え入れた際には、米機による爆撃、機銃掃射も浴びた。

あれから百年余り幾星霜、風雪艱難に、ビクともせずによくぞ耐えてきた。

海浜植生と盛土消え 地盤緩み、台風、高波・高潮 もろに受ける

ヤギ食害は、盤石堅固に、耐えてきた石積みに致命的な打撃を与えた。

石積みの基礎を支える防波堤の盛土や草木の守りは消失した。この結果、地盤は、徐々に緩み、台風、高波高潮の影響をもろに受けるようになった。

1991年の写真を見ると、石積み東西の角は一部崩れかけ、96、97年の写真では東楼門一角が壊れかけている。

これは表正面からは分からないが、石積みの内側は相当崩壊しているはずである。



東楼門一角が崩落している。内側部分の石積みがこの一角から崩れ出していることを示している。(恵忠久 1996)

まさに、鯉釜納屋跡の石積みは致命の傷を負い、力振り絞って屹立しているのである。

その姿 満身創痕で屹立し 国境の島を守っている孤塁の如き

致命の傷負いながらも、頑丈な造りであったからこそ、よくぞ持ちこたえている。

その姿は、満身創痕で屹立し、国境の島尖閣諸島を守っている防人城砦、孤塁の如きである。1996年にこの内側を撮った写真がある。両脇（東西側面）の石積み写真である。

これ見れば、いかに堅固な造りであったかが分かる。



正面から見た石積み。東西両脇も頑丈に石積みし、コ字形で全体堅固に積まれている。(恵忠久 1996)



西側脇(○印) 石積み少し崩れているが百年後の今もデンと座っている。崩れかけているのは正面Eコーナー部分か？石積は相当の厚さがある。(同上)



東側脇(○印) 石積み。崩れているのはやはりWコーナーの石積みか？何んと部厚いこと。目測で見ても、幅 150 センチは優にある。堅固な秘密は幅の厚さにあるだろう。

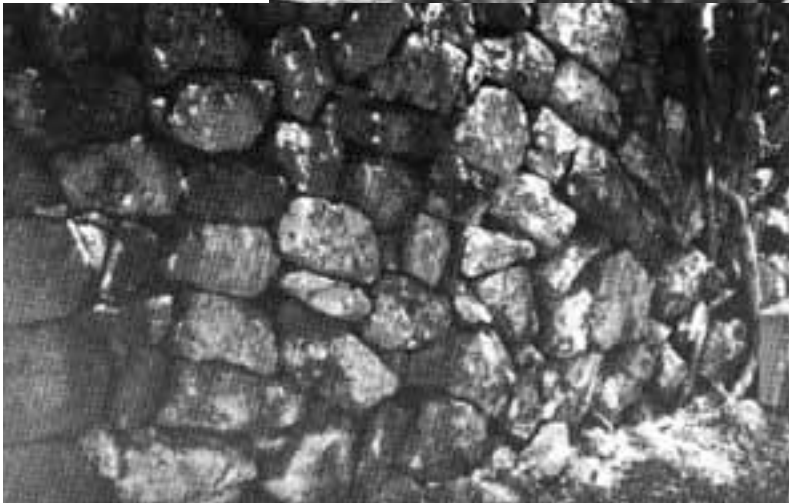
(同上)





東側脇の出入口。
素晴らしい石積み脇門。
正面は楼門を2つ備え、脇
は東西に各々1つ通用門。
実に見事な石積みである。
人力と根性で絶海の孤島
に築き上げた文化遺産で
とも言えよう。
(恵忠久 1996)

東側脇の内側
横臥するガジュマルの
大径木。廃墟跡に闖入
した新たな棲主。兵ど
もが夢の跡、時の移ろ
いを思い知らされる。
(同上)



堅固な石積み。
二重三重に
幅150センチほどに
厚く頑丈に
積み上げている。
東シナ海の
吹きすさぶ潮風
高波高潮にも、
幾星霜耐えてきた
秘密はここにある。
(同上)

3、最後の孤塁 矢尽き 刀折れて、壊滅寸前に

正面の石積み吹き飛ばさ 変わり果てた姿に 衝撃受ける。

防人城砦の孤塁は、矢尽き、刀折れて、ついに力尽きてしまったのか。

下の写真に、わが目を疑い、大きな衝撃を受けた。砦の正面石積みは吹き飛ばされて消え失せ、両脇だけ残した変わり果てた姿になっていた。

筆者が不勉強にも、これに気付いたのは、2011年夏で、写真家山本皓一が撮った写真集とDVD(注1)を見て知った。その前年2010年石垣市を訪問した。「尖閣諸島に関わる情報資源の活用」の聞き取りのためだった。

玉津博克教育長は、「古賀氏の開拓に関して・・・昔のカツオ節工場跡とか・・・『近代産業・交通・土木』遺跡として保護されなければならない。国が遺跡を文化財指定する価値は充分にある」と指摘されていた。だが、壊れた石積み写真は山本が2003年8月25日上陸した時に撮った写真だった。10年前にはもう壊れていたのだ。なぜ、こんな重大な事実が明るみにならなかったのだろうか。

※注1:「誰もみたことない日本の領土 DVD 尖閣・竹島・北方四島」(宝島社2011年3月刊)



最初見た時は、何これ?と戸惑った。衝撃的だった。西側脇の石積みと理解するのに時間を要した。(山本皓一 2003)

2012年東京都洋上調査でも 石積み遺跡、見落とされる

2012年東京都は、尖閣諸島を洋上調査した。「東京都現地調査報告」には、この事実は見落とされ、一言も触れていないのは、誠に遺憾である。

古賀の開拓シンボルの石積み遺跡を知らずして、尖閣諸島を語るなどと言っても過言でない。

この石積み遺跡こそが、尖閣開拓の歩みと軌を一にし、その一部始終を見守ってきた歴史の

証人であり、今に残る尖閣諸島で最も重要な歴史的遺産だからである。



東京都洋上調査でこの石積み遺跡が見落とされている。これ知らずして尖閣を語るな! それほど重要な遺跡である。(石垣市2012)

東楼門一角から崩れ、傷拡大し 正面全体が吹き飛ばされた

さらなる疑問が起こった。石積み遺跡の正面全体まで崩壊したのは、何ゆえか、また、いつ頃、それは起こったのだろうか。石垣市議仲間均が撮った写真集（注2）に、これを示唆するものがあった。下がその写真である。正面石積みの東半分が崩壊している。

この原因は明白だった。1996、97年の写真を見ると、東側の楼門の上方が崩落している。これは内側部分の石積みがこの一角から崩れ始めていることを示していた。

そこへ衝撃を加えれば、傷口は拡大する。その結果、2001年の写真が示した通り、正面石積みの東半分が崩壊してしまった。

そこへ、また台風、高波・高潮が襲い重なれば、致命的打撃は避けられない。

半分崩壊していた側から守りの弱い正面部分を悉く吹き飛ばしてしまった。

その結果、分厚く頑丈な両脇の石積みだけが残された。

これが2003年山本が撮った写真である。



楼門東付近の傷が拡大、正面東半分の崩壊を引き起こした。（仲間均 2001）

※注2:「仲間均写真集「危機迫る尖閣諸島の現状」(2002年1月刊)

台風が原因 ならば いつ いかなる 台風の仕業か？

これは、又もや、台風の仕業なのか、そうだとしたらいつ来た台風かを調べることにした。まず、石積み正面部分に絞り、崩壊の時期を写真から特定してみた。

- | | | |
|------------|----------------|----------|
| 1、1991年5月 | 石積み正面目立った異常なし | (新島義龍撮影) |
| 2、1996年8月 | 石積み正面東楼門後方崩落か？ | (恵忠久撮影) |
| 3、2001年12月 | 石積み正面東半分が崩壊 | (仲間均撮影) |
| 4、2003年8月 | 石積み正面全体が崩壊 | (山本皓一撮影) |

1～4は、1991年5月～2003年8月を対象とした。

その間に、発生した台風の中から、尖閣諸島を襲った大きな台風があるか、気象庁のホームページには、過去の台風情報が掲載され、「台風経路図」が検索できる。

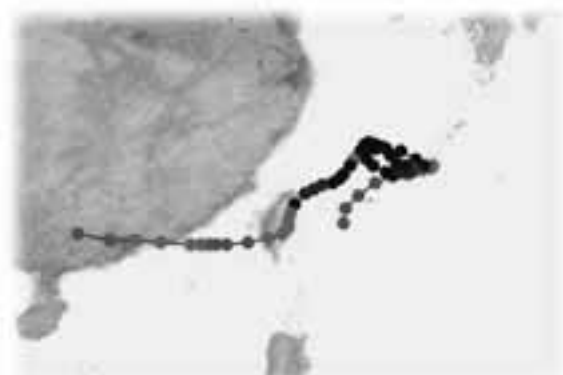
それで調べてみると、尖閣諸島を襲った台風は幾つかあった。

この中から、2と3の正面東半分崩壊 4の全体崩壊を招いた台風を探し出してみた。

2001年9月台風16号 尖閣諸島を迷走 石積み東半分 崩壊させた

2については、1991年～97年の7年間で、尖閣諸島を襲ったと思われる台風を見ると。筆者は進路図から正しく特定できない、凡その判断では、4個？ほどしかない。3,4についても思ったほど多くない。意外に少ない感じがした。

2の正面東楼門後方崩落を引き起こした台風はどれか。1995年8月台風7号と推定される。南方海上で発生、北東に直進して尖閣諸島を襲っているよう見える。最大風速は記されていない。



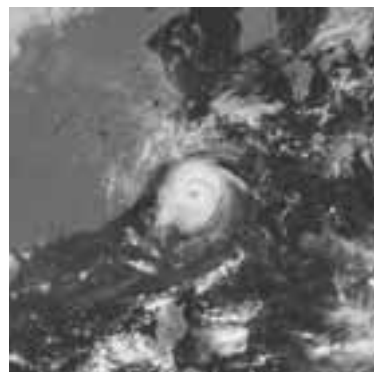
上：2001年台風16号経路図、この台風で長時間に暴風にさらされ、石積み正面東半分が崩壊したと想像される。

下：同台風の尖閣上空の航空写真（「ウェブサイト」より）

3については、1997年～2001年の6年間で10個あり、そのうち2個の台風が石積み正面東半分崩壊を引き起こしたと考えられる。

最初の1個は、1998年10月16日の台風10号（最大風速55m/s）が尖閣諸島をほぼ直撃しながら、東楼門付近の崩れた箇所を襲いかかり、崩落を拡大させたのでは？

そこへ2001年9月迷走台風16号（最大風速40m/s）が襲いかかってきた。この台風は9月6日に発生し、沖縄近海で複雑な進路を取った後、東シナ海に向きを変え、尖閣諸島上空をゆっくりと移動しながら台湾に上陸した。



これは稀に見る迷走台風で、尖閣諸島付近を15日から16日にかけてゆっくりと迷走移動し、石積みは長時間暴風攻撃にさらされた。この時に正面東半部分を徹底的に崩壊させた。

2001年の写真見れば、この被害の大きさは、一目瞭然である。石積の東半分は壊れ、半死の傷を負って痛々しい。再び、台風が襲えば、守りの弱い正面部分はひとたまりもない。

4については、そこへ1年後に、2002年9月6日台風16号（最大風速40m/s）の襲来である。片方半分壊れかけているから、被害は甚大にならざるを得ない。その結果、石積みの正面部分は吹き飛び散り、両側の脇垣を残したまま、無惨な姿になり果ててしまった。



2002年9月台風16号経路図、この台風で石積み両脇垣残り提出正面部分が吹き飛ばされた。（同上）

石積み砦、正面飛び散っても、力ふり絞り 今も持ち耐える

古賀村跡を守る最後の城砦は不死身であった。

正面陥落という致命の傷を負いながらも、最後の力を振り絞って、持ち耐えていたのだ。

この事実を知ったのは、2003年山本が撮った写真と、2012年東京都洋上調査に撮った写真がある。下に2つを掲載した。見比べてほしい。壊れた石積み両脇は両方とも同じ姿のまま。2003年から11年間崩壊は進んでいない。厚さ1.5メートル以上はあるだろうか。頑丈さに感服した。恐らく2012年以降、今もその状態であろう。



上：2003年8月山本が撮った写真 下：2012年9月東京都洋上調査で石垣市が撮った写真
両方とも同一時期に撮ったかと思えるほど同じ姿である。11年間崩壊は全く進んでいない。



先人たちの遺跡 これ以上放置してはならない

古賀村跡シンボルの石積み遺跡は、2018年の今も、致命の傷を負いながらも、最後の力を振り絞って持ち耐えている。



西側脇の石積み、見事な楼門も往時の姿で残っているのは奇跡に近い。(山本皓一 2003)



正面側から見た西側脇の石積み、二重三重に厚く頑丈に積み上げられている。石積み上方に掲げられている日の丸の小旗が痛々しい。(葛城奈海 2012)

だが、これ以上放置すれば、台風、高波・高潮などで完全に破壊され、消失してしまう。一時の猶予もない。我々は、百年の悔いを後世に残してはならない。

急ぎ石垣市、沖縄県、国挙げて、遺構調査が必要である。

Ⅶ、急ぐべし 尖閣諸島・古賀村跡の遺跡調査

1、遺跡は十分確認できる

尖閣3島 古賀村跡の遺跡 石積み含めて 相当確認できる

魚釣島古賀村の石垣積みの遺跡は、防波堤を含めて、確認できる状態にある。

南小島古賀村の山手部分の遺跡は、うっそうと茂る夏草のなかに眠ったままである。

久場島の集落は深い霧に包まれている。開拓当初は南西海岸近くにあったが、宮古の古老たちは北側の山麓近くに住んでいたとも話し、その界限に集落跡があったのを目撃した漁師もいる。南西海岸近くから北側の山麓近くに移動分散したのだろうか。

新納会長は、生い茂る草木をかき分け藪に入り、石垣囲いされた集落跡を目にした。

割れた甕、壺の破片も散らばっていた。こんな屋敷跡を掘ってみれば、どんな遺物に出くわすか、また石積み遺構を調べれば、どんな集落構造を成していたのか、興味をそそり、これまた楽しみだと話されていた。



久場島古賀村跡の
道路遺構、
実に見事な石積み
どこから、どこへ
何を運搬するために
造られたのだろうか。
(新納義馬 1980)



南小島古賀村跡の
石積み遺跡、
海岸高台斜面にあり
大正元年廃村以降、
訪れる人として無く
覆い被さる草木の中で
深く眠ったままである。
遺跡を発掘すれば
何が出てくるか、
これまた楽しみである。
(新納義馬 1971)

2、「日本近代化産業遺産群」として価値ある

「近代産業・交通・土木」遺産として保護を 石垣市教育長 指摘

これら古賀村跡の遺跡・遺構については、2010年地元石垣市は、聞き取り調査した際に、「近代産業・交通・土木」遺産として保護されなければならない。国が遺跡を文化財指定する価値があると指摘している。

「古賀氏開拓に関してだが、昔のカツオ節工場跡、港等の開拓跡、そういったものは『近代産業・交通・土木』遺産として保護されなければならない。

大東島の燐鉱石跡（北大東島の旧東洋製糖燐鉱石貯蔵庫、積荷棧橋は国指定文化財となっている）のように、尖閣のそれも国が遺跡を文化財指定する価値は充分にあると思われる」（石垣市・玉津博克教育長）。（「尖閣研究 尖閣諸島の自然・開発利用の歴史と情報に関する調査報告 平成22年度」より）

日本近代化産業遺産群、沖縄県には4つが指定されている

北大東島の燐鉱石採掘関連施設跡は、日本近代化産業遺産群に認定されている。

また、八重山西表の宇多良炭鉱跡も日本の近代化に果たした役割を後世に伝えるため、2007年（平成19年）には、同産業遺産群に認定され、木道などが整備されている。

沖縄県では、日本近代化産業遺産群は、以下の4つが指定されている

- 1、糸満市の製糖関連遺産
（高嶺製糖工場跡）
- 2、南大東村の製糖関連遺産
（大東糖業南大東事業所の砂糖運搬専用軌道）
- 3、燐鉱石採掘関連遺産
（旧東洋製糖北大東出張所跡）
- 4、西表島の炭鉱関連遺産
（宇多良炭鉱跡）



西表島の炭鉱関連遺産（宇多良炭鉱跡）
（「ウエブサイト」より）

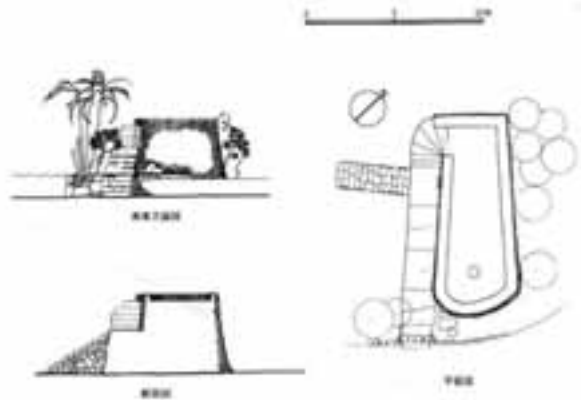
なお、2,3については、玉置の大東島開拓に関わる遺跡である。

尖閣諸島・古賀村の開拓跡も、これら4つに劣らず、歴史的に重要な役割を果たしてきた。石垣市玉津教育長の指摘の通り、「近代産業・交通・土木」遺産(産)として保護されなければならない。

このようなことから、国や県は、日本近代化産業遺産群の1つに認定・保護し、古賀辰四郎ら、先人たちが果たした功績を後世に正しく伝えなければならない。

石造建築文化誇る沖縄、調査ノーハウ、実績も豊富にある

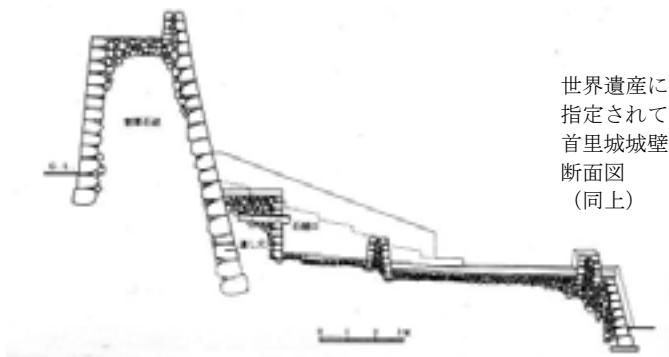
沖縄はグスク群の世界遺産もあり、石造建築文化を誇っており、調査ノーハウも優れ、実績も豊富にある。このようなことから古賀村跡の遺跡・遺構調査が急がれる。



小城盛（クスクモリ）遺跡の図面 八重山竹富島にある王府時代に異国船の航行を知らせた烽火台。
（「沖縄の石造文化」より）



世界遺産に指定されている中城城跡遺構の平面図（同上）



世界遺産に
指定されている
首里城城壁の
断面図
（同上）

3、魚釣島古賀村跡の遺跡 随所に確認できる

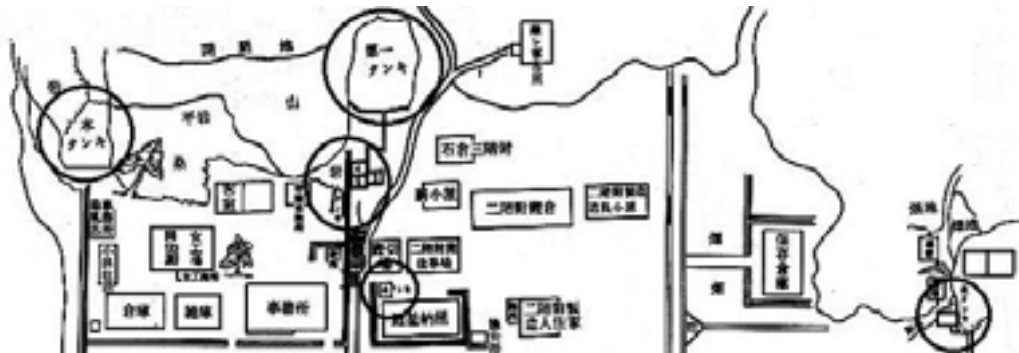
建物跡の礎石、諸施設跡などを発掘し、事業所配置の遺構を調査する。

魚釣島古賀村は、尖閣諸島の開拓拠点として建設された。安心して開拓に従事できるようにどのような建物を建て、水タンク、水汲み場（水飲み場）など、どのような施設を整えて古賀村は建設されたのだろうか。幸い「和上山建物配置平面図」（明治41年）があるが、古賀が提出した予算書（明治41年藍綬褒章授与ノ件）には建物新增計画もあり、該配置図を参考にしながらは遺構調査を行う必要がある。

山から流れ堰き止め、水飲み場・貯水タンク配置

水の確保は開拓の最低要件である。古賀村には、後方山からの流れをせき止めて水汲み場、水タンクが造られていた。どのような形で造られ、どのように配置されていたのか。

建物配置図を見ると、水汲み場は記されてなく、「第一タンキ」「水タンク」が8つほど記されている。古賀村の水供給システムを考える上で、これらの遺構調査は必要である。



古賀村の給水システム、山から水を引き、8つほど貯水タンク配置。（○印タンク設置箇所）



古賀村脇の水汲み場、山から流れてくる大切な水をせき止める場所は大切にレンガ、セメント囲いで造られている。

（新納義馬 1979）



岩場の貯水タンク
水汲み場か？、
往昔の姿とどめる。
(恵忠久 1996)

調査団が利用して
いた水汲み場。後方
山から清冽な水が
絶えなかった。
(新納義馬 1979)



左：山本は「折れた
石には凹状の溝が
あり、水道として使
われた痕跡があっ
た」としている。
(山本皓一 2003)



壺屋焼き水甕
沖縄でよく使われ
ていた屋敷用水甕
ハンドーグワー(半
胴小?)と呼ばれた。
古賀村でも、家屋ご
とにこの水甕が置
かれ、使われていた
と想像される。

後方背地の建物跡 高台に位置し 高波被害 さほど影響なし？

配置図の□囲みの後方配置の建物、保存倉庫、中央の二階附鯉倉、二階附鯉仕事場など、また岩上の離レ家客室(◇印)、右端に保存倉庫(○印)あり、高波の影響受けてないと思う。



□囲みは上掲後背地高台部分。右端○印の建物は「保存倉庫」。◇印は「鯉釜小納屋」、この写真から◇印の「離レ家客室」は確認できない。 前出(明治41年)



□囲みは後背地高台部分。この高台部分を掘り起こせば遺構、遺物は出土する可能性が高い。右端延長方向に「保存倉庫」がある。 前出(石垣市2012年)

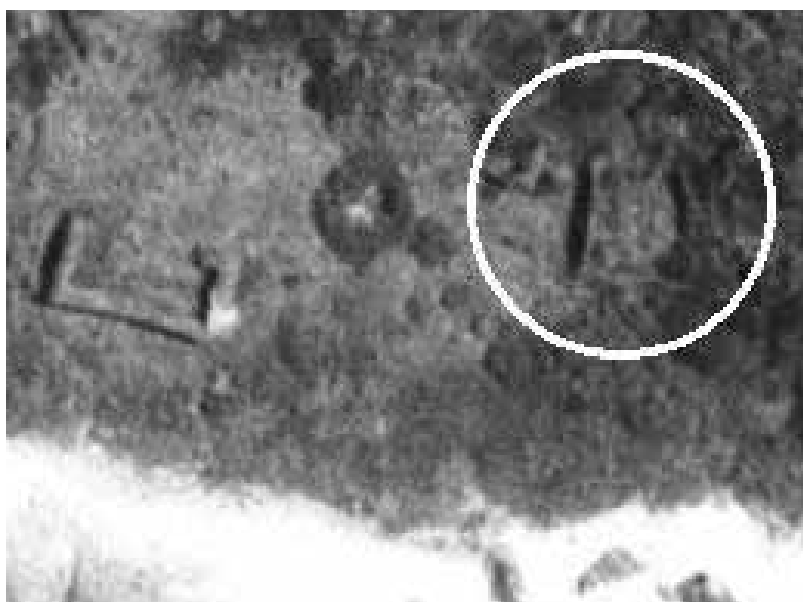
「保存倉庫」の石積みか？ ひっそりと夏草に眠っていた



後方山の斜面に
石積みが見える。
「保存倉庫跡」の
石積みか？
(田中一郎 1953)

「保存倉庫」は高台に
建てられ、石積みは楼
門もあり、立派な建物
だったようだ。倉庫跡
を掘り起こせば、何が
出てくるだろうか。

前出(明治41年)



米軍撮影航空写真
○印が「保存倉庫」
の石積み。

右の鯉釜納屋と
面積比較すると、
ほぼ同じ程度か？
大きな建物だった
ことが分かる。

前出(昭和20年撮影)

「離レ家客室」(先覺楼?) 往年の遺構くつきり



「離レ家客室」は理建物配置図見ると後方山の手にあり、そこへの階段。(山本皓一 2003)

「離レ家客室」の礎石。幸い遺構は完全に残っている。

(同上)



明治43年、玉利喜造(鹿児島農高長)は、尖閣諸島を視察し、魚釣島古賀村の別荘で、「先覺楼」と揮毫した。この別荘が“離レ家客室”のことだと思われる。



古賀は、この先覺楼で、客人と古酒泡盛を酌み交わしながら、列島開拓の思いを語ったであろう。どんな酒器に、泡盛を盛ただろうか。

壺屋焼き酒器

地酒泡盛にはこれが合う。手酌だと鬼の手(後列右)。献杯するなら右下の急須が適当か。中列左端の抱瓶は腰に巻いて持ち運びできる。

4、開拓本拠地・魚釣島古賀村の構造 遺構悉皆調査も

魚釣島古賀村は どんな遺物が出てくるか 楽しみだ



魚釣島開拓本部事務所前での写真、中央付近のスーツ姿の客人脇に古賀が見える。前列左の婦人は幼児を抱いている。島で出産したのだろう。厳しい環境で死産もあったと思える。前出（明治41年）



水子地藏か？海岸岩蔭に安置されていた。（山本皓一 2003）

魚釣島古賀村は、開拓本拠地である。古賀の開拓経営を知る上で、古賀村の全体構造を明らかにするため、集落に加えて、後背山地の水源、耕作地、山林、掘割港湾などについて遺構悉皆調査も行う必要があるだろう。

久場島には、祭礼施設の神社、墓地も見つかっている。魚釣島にも同様なものがあつたらうか。古賀村海岸岩蔭に水子地藏らしきが確認されている。

どんな遺構が出てくるか興味津々である。

多和田先生 “古賀時代の生活の跡 これなんだ これなんだ !!”

遺構の周りを掘り起こせば、一緒に遺物（生活跡）も出てくる可能性が高い。

「多和田真淳先生は、考古遺跡を一所懸命調べておられた。とにかくあっちこっち掘って、浜行ってこうやってみたり、崖の下をチョコチョコとやってみたり、・・何かの欠片何かないかと、いろんな所を探していましたね。で、昔から人間が住んでいた証拠はない、古賀時代の生活の跡はこれなんだ、これなんだと言っていました。古賀時代のものはあつたけど、それ以前のは、らしきものはないな。全くの無人島だったと言っておられた」（上運天賢盛談）。多和田先生は、何を見付けて、「古賀時代の生活の跡はこれなんだ、これなんだ」と仰っていたか知らないが、とにかく遺構を掘れば、遺物が出てくるのは間違いない。

遺物の大半 壺屋焼？ 多量に持ち込まれて 使われる

新納会長曰く、「壺屋焼の焼物は、生活に必要な物だから、尖閣諸島に相当持ち込まれている、久場島の屋敷跡に行ったら、甕がゴロゴロ転がっていた。あれ皆壺屋焼の甕、それを1個担いで持ってきた。魚釣島も同じ。魚釣島は久場島とは比較ならない。集落は大きいし、人間も大勢いた。200人余りが生活していたから、屋敷跡にはいろんなものが埋まっているはずだわ。掘り起こせば、何が出てくるか分からん、これがまた楽しみだ」と。



上：久場島の屋敷跡に転がっていた壺屋焼の甕（新納義馬 1971）
右：担いできた甕を、何に使ったか調べている新納会長。



「壺焼焼の大きな甕だと、水甕、泡盛入れる酒甕、味噌甕、種物の貯蔵の甕と用途も広く、使い勝手もいい。また毎日使う味噌や脂、塩などは小さな壺に入れる。こんな甕や壺が多量に持ち込まれて、古賀村で使われたと想像される。幸い甕に判があれば大凡の製作年代と製作者も分かるらしい。これらを手掛かりに、古賀村の生活史を解明することができるかも知れないわけだから」。

会長さらに曰く、「陶器の外に、石臼も必要だ。石臼ないと豆腐や味噌なんかは作れない。あれ確か魚釣島かな、壊れた石臼使えんから捨ててあったの見た」。



上：石臼、味噌、豆腐造りに欠かせない。
左：壺屋焼きの味噌壺、塩壺、油壺、
両者とも、生活に不可欠なものだから
出土する可能性が高い。

日用雑器 多く持ち込まれた 開拓村の生活を知る 手がかりに

魚釣島古賀村には、200人余りが暮らしていた。絶海の孤島という厳しい環境の中でどのような生活を営んでいたのか。換言すれば、明治期の移民開拓村の生活—古賀村の永住民の衣食住は如何なるものだったろうか。

毎日の暮らしを考えれば、煮炊きは鍋釜、芋ならシンメー鍋で炊いていた。水は桶に、芋、野菜の収穫物はザル、カゴ、モッコに入れ担いでいたと想像されるが、金属や木製品の道具だと朽ちて無くなる。長く残るのは陶器、焼き物の類である。

やはり、日用雑器の飯椀、汁椀、皿や鉢物類、急須、茶碗、湯飲みなどの日用雑器が古賀村の生活を知る手がかりになる。

壺屋焼は大きな甕壺など荒焼の他に、日用雑器の上焼きも多く産していた。他方、明治以後、沖縄に来た寄留商人たちは乳白色の優美な磁器を持ち込んだ。有田、伊万里など型抜きで大量生産した日用雑器である。これらは値段も安く、薄くて軽く、丈夫であり。沖縄全土に普及した。

尖閣諸島においても、これら磁器類も相当使われていたと考えられる。

古賀村の作業場跡、倉庫跡、客室跡の地面を掘り起こせば、壺屋焼に混じって、どんな県外産の陶磁器が出土するだろうか。

たとえ破片、欠片だろうと、日用雑器は、彼らの暮らし、生活を知る手がかりが得られる貴重な遺物である。これらの発掘も大いに期待できる。



沖縄でよく使われていた日用雑器

上 茶器：右は壺屋焼グループ、左は県外産陶磁器。

下 鉢皿類：同上。壺屋焼は手びねり、磁器は型抜き製作



愛媛県の砥部焼き、スンカーマカイと呼ばれ、丈夫できれいだと、沖縄で広く愛用されていた。魚釣島で出土した写真である。(山本皓一 2003)



飯椀・汁椀 右は壺屋焼陶器。左4個は県外産磁器、左端は砥部焼きスンカーマカイ。戦前沖縄に多量に移出され、染付文様から製作年代が特定できよう

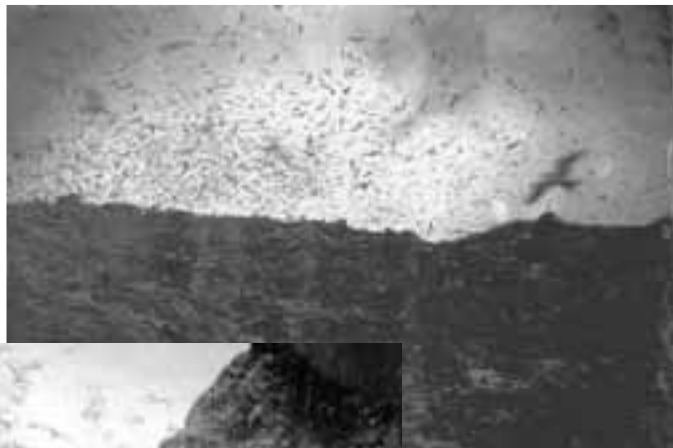
VII、南小島古賀村 海鳥事業の本拠地

1、南北小島は、無数の海鳥が生息する岩島



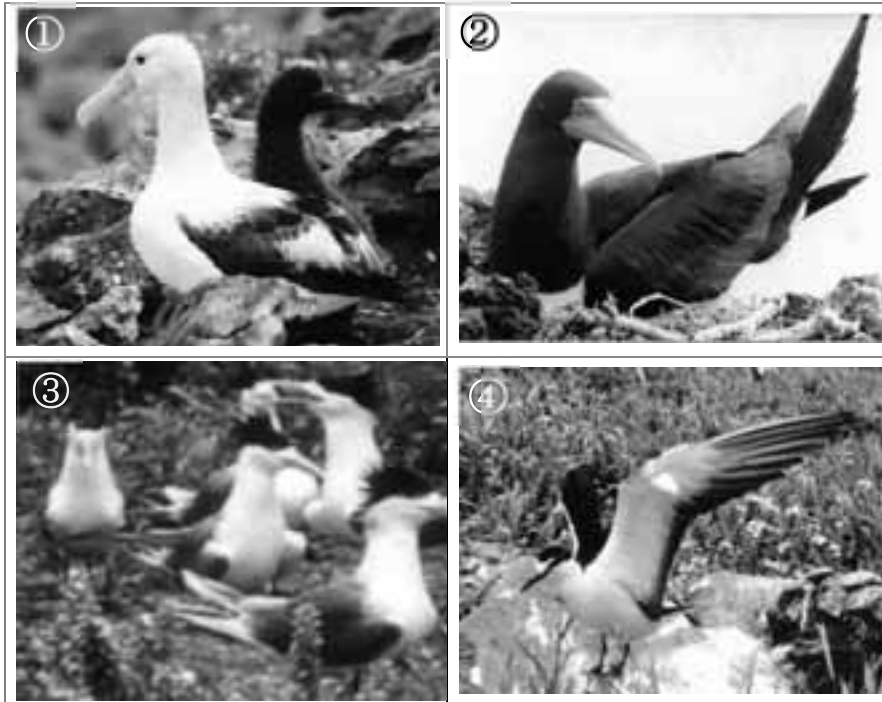
前方南小島、後方北小島、遠方に見えるのは魚釣島。
南小島古賀村は北側岩山の裏手の海岸にある。対岸は北小島の岩山が屏風のようにそそり立ち、冬の季節風を防いでいる。（「ウェブサイト」より）

北小島の天空を
飛翔する海鳥。
(明治33年)



南小島の礁原に
営巣する
アジサシ類。
(同上)

南北小島に生息している海鳥



①アホウドリ ②カツオドリ ③オオアジサシ ④セグロアジサシ

アホウドリの標本

明治40年の「先島めぐり(4)」(琉球新報2.19)に、北条侍従が来島し、八重山高等小学校で信夫翁(アホウドリ)標本を観覧した記事がある。古賀が標本を寄贈したのだろうか。鹿児島県立大島高校にもアホウドリの標本が保管されている。製作年代不詳の古い標本である。戦時中は防空壕に避難させ、破壊を免れたという。尖閣諸島産とも考えられ、DNA鑑定で判明できれば、学術的に貴重な資料である。



鹿児島県立大島高校
に保管されている
アホウドリの標本。
(金井賢一提供)

2、南小島古賀村は、どうなっている？

海鳥事業場、洞窟周りからスタート 海岸、山の手に発展

明治33年黒岩は南小島を訪れた。その時に海鳥事業場（と思える）をスケッチした。

洞窟を半円状に描き、入口右に1つ、左に2つの家屋を示している。

南小島古賀村の海鳥事業は、洞窟周りからスタートし、海岸山の手に発展したであろうか。

南小島の西岸伊澤泊の景



（「尖閣列島探検記事」地学雑誌 第12輯第141巻より）

同33年に撮った写真を見ると、洞窟の入口が顔をのぞかせており、右2つの家屋の様子が確認できる。しっかりした茅葺構造になっているようだ。洞窟前広場には、船が揚げられていることから船揚げ場にもなっていたのと思われる。



南小島洞窟入口の景観 写真説明：「南小島漁業場（三十三年）」とある。
（「藍綬褒章下賜の件 明治41年」より）

3、海鳥事業の推移と古賀村の拡張

アホウドリ乱獲で、衰退の危機に 捕獲制限策をとる、

海鳥は、往時は魚釣島、南小島、北小島、久場島に海鳥は生息していた。

古賀氏の開拓事業の中でも、この海鳥事業はアホウドリの鳥毛からスタートし大きな利益を得ていたが、海鳥は乱獲減少したため、衰退の兆しにあった。

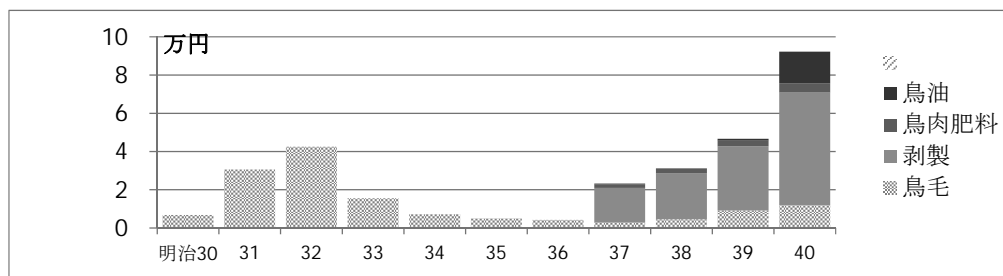


天空を乱舞する南小島の海鳥、写っている人物は古賀か（明治41年）

剥製事業展開し 海鳥事業 飛躍の足掛かり得る

明治37年に、新たに剥製事業を展開し、開拓収入の大きな柱とする。

剥製事業だけで前年の総収入(鳥毛・海産物)1.78万円を上回る1.82万円となり、年々海鳥事業は躍進し、明治40年には9.2万円となり経営総収入の半分以上を占めるに至った。



明治41～大正元年予算書においても、毎年「剥製監督者3人外150人」を雇入れる計画を打ち出し、海鳥事業に対する期待の大きさが分る。

南小島古賀村 急速に拡張工事

このように見てくると、南小島の事業拡張は目下の急務であったらう。

島を見聞した宮田は、「製鳥部の本拠は南小島に構まへられ労働者及び事務員此処に住し居れり。家屋や倉庫、製鳥場其の他港灣、貯水池も此処にあり。嚴重なる石垣も此の本拠を保障すべく造られあり。一切生活の条件は此の島に備へられありて古賀氏は是等の生活を維持するに適當なる衣食住に必要な品々を備なへ居るのみならず、・・時々和平山よりも送遣せられ、那覇の本店、八重山の支店よりも送遣せらるゝ」(前出「尖閣列島と古賀辰四郎氏 10」) と記している



南小島古賀村建設工事 写真説明：「南小島 道路開鑿（三十三年）」とある。
(前出「藍綬褒章下賜の件」)

明治 41 年南小島の地図では 6 か所？家屋が建てられていることが分かる。
これは製鳥部の労働者や事務員の家屋、倉庫、製鳥場、事務所なのだろうか。



南小島古賀村の集落地図 (同上)

4、突然の事業閉鎖、古賀村廃墟と化す

大正2年以後の報告、海鳥事業の記述なく、永住者なし

大正元年8月31日の台風が魚釣島古賀村を潰滅にもたらしたとすれば、南小島ほどの程度被害を受けたのだろうか。さほど被害はなかったにしても、南小島の海鳥事業は、魚釣島から後方支援なくしては成り立たない。

古賀が魚釣島から撤退したため、南小島も事業閉鎖を余儀なくし、剥製職人たちも引き揚げざるを得なかった。大正2年の報告には、この海鳥事業には触れていない。

大正4年の見聞記には、「南小島ノ北西端ニ小舎アリ捕鳥剥製所タリ。此ノ島ニ於ケル特有ノ海鳥ハ「アジサシ」ニシテ・・其ノ数幾万ヲ以テ数フベク夏季八重山列島ヨリ捕鳥ノ為ニ此ノ島ニ来ル獵人アリト云フ」とし、永住者がいた記述はない。

昭和14年には、農林省資源調査団一行が南北島を訪れた。彼らが目にしたのは天空を乱舞する海鳥の群れと廃墟と化した古賀村跡の石積みだけだった。



空を覆いつくす北小島のアジサシの群れ。竿をひと振りすれば2,3羽は落ちてきたという。
(昭和14年)
(正木譲提供)

対岸の北小島から南小島を望む、海岸右端に古賀村跡の石積みが微かに見える。(昭和14年)
(「よみがえる戦前の沖縄」)

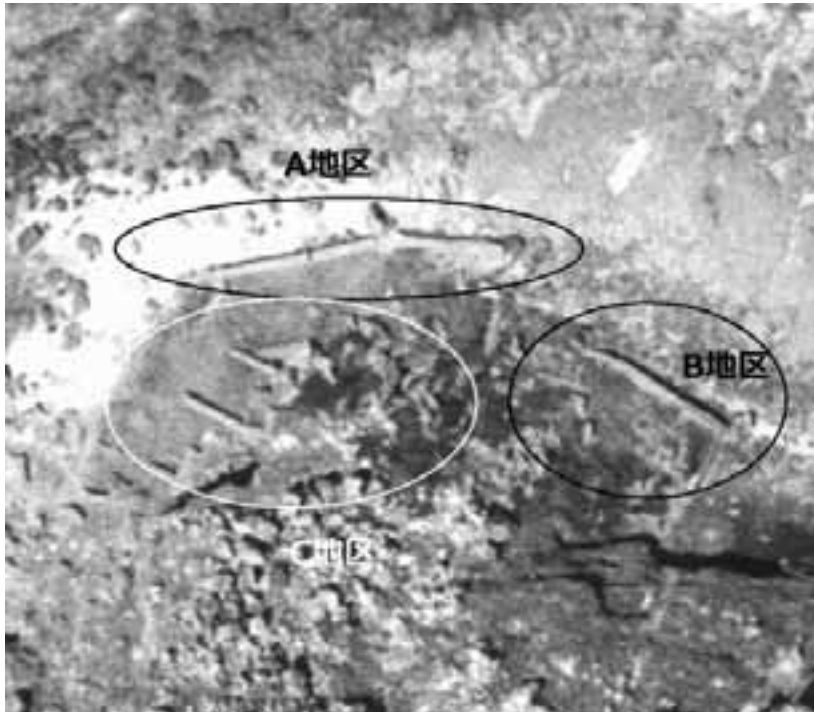


IX、南小島古賀村跡 規模・形状 魚釣島上回る？

1、古賀村の石積み遺構、米軍航空写真でくっきり

規模 形状から 魚釣島の石垣積み、上回る？

米軍が撮影した航空写真にも、南小島古賀村跡の石積みはくっきりと写っている。



昭和 20 年 3 月米軍が撮影した南小島空中写真。古賀村跡近辺付近を拡大。
(沖縄県公文書館)

南小島の石積みは、規模や形状からして、魚釣島のそれを上回っているのではなかろうか。石積みの大きさを計測した資料がないので、写真で両者を見比べた感じからである。

古賀は、何のために大規模に築いたのだろうか。海鳥事業だけではこんなに必要としたのか。別の事業目的もあって築いたのか。前掲の洞窟入口前広場の写真を「南小島漁業場」と明記されていたのは気になる所である。

ともあれ、南小島の石積みは広範囲にわたっている。

3つのグループ、海岸手前の石積み（A地区）、海岸山手斜面の石積み（B地区）、③（C地区：A地区の後方）の石積みに分けて、見ていくことにしたい。

1950年、終戦後宮古漁民も、古賀村跡で、カツオ節製造

尖閣諸島海域は島の傍らでカツオが釣れる魚の宝庫だった。宮古漁民は、南小島の古賀村跡に仮工場を建て、カツオ節製造を行った。仮工場は、船着き場に近いA地区に建てたと思える。石積み流木で柱を立て、米軍用の天幕を張り、ここに数か月滞在して、節製造をした。



島の周りで、エサの小魚も採れ、カツオも釣れた。カツオ釣り上げている様子は島の仮工場から見えたという。尖閣諸島はカツオの宝庫だった。(新里堅進イスト)



宮古島の工場から鍋や煮籠を持ち込み、石でカマドを拵え、石積みを利用してカツオの煮炊きをした。南小島は湧水が無いので、海水使ったようだ。
(同上)

2、尖閣諸島調査団 古賀村跡の石積み撮影

1952年琉大と琉政資源局との合同調査団 古賀村跡で宿営

ここからは尖閣諸島調査団によって撮影された写真から、古賀村跡の石積みの様子を見ていくことにしたい。1952年琉大・琉球政府資源局合同調査団は、C地区で宿営、その時に撮影したのが下の2枚である。



海岸手前のA地区（二重積）と内側C地区の石積みが写っている。写真がボケているが惜しまれる
(高良鉄夫 1952)



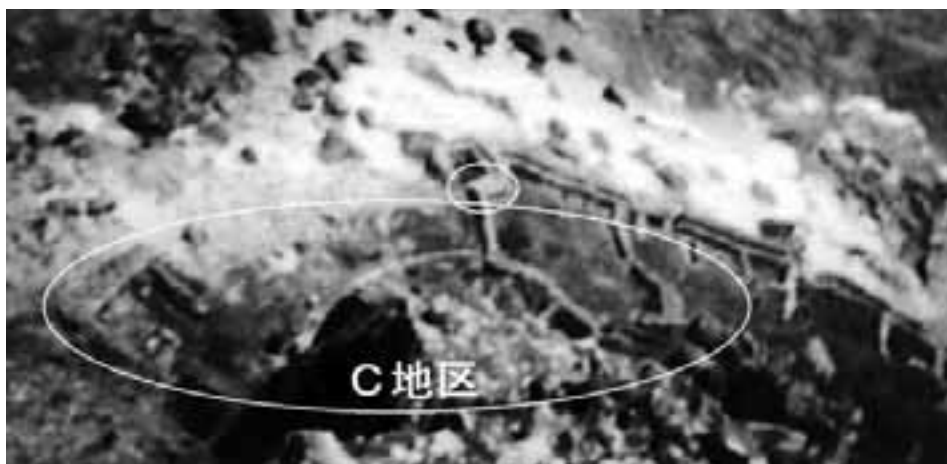
内側のC地区石積みに座って撮影、この場所は次掲写真の○印の箇所か？(新垣秀雄 1952)

1953 年高良による琉大学生、尖閣野外実習調査

琉大学生野外実習調査団が古賀村跡後方の岩山から撮影した。

この写真には海岸手前 A 地区半分とそれに連なる後方 C 地区の石積みが写っている。

この時は雨の伴わないヒーカジ（火風）台風の直後だった。潮風に打たれて草木が枯れてなくなり、C 地区の石積みがくっきりと写っている。ストーンサークルのような形状もあり、コ字型も幾つかある。貴重な写真である。このヒーカジの時に、右下方にレンズを向けて B 地区の石積みの姿を捉える絶好の機会だった。この写真がないのが惜しまれる。



ヒーカジ台風直後で石積みの形状がはっきり確認できる。○印は前年高良ら調査団が座って撮った場所か？左離れに大きなコ字型石積みは何に使われたものか。（岡田潤治 1952）

1971 年琉球大学調査（1）

琉球大学調査団が同じく後方の岩山から撮影した。海岸沿い A 地区の全容が分かる写真である。この時は石積みに草木が覆いかぶさり、ぼやけている。



A 地区の全容は分かるが草木に覆われて後方 C 地区の石積み構造が確認できない。（新納義馬 1971）

1971年琉球大学調査（2）

琉球大学調査団が後方岩山の斜面から撮影した。



（新納義馬 1971）

右上方に海岸沿い A 地区の石積み、右下方に B 地区の石積みが写っている。

まるでグスク（城）を思わせるように、整然と積まれており、優雅な姿である。側壁を L 字状に積み上げ、緩い湾曲線を描きながら斜面高台を取り囲むように築かれているようだ、A 地区側の後方斜面の C 地区付近は、草木に覆われているためよく分からない。

また B 地区には箱型砦に似た小さな石積みがある。これ何に使用したのか。この周辺も石積み構造が確認できないのは残念である。これらは斜面高台と海岸内側に建っているため、破損されず残っているはずである。今後の遺構調査に期待したい。

1971年琉球大学調査（3）

岩山から下りて、B地区の石積みを海岸側から撮った写真である。

見事な石積みである。古賀の時代から幾星霜、風雪に耐えてきたのである。



（新納義馬 1971）

1971年琉球大学調査（4）

対岸の北小島岩山から撮った写真である。A、B地区石積み全体が確認できる。



古賀村跡部分を拡大したのでボケている。、右口印はA地区、左はB地区石積み。（新納義馬 1971）

1979年沖縄開発庁の尖閣調査

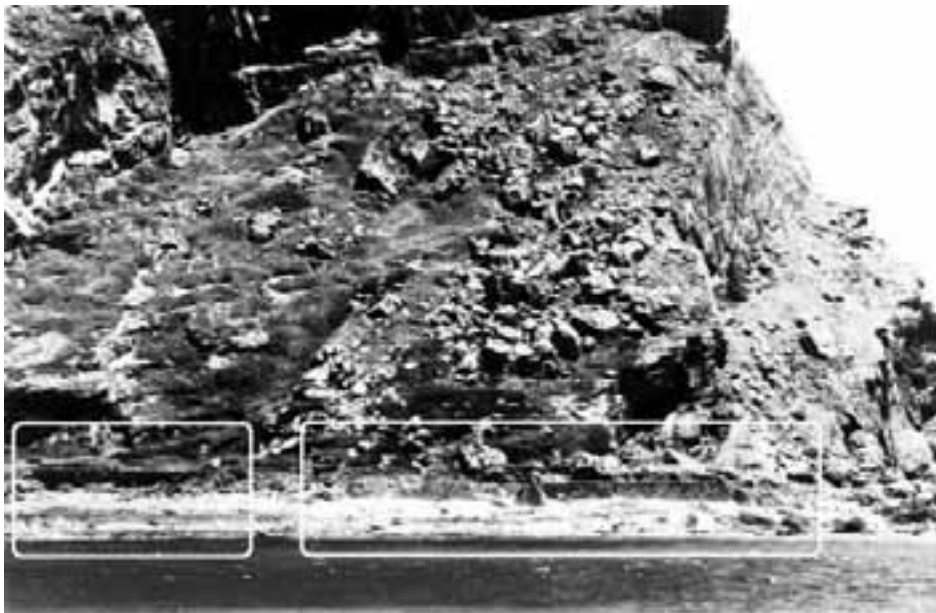
同じく後方の岩山から撮影した。海岸沿い A 地区の全容はほんのりと分かる。内側は草木がうっそうと覆いかぶさっていて、B 地区の石積みは顔を覗かせているだけ。



(新納義馬 1979)

1991年琉大生物グループによる調査

対岸の北小島岩山から撮った写真である。右に A 地区、左に B 地区の石積みが見える。この方角から撮った 1971 年時と見比べたら、あの当時の姿のままである。



右口印は A 地区、左は B 地区石積み、

(新島義龍 1991)

X、急ぐべし 南小島古賀村跡 遺跡調査も

1、2001年9月迷走台風16号、南小島も襲う

A地区石積み破壊される 東京都洋上調査写真から判明

2012年東京都洋上調査に石垣市職員が同行した。その時に撮った写真がこれである。海岸沿いの石積みが高潮、高波で破壊され、無惨な姿をさらけ出していた。



どの位長さあったらどうか、見事な石積みが両脇チョン切られて無惨な姿に（石垣市 2012）
最初は、まさかと思い、目を疑った。これほんとにA地区の石積みだろうか？
どこが壊れて、どこが失くなったか。破壊前の写真と見比べて見たら、間違いなかった。



左：1969年琉球政府警察局撮影、
A地区の石積み通用口付近

下：1991年撮影前掲写真のA地区を拡大した。○印が石積み通用口



B 地区の表石積み 破壊免れた 内側の遺構 無傷のまま？

2012 年度の写真見ると、かの迷走台風で A 地区石積み破壊されたが、B 地区は破壊を免れている。これまで、その内側斜面は木々に覆われて、どんな遺構が眠っているのか分からなかった。今回暴風除けのために築いた B 地区の表石積みは無事であるから、内側の遺構も無傷のままであろう。調査したら、どんな遺構、遺物が出てくるか、楽しみである。



B 地区の表石積みは破壊されずに残っている。反対右端に A 地区石積みが見える。(石垣市 2012)



1996 年の B 地区の表石積み写真。2012 年と比較しても破壊されていないことが分かる。(仲間均 1996)

2、古賀村跡の遺構・遺物 随所に確認できる。

南小島古賀村跡の石積み遺構は、B・C地区ならば随所に確認できるはずである。

両地区とも草木に覆われて、古賀はここに何を建て、何をしていたのか分からなかった謎に包まれた場所である。幸い、高台斜面に位置していたため、台風の高波、高潮の被害から免れている。今後の遺構・遺物調査が期待される。

カツオ節製造の漁師 興味深い証言 骨入っていた壺 薬瓶もあった

1950年、宮古漁民が古賀村跡に、数か月間も滞在し、カツオ節製造を行った。

興味深い証言を行っている。「(石垣が) きれいにつままれてある・岩と岩の間にコンクリーを流して・・きれいに風呂場に使っていた跡があるし、それから壺がたくさんあって、こう開けたら小さな子供たちの遺骨が出てきたり、小さな壺ね、所謂骨みたいなのが出てきたり・・目盛りの付いた薬瓶がまた沢山ありました・・僕達はそれを見たりしていたけどね」(「仲地行雄 尖閣研究 2012」)。貴重な証言である。壺にあったのが、子供の骨でなければ鳥剥製の骨とも考えられまいか、沢山あったという薬瓶は、剥製づくりに使ってヒ素を入れた瓶だったのでは？ 南小島に数か月間滞在し、古賀村跡をいろいろ見聞したのである。だが、彼ら漁師たちは殆ど亡くなっており、当時の証言が得られないのは残念である。

山の手石積みへの入口 遺構は確認できる

やはり実際の遺構、遺物を発掘し、調査するしかない。ここからは、幾つかの石積み遺構を見ていくことにする。C地区の石積み撮った写真はないので、B地区の写真を紹介する。



B地区山の手斜面に上る入口側の石積み。高波高潮から免れている。(仲間均 2002)

暴風と長年の歳月による崩壊も起きている



高台斜面が壊れているのは暴風と長い歳月の風化によるものか。(仲間均 2002)



このレンガ造りは何の跡？ 海鳥剥製作りの何かに使ったものなのか。(仲間均 2002)

洞窟付近跡 遺物も見つかるとは

この洞窟の前に家屋が 3 つほど建っていた。ここ付近掘り出せば、生活跡の遺物も出土すると思われる。



洞窟入口の広場
前の石積み、高
さ 2 メートル余
り圧巻である。
洞窟から海岸入
江まで続いている。
(仲間均 2002)

洞窟にあるレン
ガ造りの水タン
クで、「明治三十
九年十月辰ノ
水」と記されて
いるという。
貴重な遺跡であ
る。
(仲間均 2002)



以上が、南小島古賀村跡の石積みや遺構についての写真である。

南小島の古賀村遺跡は、魚釣島と同様に、先人が残した開拓史跡であり、貴重な文化遺産である。時の移ろいと共に崩壊は進みつつある。

このためにも、国や県は、遺跡（遺構・遺物）調査を実施し、魚釣島古賀村跡遺跡と併せて、日本近代化産業遺産群に認定し、急ぎ保全策を講じてほしい。

XI、終章― もしも、古賀が命長らえていたならば？

1、古賀の列島経営 略奪だったか なぜ写真がない？

撤退後のその後の動き

古賀の列島経営から撤退後の主な動きを新聞記事などから見ると

- 大正 2 年 1 月 県実業家らが集い荷主協会が組織され、幹事の 1 人に古賀辰四郎の名が見られる。
- 大正 3 年 5 月 八重山にて真珠養殖事業を開始。
 - 6 月 大隈重信首相は全国実業大会を開催、沖縄からは古賀以下実業者 4 人が県知事により推薦されて列席した。
 - 7 月 東京大正博覧会が開催され、古賀の受賞品は、銀牌：天然真珠、銅牌：鱧鱈ナマコの 2 点で、真珠は宮内省御買上(30 円)となった。
- 大正 4 年 6 月 県知事大味久五郎の下、県では産業十年計画を策定、古賀は例によって産業諮問委員の 1 人に選定された。
 - 9 月 米国桑湊博覧会に古賀が出品した貝殻原料は銀牌を受賞。
兄の古賀与助は鳥糞を出品して同じく銀牌を受賞している。
- 大正 5 年 3 月 東京で海事水産博覧会が開催され、古賀は貝殻類、海鳥、鼈甲を出品、銀牌を受賞している。
 - 4 月 沖縄県産業共進会で、古賀はナマコ及び鱧鱈を出品、一等賞を受賞。
 - 12 月 新聞に旅行中に付き「年末年始欠礼仕候 古賀辰四郎」とある。
年末年始は県外で過ごしているようだ。

大正 6 年以降も、ほぼ同様な動きである。

大正元年の被災以降、古賀は列島経営から完全に手を引いていることが分かる。

古賀の列島経営に対する 3 つの誤解

他方、尖閣諸島について関心を持ち研究している者の中に、古賀の列島経営に対して誤解している人がいる。誤解は概ね以下の 3 つに集約される。

誤解 1、古賀の尖閣諸島の開拓経営は、略奪経営だった。

その結果、アホウドリを絶滅させてしまった。

この見解は完全な誤りである。古賀は、アホウドリの保護者だった。

古賀が列島経営から撤退したため、アホウドリは乱獲され、絶滅早めてしまった。

この件については、先に詳しく触れた。

誤解 2、列島開拓は、アホウドリの乱獲や、事業が採算取れずに息詰まった。

その結果、古賀は尖閣諸島から撤退した。

この見解の誤りを正すのが本稿の目的である。累々述べたように、開拓経営が息詰ったからでない。突然の台風災害によって、古賀は道半ばで、撤退を余儀なくしたのである。

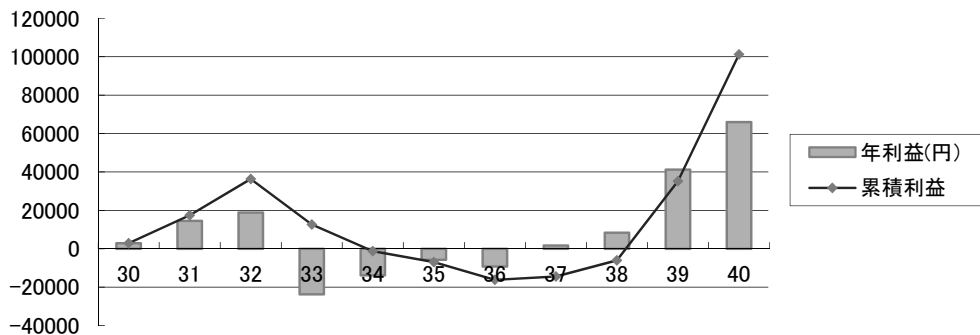
誤解 3、古賀は列島開拓でうんと儲けた。巨万の富を築いた

古賀は、蓄財、世俗的栄達を追い求める小商人ではない。パイオニア精神溢れる事業家である。古賀は「列島ニ対スル事業ノ経営ハ、将来拡張シ又新ニ着手スヘキモノ多々アリ」として、「帝国産業界ニ貢献」すべく、大きな目標に向かって突き進んでいた。

それが為、列島経営から得られた利益は、次なる事業への先行投資、開拓根拠地古賀村の諸施設建設に悉く費やしていた。

尖閣諸島開拓の利益と収支

列島開拓でどれだけの財を成したのか、「褒章資料」にある尖閣列島事業経営費と産物収入高(共に明治 30 年～明治 40 年まで)をもとに年毎の利益をグラフにしてみた。



開拓初期の利益は明治 32 年頃に絶頂を迎え、その後は開拓等に関する経費で赤字が続いているのが分かる。明治 34 年頃には積み上げた利益を使い果たしている。それから 5 年の間は開拓にかかる費用が収益を上回っている事を考えると、古賀がアホウドリ羽毛等で得た利益は、ほぼ全て列島経営に費やされてしまったわけである。

幾つかの論文などでは古賀のことを「尖閣諸島のアホウドリを捕獲し、巨万の財を為した人」と紹介しているが、それら多くのアホウドリは久場島及び魚釣島古賀村の船着場やレンガ造りの貯水槽、島に巡らされた石垣積みのみあぜ道へと化けた。と考える方が妥当ではないだろうか。さて、その後明治 39 年には海鳥の剥製事業と鰹節製造が本格化しており、累積利益は僅か 3 年で 10 万円を突破した。

この利益も、無論、これなる事業へ先行投資されたと考えられる。

2、古賀の写真の謎

性強情偏屈にして 人と容れざるは 甚だ惜しむべき處なり

古賀はスケールの大きい実業人である。先見性豪胆さ、合理的思考を備えている。

明治31年当時最新式の大坂商船の千ト超す大型船須磨丸を用船するし、東京帝国大学箕作博士の研究室を訪ねて、列島経営のアドバイスを乞うたりもした。カツオ船3隻新造し、翌年台風で失くしたら、すぐに5隻新造した。古賀の超凡性を語るエピソードは枚挙に遑ない。筆者は、古賀を知れば知るほど、「燕雀（えんじゃく）いづくんぞ鴻鵠（こうこう）の志を知らんや」の警句を思い出す。筆者ら燕雀ごときが鴻鵠（古賀）の大志を理解するのは至難である。古賀はスケールが大き過ぎて、とても理解できる人間でない。

往時の「沖縄県人事録」は、古賀辰四郎を次のように評している。

君は少時より実業界に身を投じ、其明晰なる頭脳を以て事毎に画策宜しきを得、殊に機を見るに敏なる、実に天賦と称するも不可なし。・・君の如きは真に代表的実業家と称すべきも、性強情偏屈にして人と容れざるは甚だ惜しむべき處なり。

（「沖縄県人事録」 檜原友満編 大正5年刊）

人事録の紹介は褒めたたえるのが通例だが、貶されているのは例を見ない。それほど理解できない変わり者だったのだろう。

古賀は、写真についても変わり者である。

前置きはこれだけに止めて、この写真について触れたい。

「燕雀いづくんぞ鴻鵠の志を知らんや」を承知で、勝手な推論を進めていく。

古賀の写真の謎 大官貴顕と撮ったはずなのに 皆無？

古賀は多くの栄誉、栄典に浴した。

履歴を見ると、実に華々しい。

明治32年11月には奈良原沖縄県知事に随行し南清・香港貿易調査に赴いている。

明治42年水産業発展振興と列島開拓の功績が認められ藍綬褒章を授与された。

大正3年大隈首相、全国実業家の代表にを招致するや、沖縄県の代表として参加した。訪問や褒章授与、大会参列で多くの大官貴顕と一緒に撮った写真、記念写真が沢山あるべきだ。だが、息子善次のアルバムには1枚もないようだ。

肖像写真も1枚もない。遺影写真もない。あるのは尖閣諸島で撮った写真だけである。明治41年時に撮影したのが主で、全部集めても10数枚はあるか。

その中から、古賀が写っている6枚を示した。これ見ていると実に魔訶不思議、理解に苦しむ。なぜもっと写真は無いのだろうか？ かねがね疑問に思っていた。



古賀が写っていると思われる6枚の写真。下列右端は列島経営と無関係である、この写真説明は次頁に記す

列島経営から撤退 これ愧じ入り 写真・書簡 処分した？

明治42年藍綬褒章を授与された。

古賀は、「列島ニ対スル事業ノ経営ハ、将来拡張シ又新ニ着手スヘキモノ多々アリ之カ経営ノ目的ヲ達セハ、帝国産業界ニ貢献スル所頗ル大ナラン」と明言していた。

列島経営は、人生の全てを賭けたライフワークであり、己の志とする所、使命だった。

艱難辛苦を乗り越えて、ようやく事業は順調に滑り出していた。これからが本領発揮であり、万事が順風満帆の途にあった。ところが、突然の台風襲来で、古賀村は一瞬に壊滅し、全てが無に帰した。古賀は、己の志、使命が道半ばで頓挫したのは、不徳の致す所とした。列島経営から撤退し約束違えたことを深く愧じ入り、己は藍綬褒章を受章するに値せず、返却すべきとした。古賀は誇り高き明治人だった。男子たる者かくあるべしとの気高い精神を堅持していた。古賀村が消え失せた今、榮譽も、名声も、何の意味があるうか。

これら是一切滅却すべきとして、己の過去を葬り去ろうとしたではなからうか。

古賀の榮譽を顕す様々な記録、大官貴頭との記念写真、書簡、綴り書、その中に克明に記していたという日記もあったかも知れない。

古賀は、これらを生前に処分したのではないかと考えられる。

だが、古賀村で撮った幾つかの写真は、息子善次のアルバムに残されている。
これらは、どうしても処分できなかったのだろう。

謎の一枚の写真 大東島探検時の漁師たちと

さらに不思議なのは、大東島探検に赴いた時の漁師と撮った写真が残っている。

明治 24 年古賀辰四郎は大東島の一部開墾を出願許可される

明治 25 年汽船大有丸で漁夫 31 人引き連れて、南大東島に到着、風波荒く、みすみす島を目前して、上陸を断念帰航する。探検の出発前に撮った写真である。

これがなぜ残されていたのか不思議である。

この写真見ていると、玉置の大東開拓に深い関心を懐いていたようにも思える。

古賀の列島開拓は、玉置の大東開拓に倣っていたかも知れない。



明治 25 年大東島探検に赴いた古賀（○印）と 31 名の漁師たち。（「南大東村史」より）

大東開拓 断念したのは 生涯の不覚

明治 33 年 1 月玉置範衛門の開拓団一行は、南大東島への上陸に成功、島の開拓に着手し、サトウキビを栽培している。

明治 35 年には、早くも製糖工場を設置し、翌 36 年 1 月製糖を開始している。

古賀がカツオ漁を始めた明治 38 年 11 月には、玉置の開拓村は移住民 93 戸人口 422 名に発展している。年々製糖事業は軌道に乗り、移住民も増え、明治 41 年には玉置小学校が開校している。また、移住民に対する開墾地の割当ては 1 戸 1 万坪となり、同 41 年度砂糖産出高 8,030 樽に拡大している。翌 42 年 6 月の戸数 197 戸、人口 824 名となった。

島には、病院や学校、トロッコ鉄道や防風林も整備された。

玉置は、大東島の地の利を活かし、砂糖王国の建設を成し遂げつつあった。古賀は大東島

開拓が大きな障害なく進展していくのを、傍目に見て、羨んでいたかも知れない。

大東島の開拓断念したのは、生涯の不覚と言っていた。

とはいえ、大東島開拓が地の利を活かすなら、尖閣諸島には眼前には、魚の宝庫の大海原が広がっている。古賀の列島経営は、この天然の恵み、海の利を活かして、カツオ王国建設を成し遂げつつあった。だが、大正元年8月に台風が襲い、古賀村は壊滅し、古賀の壮図は道半ばで頓挫した。その年翌9月には、大東島も開拓以来の大暴風に襲われた。死者4名、人家倒壊多数の被害を記録した。

3、巨星落つ 大正7年8月28日 63歳で亡くなる

古賀の大正6年以降の動きを見てみよう。

6年元旦の琉球新報広告に「旅行中に付き年末年始欠礼仕候 古賀辰四郎」とあり、9月21日には水産集談会が開かれ古賀他10名を水産功労者として表彰したとある。

翌大正7年の琉球新報は5月31日までしか確認できないため、6月以降の動向は明らかでない。だが、この年8月28日に死亡している。どこで、如何なる病で、亡くなったか、葬儀の様子は一切分からない。息子善次も記していない。

古賀は7年前に八重山で弟光蔵を病で亡くしている。「葬儀広告：弟光蔵予而病氣之处養生不相叶昨十日午前十時八重山に於て永眠致候間此段生前辱知諸氏に謹告仕候也 追而葬儀は本日八重山に於て執行致候 明治四十四年二月十一日 実兄 古賀國太郎 古賀與助 古賀辰四郎一」（沖縄毎日明治44.2.11）とある。

思うに、兄國太郎、與助は、辰四郎の病状を心配して、急ぎ沖縄から大坂に呼び寄せ、万全の治療を施すため、大阪の病院に入院させたかも知れない。

だが治療の効なく、病状は日増しに悪化していったようだ。

病床に伏して、死を覚悟した古賀の脳裏には、越し方の様々な思いが去来したではなかろうか。目を閉じれば、天空を乱舞する海鳥と潮騒、切り立つ断崖の魚釣島、懐かしい古賀村の家並み、活気と喧騒に満ちた開拓光景、それら一コマ、一コマが臉に浮かんだであろう。

あの古賀村は、己が全身全霊賭けて造り上げ、あれ古賀の王国ならずやと驚嘆され、殷賑極めていたのに、朝露のごとく、一瞬に消え去ってしまった。

己の一生は、この朝露に似たはかない一生であったのか。

筆者の頭によぎったのは、太閤秀吉の辞世の歌だった。

古賀は病床に横たわって、今は大坂にいる。若かりし頃は鹿児島から兄弟揃って大坂に来、兄たちはそこで店を構え、己は沖縄に移住したが、商用でここへ足繁く通った。

商都大阪には、大阪城がそびえており、古賀は万感の思いで仰ぎ眺めていただろう。

大阪城の太閤秀吉公に、病床に伏した古賀の心境が重なった。

己の一生は、和平山(魚釣島の別名)に、賭した一生だった。

露と落ち、露と消えにし、我が身かな

和平のことも、夢の、また夢

粉骨砕身の覚悟で、列島経営に奮闘し、身を挺してきたのだから、たとえ全てが朝露の如く消え失せようと、己の一生に悔いはない。そんな心境ではなかっただろうか。

大正7年8月28日古賀辰四郎は、享年62歳で亡くなった。

道半ばでの早過ぎた死であった、まさに巨星落つである。

大正元年8月28日に、台風で古賀村は壊滅し、列島経営から撤退した。

それから6年後の8月28日に、奇しくも台風被災した同じ日に亡くなった。

4、早死にせずに 命長らえていたならば

コンクリート恒久建物 古賀村に建設

古賀が、もしも、早死にせずに、命長らえていたならば、どうであろうか。

世界の真珠王と言われた御木本幸吉は、昭和29年(1954年)に96歳で亡くなっている。

古賀が沖縄に渡った明治12年代には、御木本は米穀商から海産物商に転じている。

二人を引き合わせたのは、泡盛から夜光貝、高瀬貝の取引を通してであろう。古賀に帝国大学箕作佳吉教授を紹介したのも彼である。箕作の推薦で久場島(黄尾島)調査した宮嶋幹之助の論文には、協力者の一人として御木本の名が記されている。

古賀は、列島経営から撤退したあと、大正3年5月には、御木本と八重山で真珠養殖事業を始めたことは前記した。

彼の亡き後、古賀商店八重山支店は、戦争直前まで、御木本と養殖種貝の取引を続けている。

古賀は安政3年(1856年)、御木本は安政5年生まれで、古賀が2歳年長である。それにしても、彼の62歳の死はあまりに早過ぎた。

もしも命長らえていたならば、昭和元年(1926年)には70歳、昭和11年(1936年)には、年齢80歳になる。御木本のように長命ならば、終戦翌年の昭和21年(1946年)には90歳である。このようにみえてくると、古賀は遠い時代の人間ではない。



古賀商店八重山支店から御木本真珠養殖場宛の真珠母貝代金請求書(昭19.2.25発行)
(沖縄県公文書館所蔵)

明治42年には石垣島測候所は、台風に耐えられるレンガ造り2階建に改築されている。大正半ばから昭和に入ると、コンクリート造りの建物が建ち始めた。

昭和19年には、東京中央気象台長藤原咲平は、尖閣諸島は気象学の要衝に位置して

いるとして、魚釣島に、台風に耐え得るコンクリート造り測候所新設を計画したが、戦時下で断念した。

賢明なる古賀のことだから、コンクリー恒久建物に興味を懐いていたのは、十分考えられる。もしも、彼が病に倒れず、健康で命長らえていたならば、捲土重来を期して、再起を図っていたに違いない。その時は、昭和期まで待たずして、コンクリー造りの恒久建物が立ち並ぶ開拓根拠地古賀村に変貌していたかも知れない。

これら恒久建物は、台風にも吹き飛ばされず盤石である。ならば、列島経営の火は消えることなく灯されて、限りなく発展を遂げていたものと思われる。

尖閣諸島海域 国内有数の好漁場 各地から 漁船が蝟集 操業

明治 40 年代には、漁船は帆船から、発動機船に切り替わりつつあった。これにより沿岸から沖合へ、遠洋漁場での操業が可能となった。このため、台湾総督府、鹿児島、宮崎、長崎の各県試験場は試験調査に乗り出し、新漁場発見が相次ぎ、操業範囲は拡大しつつあった。

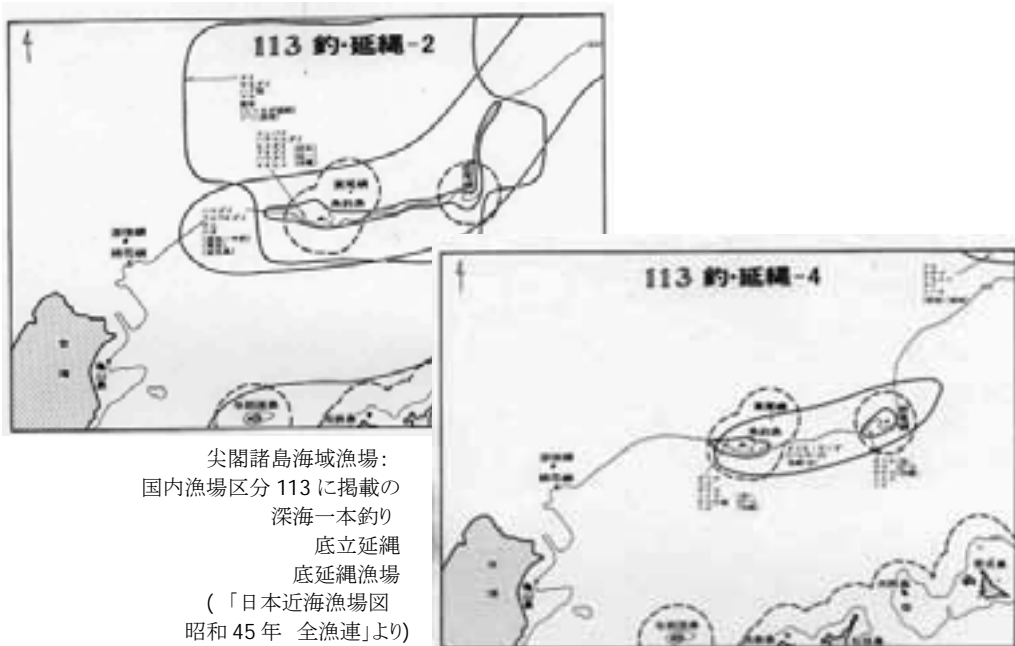
発動機船の出現は、尖閣海域が、有望な漁場として着目される幕開けだった。

大正期には、サンゴ、カツオ、マグロ、カジキの好漁場として、国内各地から漁船が蝟集した。底魚の漁場としても着目され、深海一本釣船も入り混じって賑わいを見せた。

尖閣海域は、黒潮回廊の東シナ海に位置する国内有数の漁場となった。

また、海域は、多くの種類の魚、寒暖の魚が集まり、多様な漁法も可能だった。

昭和 45 年(1970 年)、全漁連は、全国の漁協、都道府県の水産試験場にアンケート調査し、「日本近海漁場図」を作成した。同漁場図では、尖閣海域は、国内漁場海域区分 113 として、底曳網、まき網、刺網、釣・延縄の 7 漁場図が示されている。



地元沖縄県も、下表に示すように、様々な漁業・漁法を営んでいる。

カツオ漁・カツオ節製造、マグロ延縄
カジキ突ん棒、カジキ曳縄
ダツ・トビウオ追込み、グルクン追込み
深海一本釣、底立延縄、底延縄
サバ跳釣・棒受け、曳き縄
電灯潜り、サンゴ網漁



右列 上：カジキ追う突ん棒（大分臼杵） 中：クロマグロ水揚げ（八重山）下：深海一本釣り（鹿児島指宿）
左列 上：ヤイト一本釣り（宮古伊良部）中：底延縄（糸満）下：深海一本釣り魚のセリ市場（那覇）

古賀の夢は 漁業王国？ 魚釣島古賀村に 一大漁業基地 建設

発動機船の出現は、尖閣海域にも、各地から漁船が押しかけるなど、大きな変化をもたらした。大正末期から昭和初年頃には、カツオ船、マグロ船、カジキ突船、サンゴ船がこぞって操業した。多くの漁船が尖閣海域を行き来し、国内有数の漁場として賑わいを見せていた。

その只中に、魚釣島古賀村は位置していた。だが、そこには古賀の姿はなく、列島開拓拠点の古賀村は、台風で被災し廃墟のままだった。八重山古賀支店から1年契約で派遣された漁師たちが寝起きする粗末な小屋が数軒佇んでいるだけだった。

もしも古賀が存命していたなら如何せん？ 筆者は勝手な想像をめぐらしてみた。

古賀村は往昔の茅葺の家並みから、コンクリート造りの工場、事業所に建て替わっていた。村の中央、鯉釜納屋の石積み前には、創業時の範に則り、国旗日の丸が高々と掲げられて、ヘンポンと翻っている。今カツオ漁の真っ盛りか、林立する工場の煙突から勢いよく黒煙が上がっている。製造場前の広場には、でき上がったカツオ節が一面天日干しされている。

その横には出荷待ちなのか、カツオ節が箱詰めされうず高く積まれている。海岸に目をやれば、掘割は大きく拡張され、何隻かの漁船、運搬船が出入りし、沖待ちの船もいる。

栈橋では、海の男たちが魚の水揚げや荷物の出し入れで忙しく動き回り、怒号と喧騒で喧しい。よく見ると海岸端には、サンゴも並べられている。接岸している漁船はサンゴ船だったのか。漁師たちは白、桃、赤と水揚げしたサンゴの仕分け作業に余念がない。

古賀はカツオ節製造に多大な期待を持ち、列島経営の要としていた。この光景から察するに、カツオ漁は大きく進展し、カツオ王国の夢は実現しつつあるようだ。加えて、一度は諦めたサンゴ漁にも、発動機船を拵えて再挑戦を果たし、成果を収めつつある。

だが、パイオニア古賀の壮図は、カツオ、サンゴだけでは満足しない。

海の方では、突き船がカジキを追い回している。マグロ船甲板では男たちが声掛け合いながら揚縄の最中だ。食いついたマグロが波間から姿を見せた。10数匹の大物たちだ。

古賀は、尖閣海域で繰り広げられる勇壮な光景を見て、如何なる夢を描いたのだろうか。道半ばで亡くなった彼の壮図、鴻鵠の志は知る術はない。

だが、カツオ・サンゴ王国から、さらなる躍進を遂げれば、その先は漁業王国に帰着する。ならば、古賀の列島経営の究極は、漁業王国の実現だったのではないか。

尖閣諸島海域は、東シナ海の黒潮回廊に位置し、国内有数の漁場である。

カツオ、マグロ、カジキ、底魚などの好漁場として全国各地から漁船が蟄集している。

古賀は、この只中に位置する魚釣島古賀村に、一大漁業基地建設を夢見ていたかも知れない。この壮図こそが、国家への貢献、即ち「列島ニ対スル事業ノ経営ハ・・帝国（わが国の）産業界ニ貢献スル所頗ル大」なる所以、己の使命と見なしていたからである。

古賀の早過ぎた死は、沖縄のみならず、日本国家にとって大きな損失だった。

列島経営から撤退が招いたもの 台湾中国の横暴 政府の弱腰姿勢

1968年国連のエカフェが東シナ海尖閣諸島に石油賦存の可能性が高いと報じた。

1978年4月11日早暁、尖閣諸島付近の海上に夥しい数の船影が姿を現した。

マストに五星紅旗をひるがえした中国武装漁船団で、その数200隻余りを数えた。

1970年10月中国は尖閣諸島の領有権を初めて主張したが、その8年後、エカフェ発表から実に10年後、突如武装漁船を仕立てて、押しかける謀略を仕掛けてきた。

中国武装漁船団は、海上保安庁の巡視船の警告を無視して、領海侵犯を繰り返した。

漁民たちは尖閣海域へ出漁できず、中国側の横暴に怒ったものの為す術はなかった。

国会は紛糾し、日中友好条約の締結を、即時棚上げせよと強硬意見も飛び出した。

だが、政府は、ただ抗議するだけで、的確な手も打てず、オロオロ狼狽するだけだった。

中国側の退去で、事件はうやむやに付されたが、中国はほくそ笑んだであろう。

日本政府がどんな出方するかを探る予行演習は、予想外の好結果が得られたからである。

1992年2月25日 中国は尖閣諸島を中国領土とする国内海洋法を制定した。

さらに2010年10月21日、中国外務省馬朝旭報道局長は、「尖閣諸島海域は、“中国漁民の伝統的漁場”である」と声明した。

1972年2月には、台湾も「宜蘭県蘇澳の漁民が戦前から尖閣諸島を漁場利用していた」として、宜蘭県に編入した。2005年、台湾は、尖閣諸島を自国海域にした台湾暫定執法線を設定し、八重山・宮古諸島を除いた海域に漁業権を主張した。

明治40年代に発動機船ができて、尖閣海域に出漁できるようになったのだが、なぜか。中国は、帆船手漕ぎ船の昔から、「尖閣諸島海域は、“中国漁民の伝統的漁場”」だったと、また台湾も、「宜蘭県蘇澳の漁民が戦前から尖閣諸島を漁場利用していた」と言明している。この主張が誤りであるのは明らかだ。いったい、どんな船で、何の魚を獲りに、潮の流れが速く、波高く危険極まりない尖閣海域くんだりに出漁していたと言うのだろうか。

もしも、古賀が命を長らえていたなら、列島経営は絶えることなく綿々と続いていた。

開拓根拠地魚釣島古賀村は、一大漁業基地として、大きな発展を遂げていた。

ならば、台湾中国のこんな横暴に付け入る隙など与えなかったはずである。

尖閣諸島は、れっきとしたわが国領土である。古賀は、尖閣諸島に高々と国旗日の丸掲げ、日本領土であると誇示していた。にもかかわらず、情けないのは政府の弱腰対応である。

台湾中国の外交攻勢の脅しに屈し、尖閣諸島へ自国民の上陸を禁止してしまった。

地元石垣市も、沖縄県も、国会議員も、何人も、上陸してはならないと。

戦後の日本の不幸は、政治家たちが、領土を守る気概と勇気を、誇りと信念を、志と叡智まで失ったことである。領土主権を侵害されても、中国を怒らすまいと、姑息な手段、事勿れ主義に終始し、主権国家として断固とした措置もとれずに、とろうともせず、国家百年の大計を見誤っていることである。もしも、古賀が生きていたなら、この無様な状況に対しどんな思いを懐いただろうか。きっと、吃驚仰天し、怒り、悲しみ、嘆いているに違いない。

5、尖閣諸島に “ヘンボンと日の丸” 古賀一族の誇り也

古賀 4 兄弟 故郷八女山内村の山中に 静かに眠っていた

2018 年 9 月のある日、筆者らは、大阪の梅田にいた。

原稿は、もう終わりに近づいていた。だが、一つだけ気がかりがあった。

古賀の故郷福岡八女にあったお墓に、藍綬褒章受章のことが書かれていると聞いた。

これを最後に見たいと考え、古賀家ゆかりの人から、この墓碑の写真を見せてもらうために大阪にやってきた

宿泊したホテルのロビーで会う約束をしていた。

初めて見る古賀一族は、強面異相の猛者かと少し緊張していた。現れたのは人のよさそうな初老の紳士だった。古賀安德氏(76)である。

氏の曾祖父と辰四郎兄弟は従弟同士になり、家業が代々の茶づくりだったため。辰四郎が沖縄に渡った当初は、曾祖父が八女茶を送っていたようだ。

長男國太郎、次男與助、三男辰四郎、四男光蔵が亡くなったあと墓地は、生まれ故郷の八女山内村に建てられた。安德一家は、代々古賀 4 兄弟の墓守をしていた。

お墓は與助と辰四郎の 2 人は合同墓、國太郎と光蔵のは単独墓だった。

安德氏も、高校の頃まで、國太郎と與助は大阪古賀、辰四郎と光蔵は沖縄古賀と教えられ、この墓地掃除を手伝っていたという。

昭和 36 年学校卒業すると、大阪古賀の引きがあって、ここ大阪に来た。その 2 年後の 38 年に、墓地が手狭になり、整理することになり、遺骨は、真如寺納骨堂に納めることになった。墓標は地面の下に埋めたが、埋める前に、父親の六郎が、記念にと写真に撮っていた。

件の藍綬褒章の碑文は、與助と辰四郎 2 人を祀った合同墓に刻まれていた。



前出：與助と辰四郎の合同墓と國太郎の墓。
光蔵の墓は離れた所に建立（古賀安德提供）

沖縄古賀 無人島持っている偉い人 沢山寄付してくれた

安德氏は、小さい頃から、この碑文を見て育った。大阪古賀と沖縄古賀のことが書かれていたが、難しい漢字と昔の文語体で書かれ、子供には読めなかった。大人たちから、この墓に祀られている 4 兄弟は、八女山内村出身の立派な人たちだ。故郷に恩返しをするために村の天満宮にも、小学校にも、沢山寄付をしている。また、この沖縄古賀は、何でも、沖縄に無人島を持っている偉い人であると聞いて、自分たちの先祖に、親戚に、こんなすごい人がいたんだと誇りに思ったそうである。

長じて、碑文を読めるようになると、大阪古賀の國太郎、與助のこと、沖縄古賀の辰四郎のこと、無人島は尖閣列島という名の島で、沖縄古賀はこの島を開拓していたことなどが、次第に分るようになった。寄付金の石碑もあった。明治 30 年山内区天満宮に國太郎、與

助、辰四郎、光蔵兄弟4名連名で、金十円寄付していた。また末弟光蔵は明治44年50歳で亡くなっているため、大正6年金百円の寄付は、國太郎、與助、辰四郎3名連名となっている。また故郷の川崎小学校に村立図書館も寄付していた。これは目を張る立派なものだった。いつ頃寄付したか分からない。合同墓の碑文に「川崎小学校ノ村立図書館ハ與助ノ寄付スル處其他各面ニ寄附セシ金額頗ル多シ」とあり、大正7年に辰四郎が、翌8年には國太郎が亡くなっていることから、大正9年以降に寄付と思われた。



天満宮への寄付金、右：明治30年4兄弟連名金拾円
左：大正6年3兄弟連名寄付金百円（古賀安徳提供）

この図書館は戦災にも遭わず残り、安徳氏の小学校の頃は、校舎から渡り廊下を歩いて行けて、子供銀行？の行事も、この図書館で受付してやったという。その後学校用具格納庫として使われていたが老朽化した。氏は、数年前校長先生から「危険だからとり壊したいが」との電話をもらい、承諾の返事したので、今は片付けられて、建物はないとのことだった。



氏は、屈託ない笑顔で話を続けた。「沖繩の辰四郎さんの息子の善次さんも子供はいません。こっち（大阪）の國太郎さん、與助さんの孫たちも亡くなってますね。もうひ孫の時代かな。結局一族の中では、もう私なんか年長ですから。気が付いたらもう長老格です（笑）。辰四郎が長命であったならば、終戦翌年の昭和21年(1946年)には90歳の年になる。そんなに遠い時代の人間ではないと思っていたが、早や、ひ孫玄孫の時代になっていた。

與助が寄付の川崎小学校村立図書館。左は小学校校舎
昭和20年頃運動場に居並んでいる光景（熊谷恒樹提供）

秘められたドラマ 偉業と栄誉 墓碑に刻み 末代まで伝え残す

碑文の話に戻ろう。墓の写真を見ると、兄與助と弟辰四郎は一つの墓標に合同で祀られている。正面に二人の名前が刻まれ、あとの3面には、右回りで、與助の事蹟、辰四郎の事蹟と藍綬褒章受章の栄誉が刻まれている。昭和6年與助は享年80歳で亡くなっている。

この墓は、その後の昭和9年頃に建てられたとのことである。

墓の碑文の写真を見せられた時には、驚いた。辰四郎の列島経営の偉業と褒章受章の栄誉

を語る文字が深く刻まれ、大きく踊り出ている。辰四郎は道半ばで頓挫したため、己の不徳の致す所とこれを愧じ入り、榮譽を語る一切の記録は消し去っていた。息子善次のアルバム写真にも受章の写真はなかった。それが故郷八女山内村の山中に、兄與助の事蹟とともに、人知れず眠る墓碑に記されていたのだ。感動せざるを得なかった。與助の事蹟はⅡ-4に記した。以下、辰四郎の事蹟と褒章受章の榮譽の碑文を記す。

辰四郎ハ與助ノ弟ナリ資性温良決断力ニ富ミ其
 観点非凡ニシテ常人ノ企テ及ベザル事業家ナリ明
 治十二年始メテ琉球島(今ノ沖縄縣)ニ渡航スルヤ此
 處ヲ以テ將來勇躍ノ地ト定メ最初國産製茶ノ輸出
 ヲ企テ郷里筑後産茶ハ勿論鹿兒島大阪等ヨリ實兄
 弟ノ手ヲ經テ盛ニ琉球島ニ輸入シ之ガ販賣ヲナシ
 又砂糖其他ノ物産ト交易ヲナス基礎定マルニ及ビ
 全島一帯ノ沿岸海産物ノ豊富ナルニ着眼シテ之ガ
 採集ニ熱中シ就中尖閣列島(無人島)ノ開拓ニ努力スルコト多年其功績ニ依リ其筋ヨリ
 藍綬褒章ヲ下賜セラル左ニ其全文ヲ謹寫ス

日本帝國褒章之記

沖縄縣那覇區字西 古賀辰四郎

資生温良夙ニ海事思想ニ富ミ、明治十二年福岡県ヨリ移住シ那覇ニ本店ヲ置キ、爾
 來殖産ノ業ニ從ヒ銳意多年海産物ノ撈獲輸
 出ヲ為シ、又尖閣列島ヲ探險シテ許可ヲ得識
 者ニ謀リ永住的設備ヲ施シ以テ移民ヲ勸奨
 シ水禽ノ剥製鳥毛魚介ノ採取肥料ノ製造等
 多方經營ニカヲ尽シ、明治四十年ノ如キハ産
 物採取価額拾參万四千余円ニ達シ且將來ヲ
 追フテ發展セントス、一般水産業ノ進歩ニ資
 シ漁民ヲ裨補スル事尠カラズ。洵ニ公衆ノ利
 益ヲ興シ成績著明ナリトス依テ明治十四年
 十二月七日勅定ノ藍綬褒章ヲ賜ヒ其ノ善行
 ヲ表彰セラル

明治四十二年十一月二十二日

賞勲局總裁從二位勲四等伯爵 正親町實正

古賀辰四郎の列島経営は歴史に残る大偉業である。昭和9年には、古賀一族の人たちが、



合同墓の2面に辰四郎の事蹟と藍綬褒章の碑文がある。(古賀安徳提供)



藍綬褒章の榮譽を大書。受賞は一族の誇りでもあったことが碑文から伝わってくる。(同上)

沖縄古賀のこの偉業を、受賞の榮譽を、墓碑に大書し、一族の誇りとして、大切に見守り続けていた。碑文に深く刻まれた文字1つ1つからも、それがヒシヒシと伝わってくる。

この墓碑は、古賀の生まれ故郷の八女山内村の山中に、人知れず佇み、他所に知れ渡ることもなく、古賀の偉業と榮譽は一族の末代までの誇りとして、親から子へ、子から孫へと代々語り継がれていたのだ。尖閣諸島に纏わる秘められたドラマである。

“古賀の無人島に ヘンボンと日の丸” これ一族の誇り也

古賀の無人島が、40年後に、突如、国際的に脚光を浴びた。

安徳氏は言う。「私が墓掃除していて、その頃までは、いや、そのあとも、一切何もなかったです。尖閣列島に石油が出るからということで、いきなりですよ、それから皆大騒ぎでしたね（笑）」。古賀一族の人々は、沖縄古賀の無人島が問題になったのに驚いた。

彼らの心配をよそに、台湾中国からの領有権主張となり、問題に大きくなるばかりだった。

テレビで大きく報じられる度に、古賀の三男辰四郎は、とてつもない偉いことをしていた人だったと感心するしかなかった。今や、中国は、尖閣に武装公船を常駐させ、領海侵犯を繰り返し、武力攻勢、外交攻勢を緩めない、日本政府は対応に苦しんでいる。

安徳氏は言った。「・・・、古賀辰四郎さんが 尖閣諸島に、あの日の丸を掲げてくれたことはよかったです。私たちは、こういう人が先祖にいたというのは大きな誇りです」。



「島に日の丸を高々と掲げたことは、日本の国に対して、国家に対して大変な貢献です。私ら古賀としては、立派な誇りです。ここは日本の領土であることをはつきり示していますから。これがあるかないかで、全然違いますからね」。

筆者は古賀一族の長老がつぶやくこの言葉に感動した。古賀辰四郎の列島経営の精神はこの一言に表れている。非常に重みのある言葉ではないか。100年の時を経ても、辰四郎の精神と志は、一族の中に脈々と受け継がれ、今なお生き続けている。秋晴れの空に、心地よい風が吹き抜ける、そんな清々しい気分になって、大阪を後にした。

7、古賀の死後、「顕彰碑」「開拓記念碑」建つ

古賀村跡に 60年後に「古賀辰四郎翁顕彰碑」建立

古賀の生涯 62 年間のうち、39 年間は沖縄での活動に専念し、その大半を列島経営に取り組んできた。八女市の山内村という地方は全く海に面しておらず、古賀来沖の初期の目的は郷里周辺で採れる山茶を沖縄に売り込むことだったというから不思議である。

福岡県の山中から出てきて青年が、沖縄県の実産物を県外へ売り出すことにより、いつしか沖縄の水産界をリードし、遙か洋上の無人島尖閣諸島を開拓するに至った。

この古賀の功績を、地元沖縄側で顕彰した形跡はない。

1970 年頃より沸き起こった東シナ海油田騒ぎの末に、島を買い取った栗原家が(財)古賀協会の名のもとに、昭和 53 年 (1978) 年魚釣島古賀村跡に「古賀辰四郎翁顕彰碑」を建立した。古賀の死から実に 60 年後のことである。



古賀村の開拓本部事務所隣、倉庫・雑庫跡近くに建てられたか、大理石の見事な造りの顕彰碑である。

(恵忠久 1996)

碑文の没年は大正 7 年 8 月 31 日とあるが 8 月 28 日の誤りである。(同上)



77年後、八重山支店跡近くに「古賀辰四郎尖閣列島開拓記念碑」建立

平成7年（1995年）古賀商店八重山支店跡近くの公園に、(財)古賀協会の名で「古賀辰四郎尖閣列島開拓記念碑」が建立された。彼の死から77年後である。



魚釣島を頭部に形どり、古賀辰四郎の列島開拓の偉業を顕彰している。



上：開拓偉業を記した碑文
左：記念碑の前台に、琉球列島図で尖閣4島の位置を示している。

「顕彰碑」も 消滅の危機に 国や県 急ぎ対応を

魚釣島古賀村跡に建てられた顕彰碑も、石積みの崩壊と連れ立って、消滅の危機にある。



古賀村跡の石積み崩壊して海岸一面に散乱している。そんな危険な中で顕彰碑は一人寂しくポツネンと佇んでいる。(石垣市 2012)



鯉釜納屋跡の石積みは、満身創痍で持ち耐えている。これを見守るかのように顕彰碑（○印）も懸命に持ち耐えている。このまま放置すれば、共に潰滅してしまうのは明白である。(同上)

これらは古賀の列島経営の歴史的偉業を証左するものであり、絶対に放置させ、消滅させてはならない。我々は、百年の悔いを残さないためにも、先人たちの偉大な事績を守り、これらを後世に、子々孫々にまで、正しく伝える義務がある。

最後に重ねてお願いする。国や県は、尖閣諸島古賀村跡の遺跡群を、急ぎ調査し、日本近代化産業遺跡群に認定するなどして、保全策を講じてほしい。 (了)

あとがき

今回、日本財団様の研究助成の最終報告とのこともあり、この機に、一部内容を変更しました。

I 章とII 章は、本調査のメインテーマである尖閣諸島海域の漁業についてです。

I 章は、漁業関係者からの聞き取り4編と寄稿論文 1 編から成っています。

II 章は、尖閣諸島で操業された漁業・漁法について図版・写真をとりまとめました。

III 章は、尖閣諸島の学術調査関連、IV 章は尖閣諸島開拓時代と古賀村跡に関連し、従前とは異なった内容になっています。今回、III、IV 章がこのように変更なったのは以下の理由です。

私共編集会が漁業関係者の皆様から聞き取り調査を始めてから、10 年の歳月が経過しています。その間、多くの漁師の皆さんが亡くなられています。今では、尖閣諸島で漁業をなされた貴重な語り部は、僅かとなり、年追うて消えつつあります。

他方、尖閣諸島の学術調査に従事された方々も劣らず厳しい状況にあります。

1950 年高良鉄夫先生が戦後初の尖閣調査をされ、総合学術調査団も組織され、調査活動も活発に為されてきましたが、1995 年を最後に、尖閣諸島学術調査は途絶えています。

高良先生は、1952 年に琉大学生 3 人、53 年に同 11 人、計 14 人を、尖閣諸島に連れて行きました。その半世紀後の 2006 年に、尖閣調査の思い出を語る高良先生との集いが持たれ、当時参加した 14 名のうち 11 名(1 名病没、2 名連絡不能)が一堂に参集し、思い出話に興じました。

2018 年の今日では、高良先生もお亡くなり、11 名の教え子たちも高齢となり、往時の尖閣調査を語れる人は数えるのみとなっています。歳月人を待たず、他の調査メンバーも同様です。

わが国は、地元沖縄県は、尖閣諸島の学術調査を連綿と行ってきました。これは、尖閣海域での漁業に劣らず、わが国の実効支配を証左する重要な歴史的事実です。ところが、1995 年以降、学術調査は全く為されておらず、このまま放置すれば、これらの事実は滅却されかねません。

戦後 1950 年～95 年の間、尖閣に学術調査に行かれたメンバーは、数えてみるに、100 名にも満たず、加えて、存命な方は少なく、漁業者より、深刻な状況で、一刻の猶予もありません。

調査された方々がお元気なうちに、学術調査に対する再認識・再評価が必要です。

このため、新納義馬会長(93)と上運天賢盛氏(87)に、急遽、調査体験記の執筆、併せて対談をお願いし、III 章は、新納会長の学術調査講演とお二方の体験記及び対談を掲載しました。

また、IV 章は、たまたま、会長が学術調査の際、久場島の屋敷跡から担いできた壺焼甕のことから端を発し、古賀村跡の遺跡調査に発展したお話をまとめました。

編集部も、会長の話に鼓舞され、ならば、魚釣島、南小島の古賀村跡に対する再認識、加えて遺跡調査も必要だということで、これまた、急ぎ、原稿をとりまとめてみた次第です。ただ、十分な検証、論証なしで書き綴ったため、稚拙の感は免れません、ご容赦下さい。

日本財団様には、これまで大変お世話になりました。2009 年度の第 1 回、2012 年度の第 2 回、2014 年度の第 3 回、今回 2017 年度の第 4 回。9 年間余りに亘るご協力で、漁業関係者百余名(延人数)から聞き取り調査を実施できました。今回、学術調査関係も 2 名加えることができました。

お蔭様で、尖閣諸島海域の漁業と学術調査についての貴重な内容を収録することができ、後世に正しく伝えることができます。ほんとに有難うございました。心からお礼を申し上げます。(了)

尖 閣 研 究

尖閣諸島海域の漁業に関する調査報告

－ 沖縄県の漁業関係者に対する聞き取り調査 －

2017 年

発行日：2018年 9 月30日

編集・発行：尖閣諸島文献資料編纂会

〒902-0068沖縄県那覇市大道40番地

TEL / FAX (098) 884-1958

印 刷：株式会社 国際印刷